みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

A Classification of Tibetan Dialects

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西, 義郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004359

「現代チベット語方言の分類」（11-4[1986]）

[正誤表]

① 中国国内の地名中の二地名がアリ地区=ガリ地区、アパ・チベット族自治州=ガパ・チベット族自治州のように読み方が不統一になっている。前者は、漢字読みで、後者はチベット語音読みである。

② 859頁の9行目：インドの地名ケラン(Kyelang)は、ケイラン(Keylang)と書いているものが多く、多分後者が正しい綴字であろう。

③ 860頁の20行目：サンクゥシャバ(Sankhuwa Shabha)→サンクワサバ(San-khuwasabha)に訂正。

④ 886頁の下から6行目：「髪」 *dbu-skra>u:ʈa(高調)→...>utr[ʈ]a(高調)に訂正。

⑤ 859頁の註(31)の最初の行：...トットケ(stod-skad)→トェケー(...)に訂正。

⑥ 864頁の註(33)の下から12行目：...でも[j]...→...でも[j]...に訂正。

⑦ 898頁のR.K.Sprigggの論著の部分の5行目の[Introduction to Sino-Tibetan. Part 1. Otto Harrassowitz.]は、前頁のRobert Shaferの論著の最後のところに入れる。[著者]

現代チベット語方言の分類

西　　義　郎*

A Classification of Tibetan Dialects

Yoshio NISHI

The first two sections provide a state-of-the-art report of the studies of Tibetan dialects, and then propose a classification of all dialects known to date, together with the geographical distribution of each of the six major dialect divisions: (1) Western Archaic Dialects, (2) Western Innovative Dialects, (3) Central or Ü-Tsang Dialects, (4) Southern Dialects, (5) Khams Dialects, and (6) Amdo Dialects.

There follows two sections devoted to a discussion of phonological, lexical and grammatical features chosen as classificatory criteria, with special reference to those advanced by Chinese scholars, and to the application of some phonological features, particularly those related to the development of tones to the classification of most Tibetan dialects spoken in the area to the southwest of China.

1. チベット語方言研究の現状
2. チベット語とチベット語方言
2.1. チベット・ビルマ語派とチベット語
2.2. チベット語方言の分布と分類
2.2.1. 中国国内のチベット語方言
2.2.2. 中国国外のチベット語方言
3. 方言分類の指標
3.1. 分類指標に関する幾つかの問題
3.2. 中国国内のチベット語方言の分類指標
3.3. 声調指標
4. 中央方言とカム方言以外の声調方言の分類
4.1. 非中央方言型の声調方言
4.2. 中央方言型と準中央方言型の声調方言
4.2.1. ネパールの諸方言
4.2.2. 南部方言
5. 結　語

* 愛媛大学，国立民族学博物館共同研究員

小稿は，国立民族学博物館共同研究（60～61年度）「アッサム地域研究」（代表者：栗田靖之）の成果の一部である。

1.　チベット語方言研究の現状

チベット・ビルマ語派のなかで最も広大な地域にわたって話されている言語はチベット語である。現在チベット語が話されている地域は中国のチベット自治区を中心とする青海，甘粛，四川，雲南の諸省とパキスタン，インド，ネパール，ブータンなどの隣接諸国の大ヒマラヤ山脈沿いの地域である[1)]。チベット語地域の総面積が一体どれぐらいあるのか正確なところ不明だが，中心となるチベット自治区の面積が約120万平方キロあり，これだけで約38万平方キロの日本の総面積の3倍強あることからもその地域の広大さが知られる。新中国になるまでは，この地域は四方を砂漠地帯，高山地帯や大湿原地帯といった自然の障壁や当時のダライ・ラマ政権の鎖国政策に妨げられ，外部の人々の容易に近付けない地域であった。このような事情から言語学者による本格的な現代チベット語研究が始まるのは，中国では新中国成立以後の1951年から，中国以外ではチベット動乱で多くのチベット人が国外に亡命し，世界各地へ離散する1959年以降のことである。勿論それまでにもチベット文語の文法や辞書，現代チベット語諸方言の簡単な文法と語彙集や短い単語表といったものが時折出版されていたが，ほんの一部を除けば，言語学者の手になるものはなく，質・量共に到底現代チベット語方言の全体像を明らかにしてくれるものではなかった。ただ例外的に一般に西部方言と呼ばれるパキスタンとインド北西部の辺境地帯に広がるチベット語方言については，H. A. Jäschke, A. H. Francke, T. G. Bailey, A. F. C. Read 等の著書や論文からその性格をかなり明確につかむことができたと思われる。

1949年10月1日中華人民共和国成立後の中国国内にける現代チベット語研究については，まず王堯「蔵語的声調」[1956] と金鵬「蔵語拉薩日喀則昌都話的比較研究」[1958] に始まり，瞿霭堂「卓尼蔵語的声調与声韻母的関係」[1962]，「蔵語概況」

1) 1982年の人口調査によれば，中国国内のチベット族の人口は，3,847,875人で，地方別の分布情況は，チベット自治区1,764,600人，青海省753,897人，甘粛省304,573人，四川省921,984人，雲南省95,925人で，その他の省・自治区のチベット族人口は，2,000人以下となっている。一方，ネパールの人口調査では，シェルパ族以外のチベット族は，総てボテ（Bhote=Bhotia）の名称で総括し，両者を合わせて，73,589人（1981年人口調査）となっているが，このボテとは，本来辺境の山岳地帯のチベット・ビルマ系住民も含めた呼称であり，必ずしもチベット族だけに限定されていない。インドの人口調査では，母語別（チベット語，バルティ語，ラダク語，ラフール語等）に分類し，全体としてボティア語群（Bhotia Group)/チベット語群（Tibetan Group）としている。その総人口は，207,353人（1961年人口調査）となっているが，この中には，特定されないボティア（Bhotia-Unspecified）が29,873人含まれている。パキスタンのチベット族人口は，手元に詳しいデータがない。インド・中国を含めたバルティ方言の話者人口がインド側の調査で40,236人[1971年]［Grimes (ed.) 1984］であり，その大部分はパキスタン居住者と考えられる。一方，ブータンの場合，全人口約116万人[1981年政府発表]の中の32%（371,200人）がチベット系とされている。（栗田靖之「ブータン・ヒマラヤの生業形態の多様性」（国立民族学博物館研究報告 11(2):257-488 参照）総計すると約450万人程となる。

[1963] と「蔵語的複輔音」[1965]，格桑居冕「蔵語方言概要」[1964] といった中国国内でのチベット語方言調査の成果が発表され，これまでの状態が改善され，現代チベット語の実態が明らかになって来たが，その矢先に中国に文化大革命の嵐が吹き荒れ，1976年に漸く終息するまでチベット語を含む少数民族言語の研究や出版活動は完全な停止状態に入る。文革終息後数年の混乱と準備期間を経て，1979年2月に『民族語文』誌が創刊されるが，それと共にチベット文語はもとより，現代チベット語研究は以前にもまして盛んになり，チベット言語学に携わる中国人学者の数も増え，その成果は，これに続いて復刊あるいは創刊された専門学術誌（『語言研究』と『中国語言学報』）や諸研究機関の紀要類（『中央民族学院学報』，『西南民族学院学報』，『民族学報（雲南民族研究所）』等）に主に論文の形で発表されるようになった。主だった論文を挙げると[2]，まずチベット語方言全体を概観するものに瞿靄堂・金効静の「蔵語方言的研究方法」[1981]，瞿「蔵語的声調及其発展」[1981a]，「蔵語韻母的演変」[1983] と「蔵語動詞屈折形態的結構及其演変」[1985a]，格勒「略論蔵語輔音韻尾的幾個問題」[1985]，譚克讓「蔵語擦音韻尾的演変」[1985]，胡坦「論蔵語比較句」[1985] 等がある。チベット語方言の一部を概観したものとしては，瞿「蔵語安多方言韻母演変情況提要」[1982a] と「阿里蔵語動詞体的構成」[1980]，譚「阿里蔵語的複元音」[1980] と「阿里蔵語構詞中的音節減縮現象」[1982a]，華侃「安多蔵語声母的幾種変化」[1983] 等がある。個々の方言に関する論文は，殆どが央中方言／ユー・ツァン[3] (dBus-gtsang[4]: 衛蔵) 方言に属するラサ (hLa-sa: 拉薩) 方言に関するものか，胡「蔵語（拉薩話）声調研究」[1980] のようにラサ方言を中心にするが他のチベット語方言にも触れたものである。この外にガリ (mNga-ris: 阿里) 地区の諸方言に関する瞿 [1980] と譚 [1980, 1982a] の論文がある。カム (Khams: 康) 方言に関する論文は，パタン (ñBa-thang: 巴塘) 方言に関する格桑「蔵語巴塘話的語音分析」[1985] と上に挙げた瞿と譚の論文に含まれるガリ地区のケルツェ (sGer-rtse: 改則) 方言のみである。アムド (A-mdo: 安多) 方言に関するものでは，瞿「蔵語中的異根

2) ラサ方言についての文献はここには全部を挙げていない。文献目録参照。尚，西蔵民族学院学報，西北（甘粛）民族学院学報や青海民族学院学報は手元にないので，1981年から1983年までの分は，[冬青　1984] を参照して貰いたい。

3) チベット名のカタカナ表記は，原則としてラサ方言的発音に従っているが，デルゲ方言のように慣用に従っている場合もある。

4) チベット文字の転写方式は，通常の方式と異なっているが，これは方言を扱う関係上止むを得ないというだけでなく，文語形をほぼ諸方言形の共通形式と解釈しているからである。転写法の詳細は，第三章の冒頭に説明してある。尚，方言名（いずれも地名）には，チベット名が綴字と共に分かっているもの，チベット名の漢字音写でしか分からないもの，中国名しか分からないものあるいは中国名しかないものの四種類あるが，第一種のものはその後にチベット名の転写形とその漢字転写形を，その他のものは，漢字転写形か中国名をそれぞれ括弧に入れて示した。

現象」[1982b] と華「安多蔵語（夏河話）中的同音詞」[1985] 等があるが，いずれも夏河方言を扱ったものである。単行本として，金鵬編『蔵語簡誌』[1983] とガリ地区の諸方言に就いての例外的に詳細な調査報告である瞿・譚『阿里蔵語』[1983] があるが，『蔵語簡誌』中の「方言」の箇所は恐らく主として瞿が分担したものであろう。これまでに中国で行われたチベット語方言調査の詳細（調査地点数，地点名，各地点での調査密度，調査項目の内容と数量）といったものは公表されていないので正確なことは不明だが，[瞿・譚　1983] に採録されている文例数 (191) と動詞の活用例も含めた語彙項目数 (1638) からみて調査項目も相当な数に上るものと思われる。以上の論文や著書に出てくる調査地点（○○話として挙げてあるもの）を単純に数えても，中央方言27地点，カム方言21地点，アムド方言26地点ほどに上る[5]。実際に調査が既に行われた地点あるいは現在行われている地点数は恐らくこの何倍かに上るのかもしれない。ただ，各地点での調査密度は余り高くないようである。ガリ地区の方言調査の場合は基本的には各地点でのインフォーマント（発音合作人）は一名のようである。いずれにせよ相当量の方言資料が既に収集されていると思われるが，これまでにまとまった資料が発表されたものは上に挙げた [金　1958] と [瞿・譚　1983] のみである。

中国以外の国々での現代チベット語研究は1959年以前にも P. M. Miller, R. A. Miller, R. K. Sprigg, K. Sedláček 等により中央方言，特にラサ方言の音韻体系に関する研究が発表されたが，本格的な現代チベット語研究が始まるのは，やはり1960年代に入り，亡命チベット人をインフォーマントにしてチベット語が直接研究できるようになってからであった。こういった研究が米国では Kun Chang（張琨）・Betty Shefts の "*A Manual of Spoken Tibetan* (*Lhasa Dialect*)" [1964] やその後 Chang 夫妻として共同執筆した諸論文 [1967, 1968 等] に代表され，後に Melvyn Goldstein・Nawang Nornang 夫妻の "*Modern Spoken Tibetan*" [1970], M. Goldstein (ed.) "*Tibetan-English Dictionary of Modern Tibetan*" [1975] や "*English-Tibetan Dictionary of Modern Tibetan*" [1984] となって結実した。しかし他の西欧諸国では，チベットの宗教や歴史の研究に専ら関心が向けられ，現代チベット語に関する研究は殆ど行われなかったもののようである。

一方日本では当時の東洋文庫のチベット研究室で多田等観（故人）と北村甫の両人

5) 中国語文献では，方言名（○○話）が県名で挙げてあったり，鎮名，公社名等更に細かく特定された地名で挙げてあったりする。例えば，[金鵬（編）　1983] の化隆方言は，青海省化隆回族自治県の方言となっているが，これが [華　1983] の青海省化隆（回族自治）県金源の方言と同じ方言であるのか明らかでないが，ここでは，そのような場合は同一方言と数えている。

が中心となり，3名のチベット人を招き，ラサ方言の研究やチベット文献の研究が行われた。ラサ方言研究の成果は北村のチベット語口語教材[6]となりチベット語講習会を通して，以後日本における数多くのチベット学やチベット言語学の専門家を養成することになるのである。しかしこういった成果はあったものの，その後約十年間というものは専らチベット語の標準語と考えられるラサ方言の調査と記述が中心であり，中国国外のチベット語方言も含め，チベット語方言全般の研究は一向に進展しなかった。

こういった状態に大きな変化を与えることになったのがネパールにおける通称SIL (=The Summer Institute of Linguistics) の言語調査活動であった。1966年にカトマンズのトリブバン大学にSILのネパール支部が置かれ，多くのSIL所属の言語学者を動員し，四つの系統の異なる語族の言語が話されているネパール国内の言語調査が始められた。その成果は，1969年以降数多くの論文や著書として出版され，その後のチベット・ビルマ諸語研究に大きく貢献した。この調査を通して，ネパール国内のチベット語方言の分布情況は極西部を除き，1970年代以前とは比較にならない位にはっきりして来た。しかし1975年に様々な事情からSIL支部がネパールから撤退した結果，ネパールのチベット語方言中の四方言，ジレル (Jirel) 方言 ([Maibaum and Strahm 1973ab], [Strahm 1975, 1978], [Strahm and Maibaum 1971] 等)，シェルパ (Šarpa: Sher-pa/Shar-pa) 方言 ([Gordon and Shoettelndreyer 1970], [Gordon 1970], [Schoettelndreyer and Schoettelndreyer 1973ab, 1974], [B. Schoettelndreyer 1975ab] 等)，カガテ (Kagate)/シューバ (Syuuba) 方言 ([Hoehlig and Hari 1976], [Hoehlig 1978]) とロミ (Lho-mi)/シンサパ (Šingsapa) 方言 ([Vesalainen and Vesalainen 1976, 1980]) 以外の方言は手が付けられないままに終わった。その後「ネパールの言語調査」(*Linguistic Survey of Nepal*) プロジェクトは，ドイツのネパール研究センター (The Nepal Research Centre) とトリブバン大学のネパール・アジア研究センター (CNAS=The Research Centre for Nepal and Asian Studies) に引き継がれ，両者が共同して，ドイツ人やネパール人の言語学者に訓練されたネパール人を使って調査を行うという形を取ったようであるが，少なくともチベット・ビルマ語族の諸言語に関する限り，何の成果も上げないままに，実質的な立ち消え状態になっているようである[7]。

6) この教材は，昭和39年に北村甫教授が東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所へ移った後も，その都度東洋文庫に客員研究員として滞在中のチベット人学者の協力を得て作成され，絶えず改訂を重ねて来た。最近では，かつて北村教授の下でチベット語を学んだ星実千代，長野泰彦等との分担執筆となっている。

一方東京外国語大学のアジア・アフリカ言語文化研究所が CNAS との共同研究という形でネパールのガンダキ水系地域で行ったプロジェクトの1980年～1981年の臨地調査に参加した長野泰彦は，西ネパールのカリガンダキ上流域のカグベニ (Kagbeni)，ザルコット (Zharkot)，ダンガルゾン (Dangardzong) 及びロ (gLo＝Mustang) の諸方言を調査し，その成果を [長野　1982ab; NAGANO　1985] に発表している[8]。この外にも1970年から1980年代にかけて日本人によるチベット語方言研究として西田龍雄の青海省海東地区湟中県のアムド方言 [西田　1970][9]，長野の甘粛甘南チベット(蔵)族自治州のアムド・シェルパ (A-mdo Šar-pa) 方言 [NAGANO　1980]，星実千代による西部方言のザンスカル (Zanskar) 方言 [HOSHI　1978] と武内紹人のチベット自治区シガツェ地区ティンリ (Ding-ri: 定日) 県の方言 [武内　1979] に関する論文・資料がある。欧米の学者による論文では，R. K. Sprigg のバルティ (Balti)，シェルパ，ゴロック (mGo-log) の諸方言を扱った一連の論文 [SPRIGG　1966, 1967, 1972, 1979, 1980ab] や J. T.-S. Suen の四川省ガバ（＝アパ　阿坝）チベット族自治州ツォゲ（若爾盖）県のアムド・ツォゲ (A-mdo mDzo-dge) 方言の音韻史を扱った論文 [SUEN　1981] は，いずれも特筆に値する。

現在西ドイツのボン大学の D. Schuh が中心になり，1979年に始まったチベットの口承伝説収集の為のプロジェクトでヒマラヤ地域のみならず，中国のチベット語諸方言による民話が収集されている。その成果は，*Beiträge zur Tibetischen Erzählforschung* シリーズとして第六巻 [1985a] の R. Bielmeier によるバルティ方言で伝承を採録した "*Das Märchen vom Prinzen Čobzaṅ*" までが出版されている。この巻だけは，単にテキストとドイツ語訳に留まらず，方言の音韻，文法の記述と語彙が加えられている。しかし残念なことに第六巻以外は，ドイツ語訳のみでテキストも含まれていないため方言資料としては価値がない。

尚，ラサ方言によるチベット民話集として [HOSHI　1979–1985] が，ラサ方言の

7) このプロジェクトは，1981年から始まったが，ネパール人調査員の訓練不足のせいで収集された資料に問題があり，結局資料は全く出版されていない。ただし，必要であれば，この資料はコピーさせて貰えるとのことである。現在 Werner Winter が Alfons Weidert の後を受けてこのプロジェクトの責任者になっているという。(長野泰彦氏に拠る。)

8) このプロジェクトは，形を変えて現在も継続されているので，今後北村，長野等によるヒマラヤ地域のチベット語方言調査の成果が期待される。チベット語のみならず，一般にチベット・ビルマ諸語の調査で一番問題なのは実際に臨地調査のできる日本人言語学者があまりにも少ないことである。

9) [西田　1970] の湟中県方言は，実際に1950年代初めに日本を訪れたタクツエル・ノルブ師のアムド方言を調査したものである。尚，この著書には，西田が1962年に調査した，当時東洋文庫の研究員として滞在中であったケツン・サンポ師の母語方言であるヤクテ (gYag-sde: 雅徳) 方言の資料も引用されている。ヤクテ方言はチベット自治区シガツェ地区ニャラム県の方言であり，中央方言に属する。

口語資料として [CHANG and CHANG 1978–1981] が出版されている。

一方，インドに於ける少数民族言語研究は，1969年に南インドのマイソールに「インド諸言語中央研究所」(The Central Institute of Indian Languages) が設立されて以来，組織的且つ着実に進展しているが，チベット・ビルマ系言語の研究は，それ以前からも各地の大学や関連した研究機関で行われていた。チベット語方言に関する限り，この研究所設立以前に公刊された論文や著書はないようである。この研究所からは，「音声読本」シリーズや「文法」シリーズ等が刊行されているが，チベット語方言関係では，これまでのところ S. Koshal "*Ladakhi Phonetic Reader*" [1976], K. Rangan "*Balti Phonetic Reader*" [1975] と "*Purki Grammar*" [1979] しか刊行されていないが，5,000 語程度の語彙を載せた各言語の辞書も出版計画に入っており，今後この分野での貢献が期待される[10]。この外にインドの言語学者によるチベット語方言研究としては，ラダク方言に関する [KOSHAL 1976, 1979] や S. R. Sharma のスピティ (Spiti) 方言の音韻論 [1979] がある。

現在はインドの一部となっている旧シッキムから中国チベット自治区シガツェ（日喀則)地区の亜東県となっているトモ (Gromo) 地方を経てブータンにかけて話されているチベット語方言については，(著者不詳(？ブータン人)であるが)ブータンの標準語であるゾンカ (rDzong-kha) 方言の入門書 [1977] と M. Mazaudon の "*Dzongkha Numerals*" [1982] 以外に最近まで今世紀初頭以来公刊されたものはなかった[11]。

以上1950年代以降の世界における現代チベット語方言研究情況を簡単に振り返ってみたが，東ドイツの E. Richter の "*Grundlagen der Phonetik des Lhasa-Dialektes*" [1964b] 等を除けば東欧圏とソ連における最近の現代チベット語研究の情況は残念ながらあまりよく分からない。しかし大勢に影響を与えるような研究が行われていないことは確かであろう。

1980年以前と比較すれば，現代チベット語の全体像が問題にならない程明らかになって来ていることは確かであるし，現在各国で行われている調査研究がこのまま進展すれば，確実にチベット語方言の知識が増大することも確実である。しかしチベット語研究者にとって何よりも必要な資料という形での出版物がまだまだ十分でないのも確かである。現代チベット語の研究者にとって，恐らく最も望ましい形の資料は，Bielmeier の "*Das Märchen vom Prinzen Čobzaṅ*" [1985] や 瞿・譚の『阿里蔵語』

10) この部分は，主に昭和六十年九月二十日の西田教授主宰の「チベット・ビルマ語研究会」における同研究所の Ram Adhar Singh 博士の講演に拠る。

11) ここでは，ゾンカ方言と呼ぶが，この言語は，一種の共通語とされることを目指す言語であり，ここで挙げている他の地域方言とは性格が異なると思われる。中国語の普通話等に比較される言語といえよう。

[1983] のような出版物であろう。特に中国において収集された資料が出来るだけ早く公刊されることが望まれる。

一方，最もチベット語方言調査が必要な地域もインドのヒマチャル・プラデシュ (Himachal Pradesh) 州とウッタル・プラデシュ (Uttar Pradesh) 州北部の辺境地帯からネパールのドルポ (Dolpo) 地方にかけての地域と最後に触れたインドのシッキムからブータンにかけての地域であることが明らかである。いずれは，この地域のチベット語方言も調査されることであろうが，日本の若い人の中からそういった調査に携わろうととする者でも出れば幸いである。

2. チベット語とチベット語方言

2.1. チベット・ビルマ語派とチベット語

チベット・ビルマ語派は，西はパキスタンのバルティスタン地方から東はインドシナ半島のラオス，タイまで，北は中国の甘粛省からビルマの南端までの広大な地域に広がる数百の言語からなっている。この語派の言語の本格的な統系的分類は，実質的に R. Shafer [1955, 1966] のシナ・チベット語族の分類に始まるといえる。その後西田 [1970, 1978], P. K. Benedict [1972a] 等[12]により分類が試みられ，最近では G. Thurgood [1985] がチベット・ビルマ祖語形がほぼ確実に推定できる一人称と二人称代名詞及び動詞に付加される人称接辞を取り上げ，その改新形を指標に，下位分類の明らかなロロ・ビルマ諸語を除く諸言語の分類を行っている。Thurgood 以外の分類ではその基準となる指標が必ずしも明示されていない点が問題になるが，チベット語を含む下位語群については，分類のどの段階の置かれているかは別として，一致している点も多い。

Shafer は，チベット・ビルマ語派のなかの三つの主要区分の一つとして，チベット (Bodic) 語門 (Division) を立て，これをヒマラヤ地域の諸言語 (Himalayish) を区分する三つの語系 (Section) とチベット語系の合わせて四つの語系に分ける。チベット語系には，チベット，ツァンラ (Tsangla)，ギャロン (rGyarong) [＝ジャロン]

12) Benedict [1972a] は，シナ・チベット語族はシナ語派とチベット・カレン語派 (Tibeto-Karen) にまず分岐し，後者は更にカレン語とチベット・ビルマ諸語に分かれるとしている。チベット・ビルマ諸語は一応チベット・カナウリ語群を始めとする七つの中核的語群に分けるが，これらの語群間の関係を系統樹的な姉妹関係とせずに，カチン (Kachin) 語をチベット・ビルマ諸語の分岐の中心，いわば「言語的十字路」(linguistic "crossroads") に置き，それとの遠近関係や語群間の親疎関係を考慮した三次元的関係を考えているようである。この見解は，カチン語を一種の「媒介言語 (link language)」とする西田 [1978]（註14参照）の考えと部分的に共通しているといえよう。

とグルン (Gurung) の四つの語支 (Branch) が含まれる。一方，Benedict の大分類は，主要区分よりも低次の段階のものと考えられるが，Shafer の分類中のヒマラヤ系言語の一部 (Bahing-Vayu/Kiranti 語群) を除く残りをまとめてチベット・カナウリ (Tibetan-Kanauri) 語群とし，これをチベット (Bodish) 諸語とヒマラヤ (Himalayish) 諸語に分ける。チベット諸語には，チベット語，タクパ (Dag-pa: Takpa) 語，ツァンラ語，ギャロン (rGya-rong/Gyarung/Jyarung) 語，グルン語が所属している[13]。西田は，チベット・ビルマ語派を 4 語群に分け，その一つであるチベット語群をチベット語系，ジャロン (嘉絨) 語系，ヒマラヤ語系，チィヤン (羌) 語系とカチン (Kachin) [＝チンポー(景頗)] 語系 [1970][14] の五つの語系に分けている。Thurgood の分類は，主要区分よりも低位の段階のものとしているが，チベット諸語を立て，この下にチベット，タマン・グルン (Tamang-Gurung) とタクパの三つの語系を立てている。

Shafer のチベット語支，Benedict のチベット語，西田のチベット語系と Thurgood のチベット語系が所謂チベット語で，残りのチベット語と関係付けられている諸言語は，いずれもチベット語圏の南縁と東縁沿いに，時にはチベット語と入り交じって分布している。次節で触れるが，この四人の内の Shafer と西田は更にこのチベット語の方言分類を試みている[補1]。

言語が同系か否かを決める場合に同じ祖語から受け継いで来たと考えられる基礎的要素の「留保」(retentions) が問題となるのとは異なり，方言分類もその延長線上にあるといえる同系言語の下位分類で決め手となる基準は，問題の言語同士がどれ位「改新」(innovations) と考えられる要素を共有しているかという点にある。つまりそういった要素の存在は，問題の言語が同じ発展段階を経たためであると考えるのである。比較的近い関係にある言語間に共通の「改新」的要素を数え上げれば際限ないが，重要なのは，言語体系全体や音韻，文法，語彙の基本的な部分に影響するような「改新」である。チベット・ビルマ諸語の場合は，この十年程の間に急速に改善されたとはいえ，まだ音韻体系の一部とかわずかな語彙でしか知られていない言語も多い上に，チベット・ビルマ祖語の音韻・文法体系や語彙等についてもまだ十分なコンセンサスがあるとはいえない。従って，どの要素が「留保」でどの要素が「改新」なのか

13) Benedict は，タクパ語以下の言語を「チベット語的 (Tibetonoid)」言語と呼んでいる。尚，チベット諸語とヒマラヤ諸語は，密接な繋がりがあるが，別個のものであり，両者を繋ぐ「移行型 (transitional types)」の言語はないとしている。

14) [西田　1978] では，カチン語系をチベット語群からはずし，カチン語は，語彙，形態構造のいずれかの面でチベット・ビルマ諸語の 4 語群のいずれとも何等かの類似点を持ち，「媒介言語」と呼ぶべき言語の代表であるとしている。これは，むしろ [西田　1970] 以前の本来の主張に戻ったものである。

はっきりしないことが多い。こういった例の一つは，所謂ヒマラヤ系の言語や中国の四川省一帯の多くのチベット・ビルマ系言語にみられる動詞の人称一致の形態・統語的手順（チベット・ビルマ言語学の分野では，伝統的にこのような人称一致を「代名詞化 (pronominalization)」と呼び，人称一致の体系を持つ言語を「代名詞化 (pronominalized) 言語」と呼ぶ[15]）である。この動詞の人称一致が祖語の段階のものかそれ以後の下位語群での「改新」的要素なのかは議論の分れるところである。いずれにせよ，人称接辞の形式，それが動詞語幹の前接辞か後接辞か，文のどの項 (argument) に，また，文法関係(主語，目的語等)や意味範疇(動作者，被動者，起点等)等のいずれに一致するかといった詳細は決して一様でない。ギャロン語とチィヤン語とカチン語は典型的な「代名詞化」言語であり，これに対して，チベット語やタマン諸語や現在では中央モンパ語群に入れるツァンラ語等は「非代名詞化 (nonpronominalized)」言語である。西田 [1983] は，チベット語もある時期にギャロン語やチィヤン語と同じような動詞の人称一致体系を持っていたと考えている。所請ヒマラヤ系言語とされている言語の多くは，やはり「代名詞化」言語であるが，その体系は様々であり，特にネパール中部以西の「代名詞化」言語の人称一致体系はギャロン語等のそれと比較できるか否か問題である。

一方，基礎的な語彙以外の所謂「文化」語類についていえば，何世紀にもわたるチベットの政治的・宗教的・文化的影響下にあったために，同系，非同系を問わず，その周辺の言語にはいずれも幾つかの時期にわかれてチベット語から入って来た相当数の借用語を含んでいる。金鵬 (等) [1957, 1958] によれば，ギャロン語のソマン(梭磨)方言の 2726 語中何等かの形でチベット語形と結び付けられるものが975語（37%）に上るという。しかし長野 [Nagano 1984] によれば，中核的な語彙に関する限りむしろカマルパン (Kamarupan) 諸言語（ボド・ガロ諸語，クキ・チン・ナガ諸語とアボル・ミリ・ダフラ諸語をまとめた呼称）と比較できるとしている。ギャロン語がチベット語系でないとすればチベット語と関連付けられる語の多くは，借用語というこ

15) (verb) pronominalization の用語は，言語も含めたヒマラヤ地域研究の先駆者である B. H. Hodgson が1956年の論文で最初に使用したものであるが，S. Konow が LSI でヒマラヤ地域のチベット・ビルマ系の諸言語を「代名詞化」言語と「非代名詞化」言語に分類したことから一般化した用語である。

16) 西田 [1983] は，歴史的にはチベット族（と恐らくギャロン族）を，古代中国の殷王朝と対峙した古代チィヤン族と関連付け，チベット族がその中の有力な一部族であったと考えているようである。尚，[西田 1978] では，ギャロン語とチィヤン語について「両者に共通した現象を若干発見できるが，体系全体を直接結び付けることはむつかしい上に，中核となるチベット語的層とそれを覆っている別の層があるように考えられる。あるいはその別の層が，ボド・ナガ語系〔＝長野のカマルパン諸語の一部〕の言語と関連をもつかも知れない。」とも述べている。

とになるが，ギャロン族は今でも自分達がチベット族であると主張している程であり，多くの借用語が含まれていても不思議ではない[16]。

Shafer, Benedict … Thurgood のいずれもがチベット語と最も近いとする言語はタクパ語とタマン諸語である。Shafer は，B. H. Hodgson [1853] の記録したわずかな語彙で知られたタクパ語をチベットのタクポ (Dwags-po) 地方の言語と誤解し，その上当時北モンパ (Monpa; 門巴) 語については全く知られていなかったところからこの言語を幾つかの古い音声的特徴を留めた東部チベット語方言であるとしてしまった。現在では，タクパ語は中部ブータンのブムタン (Bum-thang) 語やブータンの東側のチベット自治区山南区ツォナ (mTsho-sna: 錯那) 県等に分布する北モンパ語群の一言語であり，ブータンとの辺境地帯に住む遊牧民の言語であることが分っている[17]。この北モンパ語は，これまで知られている中で恐らくチベット語に最も近い関係にある言語と考えられるが，所謂チベット語方言と同じレベルの方言ではない。

タマン諸語[18] の場合は，北モンパ語ほどチベット語との関係が明瞭ではなく，チ

---

17) ツォナ・モンパ語（北モンパ語）とメト・モンパ語（中央モンパ語）については，[孫宏開・紹尊・張済川・欧陽覚亜　1980] 参照。[孫　1983] によれば，ツォナ・モンパ語の話し手は，主にチベット自治区山南地区のツォナ県とモン・タワン (Mon-rTa-dbang/wang: 門達旺) 地区に分布するが，ラサ市のメト県テシンチュ (bDe-žing-tçhus: 徳興) と文浪（=? 五郎: Mun-nags) の両公社にも少数分布しており，後者は bɹɑ^{33}mi^{55} と自称するという。メト・モンパ語の方は，ラサ市のメト県内とニンティ県のトンジュク (sTong-mdzug: 東久) 地区に分布し，モンパあるいはツァンロ (tshang-lo: 倉洛) と自称されるという。

一方，K. Das Gupta [1968] は，インドのアルナチャル・プラデシュ (Arunachal Pradesh) 州（=the North-East Frontier Agency=NEFA) のカメン辺境地区 (Kameng Frontier Division) のモンパ語を調査しているが，暫定的にこの地区のモンパ語を(1)孫のモン・タワン地区のモンパ語に相当する北モンパ方言，(2)その南東のディラン (Dirang) を中心とする地域の11カ村の中央モンパ方言，(3)その地域の南部の南モンパ方言 (Southern Monpa) と (4)ディラン近辺のリシュ (Lish) とチュク (Chug) 両村で話されているリシュパ (Lishpa) 方言に分けている。最後のリシュパ方言については，モンパ語に入るか否か更に検討を要するとしている。Das Gupta は，これらの言語をいずれもモンパ語の方言とし，言語間の差異をチベット語方言の影響とその地域の基層言語の影響の混合で説明するが，北モンパ語と中央モンパ語の差異に関する限り，他言語の影響だけでは説明できないと思う。

タクパ語の資料は，いずれも [Hodgson 1853] ([Hunter 1868/1976] にも収録されている）に拠っている。具体的な言語資料は数詞以外挙げていないが，Shafer によるこの言語の位置付けの誤りを最初に指摘し，更にブータン中央部のブムタン語と東部のツァンラ語（ブータンでは，シャルチョプ (Šar-phjogs-pa) 語と呼ばれる）をそれぞれ北モンパ語と中央モンパ語に結び付けたのは，恐らく M. Aris [1980] であろう。Aris によれば，ブムタン地域とタワン地域はツァンラ語地域によって遮られているが，両地域の歴史的関係は史料によって裏付けられるという。ここではブムタン語と北モンパ語の関係について一応 Aris の見解に従っている。現在ブムタン語の資料としては，Aris の比較表の1から10までの数詞と（音声表記の正確さに多少問題があるが）諏訪哲郎「基礎語彙から見たブータンの諸言語」(学習院大学文学部研究年報 28 (1981): 187–257) に280項目の語彙が採録されているだけであるが，Aris の比定に問題がないわけではない。

18) Shafer は，グルン語支 (Gurung Branch) と呼んでいるが，Mazaudon 及び筆者は，タマン諸語と呼んでいる。この言語は，ネパールのヒマラヤ山脈沿いにダウラギリ県東部とガンダキ，バグマティ，ジャナクプールの諸県を中心に分布しており，タマン語，グルン語，マナン (Manang) 語，タカリ (Thakali) 語等の諸言語に分かれている。尚，タマン諸語の文献については，[Nishi 1979] 参照。

ベット語と共有する基礎的な語彙もその多くはチベット・ビルマ祖語に再構されるものであり，統語構造におけるチベット語との類似点の多くも「改新」的とは考えられない。タマン諸語は，祖語の段階でも命令形の接尾辞が *{-Co} のように再構できる点（これは多くの「ヒマラヤ」系言語に共通している）を除けば，チベット文語の動詞のように語幹の屈折変化で自動詞と他動詞を区別したり，テンス・アスペクトやモード（命令形）を表示するのに動詞語幹の子音や母音を交替させたり，接頭辞や接尾辞を付加したりした痕跡が，全くといってよい程認められない上に，否定の接頭辞は *{(ñ)a-} であり，しかも命令形の否定の接頭辞 *{t(h)a-} が別にあることなどを考えれば果たして北モンパ語と同じようにチベット語系にいれてよいのか疑わしくなってくる。しかしこれを別の語系に入れるとか独立した語系を立てるとかする積極的な根拠もない。現在のところチベット・ビルマ諸語の下位分類にはまだ多くの未解決の問題が残されているとして置くしかないであろう。

最後に Shafer と Benedict の挙げているツァンラ語であるが，これも東部ブータンからチベット自治区ラサ市メト（Me-tog: 墨脱）県にかけて話されている中央モンパ語のことである。同じモンパ語と称しているが，実際は北モンパ語とは全く異なる言語である。勿論チベット語とも北モンパ語のように近い関係にあるとはいえない[19]。

[孫　1983] で孫宏開は四川省康定を中心に甘粛省からチベット自治区と山南地区南部にかけてのチベット・ビルマ系の多くの言語の調査報告を行っているが，その中でこの地域の言語を(1)チベット語支，(2)イ（彝）（＝ロロ）語支，(3)チィヤン語支，(4)チンポー（＝カチン）語支と(5)ビルマ語支の五つの下位語群（語支）に分類している。チベット語支には，チベット語，メト・モンパ語（＝中央モンパ語），ツォナ・モンパ語（＝北モンパ語）と白馬語[20]が含まれている。両モンパ語については既に述べた通りである。[孫　1983] には，白馬語の簡単な概要が示されているが，孫の主張するようにこの言語がチベット語系である可能性はあるが，更に検討が必要と思われる。尚，孫は，チィアン語とギャロン語はチィアン語支に，チンポー語は勿論チンポー語支に入れている。

19) 註(17)参照。1980年末にネパール滞在中カトマンズで東ブータンのツァンラ語地域であるタシガン（rKra-šis-sgang）出身者から300語程度採録した。この資料と Das Gupta のディラン地方の中央モンパ語とメト・モンパ語からそれぞれ Swadesh の基礎100語に相当するもの(いずれも全部は埋まらない）を選んで比較してみたが，タシガン及びディランとメト県は恐らく三，四百粁以上の山岳地帯に隔てられているにも拘わらず驚くほどよく似ている。これは，この三地域の言語の分岐したのがそれほど昔のことではなかったせいなのか，それとも住民同士の往来が国境の存在や困難な地形にも拘わらず我々が想像する以上に盛んであったせいなのであろうか。

20) 白馬族は，漢族により白馬蔵人と呼ばれているが，ペ（pe^{53}: 貝）人と自称し，四川省アワ・チベット族自治区南坪県下塘地区と甘粛省武都地区文県鉄楼一帯に居住する少数民族である。

既に述べたようにチベット語方言として数多くの方言の方言名が知られているが，その大部分の方言については，まだ十分な調査が行われていないか，十分な資料が収集されていてもまだ公刊されていないかのいずれかであり，中国国内のみならず国外のチベット語方言を含めた一般論は避けるべきかもしれないが，周辺のチベット・ビルマ諸語との対比でみられるチベット語の統一性といったものは認めてもよいと思う。これが最も容易に分かるのは語彙面であろう。[金（編）　1983] に中国国内の中央方言，カム方言とアムド方言をそれぞれラサ方言，デルゲ方言とラプラン (bLa-brang: 拉卜楞) 方言 [甘粛省甘南チベット族自治州夏河県] で代表させ，各方言間の同源語の共有率を挙げている。(但し，方言により比較語数は異なり，約3,000語から約2,700語を取り上げている。)

中央方言・カム方言	86% (2602÷3030)
中央方言・アムド方言	75% (2030÷2710)
カム方言・アムド方言	72% (2012÷2811)

勿論インドやネパールのチベット語方言の場合それぞれ周辺の言語から数多くの語を借用しているが，中核的な語彙に属するチベット語的語彙（例：「二人称代名詞」，「血」，「髪」，「足」，「水」，「七」等[21]）はまず借用語で置き換えられていない。語彙全体からみても，周辺のチベット・ビルマ系の諸言語に比べ，一般に借用率は低いようである。これは，インドやネパールに住んでいてもチベット人のラサを中心とする中央チベットの文化・宗教・言語への高い指向性が現在も維持されているためであろう[補2]。今一つ重要なことは，借用語を除いた現代チベット語の諸方言形は，例外はあるものの，その多くをチベット文語形に遡れるということである。つまり現代チベット語方言形と9世紀初頭における中央方言を基準とした綴字の第二次改定を経たチベット文語形[22]との間にはっきりした対応関係を立てることができるのである。勿論現代チベット語方言形のある部分は，改定以前のチベット語方言間の変異を反映していると考えられるもの（例えば，有気音と無気音の変異[23]，第二次改定で削られた末

21）興味深いのは，チベット語系とされている言語では，いずれもこれらの語の幾つかがチベット語と同源か同源の可能性のある語であるが，全部がそうである言語はないという点である。また，これまでに知られている限りでは，数詞の「七」はチベット語方言で総て文語形の *bdun と関係付けられる語形式であるが，チベット語系とされる他のどの言語でも「七」がこれと同源のものはない。例外的にカナウル語の方言とされるフー (Pooh [fu:]) 方言 [J. Neethivanan 1976(?) *Survey of Kanauri in Himachal Pradesh* (Census of India 1971, Series 1, Language Monograph No. 3 (1961 Series) Language Division, Office of the Registrar General, India] では，「七」は dun であるが，この方言では，数詞の中少なくとも「一」から「十」までは全部周辺のチベット語方言からの借用語で置き換えられたもののようである。

22）綴字の第二次改定と綴字の変異形については，[西田　1970]，[羅秉芬・安世興　1981]，[車 1981]，[王堯　1981]，[瞿　1982a] 及び [ZHANG　1986] 等参照。

尾子音の *-d (da-drag「再添加字」) が現代ラサ方言やシガツェ方言の声調に反映されている例等文語形から説明できない部分もあるが，文語形を現代チベット語方言の共通の祖語形として作業を進めても今のところ大きな支障はない程である。

方言間の相互理解度 (mutual understandability) からみれば，後で触れるようにアムド方言の話し手にはカム方言が理解できないとか，R.A. Miller [1956a] が述べているように同じ西部方言であるバルティ方言，プリク方言，ラダク方言の話し手同士の相互理解度にかなりの差異があったりするようである。それにも拘わらず総て「チベット語」の方言であると呼べるのは，一つにはラサ方言を中心とする中央方言に対する他の方言の他律的 (heteronomous) な関係であり，チベット文語を通しての統一性であるといえよう。

2.2.　チベット語方言の分布と分類

2.2.1　中国国内のチベット語方言

M. Hermanns [1952] は，「自然の境界は言語あるいは方言の境界でもある」ことがよくあるとし，カム地方のチベット語がアムドの人には理解でないという土地の人の言葉を引き，「アムドとカムの両地方は地理的，民族的，言語的にかなりはっきりと分かれている。黄河 (rMa-tɕhu) と揚子江 (ñBri-tɕhu) の間の分水界が大体のところ境界を作っている」と述べ，G. Uray [1949] が東部チベット語群にまとめたチベット方言を黄河水系のアムド地方の「北東方言群」と揚子江及びその南に並ぶ諸江の水系のカム地方の「南東方言群」に区分するように提案している。Hermanns は，この外にも，アムド地方のチベット語に，前接辞や末尾子音を摩滅させ，母音を変化させている「農民のコトバ」(rong-skad) と前接辞と末尾子音が明瞭に聞き取れる「遊牧民のコトバ」(ñbrog-skad) とチベット人に呼ばれる方言区分があることを指摘している。チベット語方言を最初に明確な基準に基づいて分類したチベット学者である Uray は，[Uray 1954] で Hermanns の批判に応え，「方言分類はまず言語

23)「犬」(文語形 *khji) は，シガツェ方言を始め，ネパールのロミ（ゴンバ村），シェルパ，ジレル，ツム，ヌプリ（ラルケ），ダンガルゾン，ロ（ムスタン）の諸方言ではいずれも初頭音が無声無気音であるが，ハティアル (Hatiar: Damdang) 村のロミ方言，ラメチャプ郡のカガテ方言，カグベニ方言とザルコット方言では無声有気音である。カガテ方言については，キロン方言形が分からないではっきりしないが，一般にシガツェからネパール辺境地域にかけてのチベット語方言では，「犬」の初頭子音は*無声無気音であったのが，ラサを中心とするユー方言の影響で一部の方言の初頭子音が無声有気音の形式に置き換えられたのではないかと考えている。いずれにせよ，この *khji～*kji の変異は，[車 1981] によれば9世紀前半の古文献中にみられるものである。現代方言形の変異は上記古文献中の変異と直接結び付けることができるか否かは問題であるが，こういった変異が一種の方言差として古くから存在し，たまたま辺縁地域の方言に残ったと解釈できなくもないであろう。

現象を出発点とすべきである」と主張し，現代チベット語諸方言における古典チベット語（＝チベット文語）の初頭子音結合（声母）の反映形に基づく新たな方言分類を提案した。満足な方言資料のない当時の情況からすれば，彼の主張も理解できるが，Hermannsの述べているような方言差や言語差に関する土地の人々の観察は，言語学的観点から常に正しいとはいえないまでも，十分検討に値するものである。瞿・譚[1983]は，ガリ地区の方言調査の際に土地の者が西部のカル (sGar: 噶爾)，ルト (Ruthog: 日土)，プラン (sPu-hreng: 普蘭) とツァンダ (rTsa-mda: 札達) の4県の方言を「農民のコトバ」，ケゲ (dGe-rgyas: 革吉) 県とツォチェン (mTso-tçhen: 措勤) 県の方言を「遊牧民のコトバ」，ケルツェ (sGer-rtse) 県の方言を「カム（地方）のコトバ」と呼ぶのを耳にするが，後に方言資料の比較研究を通してこの民衆の見解が正しいことが裏付けられた経験を語っている。

瞿霭堂を始めとする中国のチベット言語学者は，中国国内のチベット語方言分類には，主要区分のみならず，下位分類の面でもチベット族の方言観とよく合致させている。瞿・金 [1981] は，暫定的な分類としているが，中国国内のチベット語方言を次のように分類している。（中国の学者は，「方言」は主要区分に用い，個別方言は「○○話」と呼び，両者の中間段階の方言群を指すのに「土語」を用いている。厳密にいえば，現段階での末端のチベット語方言とは，単に調査地点の俚語と呼んでおく方がよい場合も多いと思うが，ここでは慣用に従い総て「方言」としておく。）

1. ユー・ツァン方言：（チベット自治区のチャムド (Tçhab-mdo: 昌都) 地区とナクチュ (Nag-tçhu: 那曲) 地区，ラサ地区のニンティ (Ñing-khri: 林芝) 県とガリ地区の一部の地方を除く，大部分の地方に分布する；尚，この方言は，便宜上中央方言と呼ぶことにする。）
   1) ユー（前蔵）方言，例：ラサ方言
   2) ツァン（後蔵）方言，例：シガツェ (gŽis-ka-rtse) 方言
   3) ガリ方言，例：カル（噶爾）方言

[瞿・譚 1983] では，ガリ地区の方言中カル，ルト，プランとツァンダの4方言はユー方言に，ケゲとツォチェンの両方言はツァン方言に，ケルツェ方言はカム方言に属するとしている。

2. カム方言：（チベット自治区のチャムド地区，ナチュ地区，ラサ地区のニンティ県とガリ地区の一部，四川省カンツェ (dKar-mdzes: 甘孜)・チベット族自治州，雲南省テチェン(bDe-tçhen: 迪慶)・チベット族自治州と青海省ユーシュー(Jus-hrufiu: 玉樹) チベット族自治州等に分布）

1) デルゲ (sDe-dge: 徳格) 方言 (四川省カンツェ・チベット族自治州), カンツェ方言, チャムド方言

2) ユーシュー (玉樹) のチベット語, 例：ケグ [ムド] (sKje-rgu [-mdo]: 結古 [多]) 方言

3) 雲南のチベット語, 例：中甸方言 (雲南省テチェン・チベット族自治州)

4) チャクテン (Phjag-phreng: 郷城) 方言 (四川省カンツェ・チベット族自治州)

5) 黒河 (＝那曲) 方言, ケルツェ方言

6) チョネ (Tɕo-ne: 卓尼) 方言 (甘粛省甘南チベット族自治州)

7) トゥクチュ (ɦBrug-tɕhu: 舟曲) 方言 (甘粛省甘南チベット族自治州)

尚, [格桑　1985] では, カム方言を(1)南路方言群, (2)北路方言群, (3)中路方言群と(4)遊牧地区の方言群に分けているが, この方言群と瞿・金の下位方言群との関係は明らかでない。

3. アムド (安多) 方言：(甘粛省及び青海省の各チベット族自治州, 自治県, 青海省海北地区化隆回族自治県と同省循化撒拉族自治県の一部の地方と四川省アパ (阿坝) チベット族自治州の一部の地方に分布)

1) 遊牧地区の方言, 例：アリク (阿力克) 方言 (青海省海北チベット族自治州), ツェコック (rTse-khog: 沢庫) 方言 (青海省黄南チベット族自治州)

2) 農業地区の方言, 例：化隆方言, 楽都方言 (青海省海東地区), 循化方言

3) 半農半牧地区の方言, 例：夏河方言 (甘粛省甘南チベット族自治州), 同仁方言 (仝上)

4) タウ (rTaɦu: 道孚) 方言, タッコ (Brag-ɦgo: 炉霍) 方言 (四川省カンツェ・チベット族自治州)

[西田　1983] では, タウ方言, タッコ方言等の四川省カンツェ・チベット族自治州の「アムド」方言は, 「カム方言に近い特徴を示しているために, その所属の決定にはなお検討の余地があるように思える。」としているが, 次節に述べる様々な分類基準に照らしてもアムド方言とするのに問題はないと思われる。

一方, Roerich [1931], Uray [1949, 1954] と Shafer [1955, 1966] は, いずれも中国国内のチベット語方言だけでなく, 周辺諸国のチベット語方言も含めて分類しているが, チベットについて独自の情報を持っていたと思われる Roerich の分類が比較的に現在の中国の学者の分類に近いのが注目されるが, 残る二人の分類は当時利用できた資料の情況を反映して, 中国国内の方言に関する部分が最も混乱している。

特にカム方言とアムド方言については，大部分が今後研究史的な関心でしか取り上げられることがない資料しか利用できなかった点が問題である。西田 [1970] は，中国国内のチベット語の分類に関してはほぼ瞿 [1963] の分類に従っている。

この四人がはっきりと瞿等の中国の学者と異なる点は，インドとブータンの国境に接するシガツェ地区亜東（卓木）県（トモ地方）の方言をシッキムとブータンのチベット語方言と共に南部チベット語方言 (Roerich, Shafer, 西田) あるいは中央 [方言] 群の下位 [方言] 群 (Uray [1954]) に分類している点である。[西田　1970, 1983] は，この南部チベット語方言に，所謂西部チベット語方言を除く，インドとネパールの総ての方言を含めてしまっているが，論拠は示されていない。瞿等は，亜東（トモ）方言を中央方言（？ツァン方言）に入れている。

尚，Shafer [1966] は，チベット祖語 (Proto-Tibetan) に相当する「本来のチベット語 (Bodish proper)」が西部チベット祖語 (Proto-West Bodish)，古チベット語と東部チベット祖語 (Proto-East Bodish) に分かれ，そこからバルティ，プリク等の西部方言 (West Bodish Unit)，南部方言 (South Bodish Unit) 及びユー，ツァン諸方言を始めとする残る総てのチベット語方言を含めた中央方言 (Central Bodish Unit) と前節で触れたタクパ語だけからなる東部方言 (East Bodish Unit) がそれぞれ派生したとする。一方，西田 [1970] は，チベット祖語が古中央チベット語 (Old Central Tibetan)，古カム語 (Old Khams Tibetan) と古アムド語 (Old Amdo Tibetan) に分岐し，これからそれぞれ現代南部方言及び中央方言，現代カム方言と現代アムド方言及び西部方言が出て来たとしている。中央方言とカム方言の関係については一考の余地があると思われる。一方，アムド方言と西部方言の関係について，西田は，F. W. Thomas [1948] の仮説に従い，西部方言のバルティ方言とプリク方言は，チベット東部から移住したチベット人が土着のバルティ，プリク人に浸透させたチベット語であると考えている。この仮説は十分可能性があると思うが，今後アムド方言の言語資料が公刊され，特に文法的諸特徴が明らかになった段階で検討してみる必要がある。

中国側の資料には触れられいないが，Bielmeier [1981/2, 1982] により調査された，ネパールの首都カトマンズのほぼ真北に位置し，ネパールの国境に接するチベット自治区シガツェ地区のキロン (sKjid-grong: 吉隆) 県のチベット語方言は他の中央方言と際立った違いがあり，幾つかの古い特徴を留どめている。この方言は，ネパール側のランタン (Langtang) 地方のチベット語方言や東ネパールのラメチャプ (Rame-chhap) 郡の山岳地帯で話されているカガテ方言と密接な関係があり，小さな下位方言群を形成している考えられる。この方言群の系統については後で触れることにする。

ネパールのチベット語として最も古くから外国人によく知られていた方言はシェルパ方言である。孫 [1983] によれば，シェルパ（夏爾巴）族は，1,000人足らずであるが，ヒマラヤ山脈を越え，北側のチベット自治区シガツェ地区のニャラム (gÑa-lam: 聶拉木) 県とティンケ (gTing-skjes: 定吉／結) 県に住んでいるという。奇妙なことにシェルパ族は，中国側では最近までチベット族と異なる少数民族であるとされていたようである。孫はニャラム県のシェルパ語を調査の結果それがチベット語方言であることを知り，中央方言に近く，カム方言にやや遠いと述べている。この方言について西は，既に [西　1979] で従来のシェルパ方言の分類を批判し，この方言が音韻(変化) 面では，中央方言的特徴が多く認められるが，幾つかの非中央方言的特徴も認められることを指摘した上で，M. Oppitz [1974] に述べられたシェルパ族の伝承を紹介し，この部族の中核をなす四つの氏族 (Minyagpa, Thimni, Serwa, Chakpa) が元来東部カム地方から移住して来て，16世紀中葉にネパール入り，定住するに至ったとする事実とこの非中央方言的特徴との関連性を示唆した。一方，瞿も，[瞿　1985b] の中で黄顥「夏爾巴人族源試探」[『西蔵民族学院学報』 1980(3)] と陳乃文「夏爾巴人源流探索」[『中央民族学院学報』 1983(4)] の説を引き，歴史文献によれば，ニャラム県（樟木口岸）のシェルパ族は13世紀初葉から中葉にかけてカム地方からネパールの現在地に移住したシェルパ族の一部が300年程前にニャラム県に移住して来たものであると述べ，シェルパ方言が今では中央方言に属するが，独自の方言を形成し，周辺のツァン方言とは異なり，声調体系と調値の一部が今でもカム方言を同じであるとしている。いずれにせよシェルパ方言のような辺縁部のチベット語方言の研究は，方言分類やチベット語の発達史の面で今後重要な役割を果たすことであろう。

2.2.2.　中国国外のチベット語方言

パキスタンとインド北西部のチベット語諸方言について Roerich [1931, 1933] と R.A. Miller [1956a] はバルティ (sBal-ti; Balti) 方言，プリク (Bu-rig; Purik/Purki) 方言，ラダク (La-wags/lədəks/; Ladakhi) 方言を西部チベット語方言にまとめる点で一致しているが，Uray [1954] は，これを二つの方言群に分けて，バルティ方言とプリク方言は西部古方言群 (Western Archaic Group) に入れ，ラダク方言に属する諸方言（a．シャム [マ] (Sham/Shamma) 方言と　b．ラダク方言（レー (Leh)方言とロン (Rong) 方言に下位区分する）は西部過渡的方言群 (Western Transitional Group) に加えた。Shafer [1966] は，この3方言にラフール (Lahul) 方言を加えた4方言で西部チベット方言群 (West Bodish Unit) を構成し，それを更にバルティ方言とプリク方言，ラダク方言，ラフール方言の三つに下位分類している。[西田　1970]

はほぼ Shafer に同様に考える。一方，Roerich [1933] は，ラフール方言を西部チベット語方言と「中央チベットの諸方言と密接な親縁性のある」スピティとガリ地方の諸方言との中間の推移段階をあらわす方言であるとしている。ここでは，ラフール方言を除く残りの3方言のみを本来の西部方言としておく。

1960年代までに知られていたヒマラヤ山脈南面のチベット語方言については，シッキムとブータンのチベット語以外では Grierson (編) *Linguistic Survey of India* (=LSI) 中の S. Konow の手になる第三巻の第三部が殆ど唯一の拠り所であった。そこに挙げてあるインド西北部からネパール国境までに分布するチベット語方言は，西から東へ，上述のラフール方言，スピティ (Spiti) 方言とニャム方言 (mÑam-skad: Nyamkat)，ジャド (Jaḍ) 方言，ガルワル (Garhwal) 方言である[24]。これらの方言が西部チベット語方言と異なる点は，まず，いずれも声調言語と記述されていることと一般に音節頭部(初頭子音／子音結合)や音節尾部（母音＋末尾子音）の変化が中央チベット語方言と平行的であるとされていることである。従って，ラフール方言以外の方言を，Uray は中央方言群 (Central Group) の中央下位方言群 (Central Sub-Group) に，Shafer はすべて中央チベット語方言群 (Central Bodish Unit) に分類してしまっている。西田は，前に述べたように全部南部チベット語方言にいれている。現時点でもある程度信頼できる方言資料は，[Roerich 1933] と [Sharma 1979] のみであるが，前者は肝腎の声調の記述に疑問がある。その上，他の方言をラフール方言とスピティ方言と全部同じ方言群にまとめられるとは断言できないが，かりに一つにまとめ，中央方言の強い影響を受けた西部改新的 (innovative) 方言とし，

24) スピティ方言，ニャム方言，ジャド方言とガルワル方言の声調について LSI は次のように記している。

スピティ方言：「声調とアクセントは中央方言の場合と同じである。単独の古軟（有声）子音に由来する低調の有気音 (aspirates) と前接辞を伴う古軟子音に由来する高調の有気音の相違は他の方言の場合より顕著である。」

ニャム方言：「声調とアクセントはスピティ方言の場合と恐らく同じである。」

ジャド方言：「声調とアクセントは中央方言の場合と恐らく同じである。」

ガルワル方言：「声調とアクセントは中央チベット語の他の方言の場合と恐らく同じである。」（下線はいずれも筆者による。）

この記述に従えば，スピティ方言と中央（ユー・ツァン）方言の声調体系は同じであることになる。しかし，後で述べるようにスピティ方言が声調言語であることは明らかであるが，その声調体系は決して中央方言と同じでない。従って，スピティ方言以外の諸方言についても「恐らく」という断り書きがなくてもこの記述はあまり信用の置けないものである。ただ地域的にみていずれも声調方言であることは確実であろう。また，スピティ方言に関する「単独」から「顕著である」までの記述は，この LSI の第三巻第一部の序論の部分におけるチベット語の音声に関する記述と同様に，厳密にいえば現在の音声学的観察と食い違っている。多分 $*C_{01}$vd->C-[低調] と $*CC_{01}$vd->C-[高調] 位の意味ではないかと思われるが，これは中央方言よりも一部のカム方言に当てはまる変化である。（第三章参照。）

本来の西部方言を西部古 (archaic) 方言としておく。

ネパールのチベット語方言については，LSI にはカガテ方言とシェルパ方言が記録されているが，いずれもインドのダージリンで収集されたものである。現在ネパールの中国との国境地帯一帯に多くのチベット語方言が話されていることが分かっているが，ある程度の量の調査報告のある方言は，カリガンダキ (Kali Gandaki) 上流域のロ方言，カグベニ方言，ザルコット (Zharkot/Zhar) 方言，ダンガルゾン方言，東ネパールのカガテ方言，ジレル方言，シェルパ方言，アルン川上流域のロミ方言のみである。この外に西ネパールのティチュロン (Tichurong) やドルポ (Dolpo) 地方の方言について SIL によって，簡単な語彙調査が行われたようである[25]。一方，中部ネパールのゴルカ (Gorkha) 郡のブリガンダキ (Buri Gandaki) 上流域のヌプリ (Nubri; Larkya)，クタン (Kutang)，ツム (Tsum; Shiar) の3地方ではチベット語が話されているが，十分な調査はまだ行われていない。ロミ方言地域の北リタク (Ritak) 村からアルン川の東を流れるタムル (Tamur) 川上流域のワランチュン (Walangchung/Walongchung) 及びそ周辺でもチベット語が話されていることが知られている。

尚，チベット語やチベット・ビルマ系言語についての誤った陳述もみられるが，ネパールのチベット族の分布情況に関しては，[Snellgrove 1961], [Bista 1967] と [Fürer-Haimendorf 1975] が詳しい。

ネパールのチベット語方言の分類は，[西 1979, 1981] で論じられたが，幾つかの方言についてはっきりとした結論が出せないままに終わっている。その後 Bielmeier は，[Bielmeier 1982] で先に述べた中国国内のキロン方言とネパールのランタン地方の方言やカガテ方言を含めた下位方言群（仮にキロン方言と総称する）の位置付けを試みたり，[Bielmeier 1981/2] で周辺のチベット語方言の分類について推測したりしている。一般にネパールのチベット語方言は，それぞれ何等かの古い特徴を保存していたり，独特な発達様式を示していたりする。こういった事実がこれらの方言の分類を難しくしているといえる。カリガンダキ上流域の諸方言（多分ヌプリ／ラルケ方言[26]も）とジレル方言は，ほぼ確実に中央チベット語方言に分類できる。また，ロミ方言もシェルパ方言も中央方言に入れておくことができるであろうが，これらの方言には，他の方言と異なる特徴がみられる。キロン方言は，幾つかの点で際立った古い特徴を留どめている方言といえる。Bielmeier [1982] は，Uray の分類基

25) 手元にないが，Swadesh の基礎100語表によるこの二つの方言の語彙が A. Hale, M. Hari & B. Schoettelndreyer (eds.) *Comparative Vocabularies of Languages of Nepal*. (First Installment) [SIL: Kathmandu, 1972] に含まれている。

準を適用し，更に幾つかの非中央方言的特徴を挙げ，これを「ラダク方言の型と幾分異なる西部過渡的方言に分類する必要がある」としているが，彼が根拠としている特徴はいずれも論証には不適切な例か「留保的」要素と考えられる[27]。その上，チベット語方言分類の最も重要な基準の一つである声調の有無と平行的な声調発達型から生じた声調を持つ方言間の声調対応を全く考慮していない。声調は，Uray 自身が資料不足からやむなく削除した分類基準でもある[28]。かりにこの小方言群を中央方言中の「古 (archaic) 方言」としておく。尚，ツム方言[29]は，Bielmeier [1981/2] の推測するようにキロン下位方言群に入る可能性がある。シェルパ方言とロミ方言もユー・ツァン方言とは別の下位方言としておく方がよいであろう。

既に述べたようにインドのシッキム地方から中国のトモ地方を経てブータンのほぼ中央部までの地域に分布するチベット語方言は，一般に南部チベット語方言とされる。

---

26) この方言の資料は，1980年10月に中部ネパールのガンダキ県マナン (Manang) 郡のトンジェ (Thonje) 村で出会ったゴルカ (Gorkha) 郡のラルケ地方のサムド (Samdo) 村から来たインフォーマントからテープに録音した約180項目の語彙しかない。ただし，この村名については地図で調べたが同定できなかった。録音状態は決してよくないが，声調の高・低ははっきりと聞き取れる。

この方言の初頭子音やその来源は，中央方言と殆ど平行している。ただし，$*C_{011/2}$vd-> Cvl-[低調]（C は有気音）であるが，$*CC_{011/2}$vd->Cvd-[低調] である。*有声摩擦音は無声化している。また，前鼻音化子音はなく，$*C_0C_3$- の変化も中央方言と同様である。前舌円唇高母音[y] と [ø] があり，末尾子音は，[p, k, ʔ, m, ng, r, l] で，*-Vn>-Ṽ であるが，二音節語では次の子音と同化し，同一調音点の鼻音となり，*-d>-ʔ/Ø で，*-n と同様に二音節語で次の子音と同化し，同一調音点の無声閉鎖音となっている。

27) 888–889頁に記載。

28) Uray [1954] は，註(4)で「末尾子音の働きのみならず，声調の有無も基準に含めるのが望ましいであろう。しかしながら，十分な資料が欠けているのでこれはまだ不可能である」と述べている。

29) ツム方言の資料は，註(25)に挙げた Hale-Hari-Schoettelndreyer (eds.) の Second Installment [1974] に含まれている基礎100語だけである。これは，ガンダキ県ゴルカ郡のツム地方のチョカン (Chhokang) 村の方言で1974年に SIL の David Lichter が採録したものである。声調の表記はなく，簡略音声表記のようである。初頭子音と子音結合（但，Swadesh の基礎100語に該当するチベット語の例には初頭子音結合の例は殆ど含まれない）核母音や末尾子音についてはヌプリ方言とほぼ同様であるが，この方言では [-n] が記録されている。しかし，語彙に多少の食い違いがある外，「頭髪」がヌプリ方言 [ʂa]（高調）に対してツム方言 [ta^h] である。ヌプリ方言形には，ロ方言やバラガオン方言 /hra/（高調）と平行的な変化がみられるためヌプリ方言をかりにロ方言やバラガオン方言と共にガンダキ方言群にいれておいた。「鳥」のツム方言形は，[čažun]（=[tçaʐun]）であるが，Bielmeier のキロン方言でも「小鳥」/čabi/（< *bja-bji) となっている。Bielmeier [1981/2] は，ツム方言及び周辺のチベット語方言について「もとツム地方の出身で現在カトマンズに住む幾人かの人々から集めた情報に基づいて，ツム地方方言はキロン方言と密接な関係があるであろうという作業仮説を立てることが可能である」と述べている。ツム方言については，これだけの資料からは断言できないが，彼の仮説を否定するだけの根拠もないところから一応キロン方言群に入れておいた。しかし，その周辺のチベット語方言であるヌプリ方言については，収録した資料中の「岩」*brag>[tʰaʔ]（低調）(:キロン /brạ/)，「果実」*fibras-bu>[ḍe:bu]（低昇-高調）（キロン /brɛ:/「米」参照)，「胸」*brang-khog>[thanggo]（低昇-高調）（キロン /brạnggò/）等の例から明らかなようにキロン方言とは異なっている。Bielmeier [1981/2, 1982] のチベット語方言に関する議論は，あまりにも古い資料・文献や憶測に頼り過ぎていると思われる。今後チベット語方言の研究には，古い資料・文献の取捨選択が重要であり，その基準とするに足るだけの新しい資料が既に提供されつつあるといえる。特に，中国人学者の資料や論文が全く無視されている点は批判に値しよう。

Uray は，この方言群を中央方言群の中の南部下位方言群 (Southern Sub-Group) とする。既に述べたように，西田も Shafer も南部方言を中央方言と共に古中央チベット語方言から分岐したと考えている[30]。（但し，上に述べたように西田の南部方言と Shafer の中央方言は，いずれもここでいうそれぞれの方言より包括的である。）

まだ多くの問題が未解決であるが，一応以上のように考え，中国国外のチベット語方言の分類と分布を示しておくことにする。

1. 西部古方言：（パキスタンのバルティスタン地方からインドのジャンム・カシミール (Jammu-Kashmir) 州のラダク地方）
   1) バルティ方言：（パキスタンのバルティスタン地方）
      1. スカルドゥ (Skardu) 方言
      2. カパル (Khapalu) 方言
   2) プリク方言：（ラダク地方のシュリナガル・レー間の街道沿いにゾジ峠 (Zoji La) からボド・カルブ (Bhod-Kharbu) 村までの地域：カルギルテヘシル (Kargil Tahsil) がプリク方言地域の中心で，この方言の話し手が多数派である村はカルギルを始めとする34カ村，その他プリク方言が併用されている村は23カ村 [Rangan 1979])[補3]
   3) ラダク方言：（プリク方言域よりも東側，ラダク地方のレー (Leh)，ニュマ (Nyuma)，ザンスカル (Zangs-dkar; Zangskar/Zaskar) とヌブラ (Nubra) の諸テヘシル）
      1. ザンスカル方言（：レーの西，ザンスカルテヘシル全域）
      2. ヌブラ方言（：レーの北のヌブラテヘシル）
      3. 上ラダク (Upper Ladakhi)／ストットパ (Stotpa「高地人」) 方言（：レーの東部の Upsi, Sakti, Chushul 等から中国国境までの地域）
      4. 下ラダク (Lower Ladakhi)／シャンマ (Shamma) 方言（：レーの北西，Khaltse, Timizgam 等の地域）
      5. 中央ラダク (Central Ladakhi)／レー方言

尚，レー及びその周辺地域では，中央ラダク方言が最も「威信的」(prestigious) であり，標準的とされているという（以上 [Koshal 1979]）。尚，LSI は A. H. Francke に従い，シャム方言，レー方言とロン方言の三つの下位方言を挙げているが，ロン方言が Koshal の挙げている下位方言のどれに相当するのかはっきりしない。また LSI によれば，ラダク地方とラフール・スピティ地方に挟まれ，チベット自治区

30）本文第二章（853頁）参照。

ガリ地区のルト（日土）とツァンダ（札達）の両県と国境を接するルプシュ (Rupshu) 地方では「一種の中央チベット語」("a form of Central Tibetan ') が話されているとされている。もしそうなら，恐らくガリ地方の中央方言の一種ということになるが，詳しいことは明らかでない。

2. 西部改新的方言（：ヒマチャル・プラデシュ州のラフール・スピティ地方からヒマラヤ山脈沿いにウッタル・プラデシュ州のガルワル地方までの地域）

1) ラフール方言（：中央ラフール地方）

1. コロン (Kolong/Kulang) 方言（トット・カッド (stod-skad)「高地コトバ[31]」とも呼ばれる：バガ (Bhaga) 川上流域とケラン (Kyelang) 周辺地域）

2. コクサル (Koksar/Khoksar) 方言（：チャンドラ (Chandra) 川上流域）（以上 [ROERICH 1933]）

2) スピティ方言（現地名はピティ (Piti) である：ラフール・スピティ地方のスピティ川流域の47カ村 [SHARMA 1979]）

(?)3) ニャム (mÑam-skad; Nyamkat) 方言（：ヒマチャル・プラデシュ州のキナウル (Kinnaur=Kanaur/Kanawar) 地方のサットレジ (Satlej) 川上流域）

(?)4) ジャド方言（：ウッタル・プラデシュ州のテヘリ・ガルワル (Tehri Garhwal) の西北端のニラン (Nilang) 地方）

(?)5) ガルワル方言（：ウッタル・プラデシュ州のガルワル地方のパインカンダ (Painkhanda)）（以上 LSI）

3. 中央方言

1) ガンダキ方言（：ダウラギリ (Daulagiri) 県ムスタン郡のカリガンダキ上流域のバラガオン (Baragaun) 地方から中国国境までの地域）

1. ロ／ムスタン方言

31) [瞿・譚 1983] によれば，チベット人は一般にアリ地方のチベット語をトットケ (stod-skad)「高地コトバ」と呼ぶ。このコロン方言の別称や上ラダク方言の別称であるストットパ（「高地人」）方言もやはり地理的位置関係に基づいて名付けられたものであろうが，互に異なる方言であり，混同しないように注意する必要がある。Bielmeier [1981/2] は，「興味深い第三のグループは，元来主に *sTod* に定住していた牛飼達，所謂ドクパ (ñbrog-pa「遊牧民」) である」といっている。恐らくこの *sTod* が特定の地名であると勘違いしたのであろう。この場合には多分「アリ地方」を指すのであろうが，チベット高原とネパールとの高低差を考えれば，国境を接するツァン地方でもよいのである。同じ論文中で「キロン，ティンリ (Ding-ri: 定日) とドクパの話し手のコミュニティ」のようにドクパがあたかも特定の方言を持つコトバ共同体のように述べているが，同じような誤解は，一部のチベット研究者にも共通してみられるものである。つまり，ドクパは単にチベットの諸地方の「遊牧民」のことであり，中央方言地域にもアムド方言地域にもおり，その話す方言も総て同じ方言というわけではないのである。

2.　バラガオン方言

1.　カグベニ方言

2.　ザルコット方言

3.　ダンガルゾン方言

(?)3.　ラルケ／ヌプリ方言（：ガンダキ (Gandaki) 県ゴルカ郡のラルケ地方）

2)　キロン方言（中央古方言）（：チベット自治区シガツェ地区キロン県からネパールのバグマティ (Bagmati) 県ラスワ (Rasuwa) 郡のランタン地方とジャナクプール (Janakpur) 県ラメチャップ郡）

1.　キロン方言

2.　ランタン方言（：ラスワ郡のランタン地方の4カ村）

3.　カガテ方言（：ラメチャップ郡のリクコラ (Likhu Khola) とキミコラ (Khimi Khola) の間の山岳地帯）

(?)4.　シアル／ツム方言（ゴルカ郡のブリガンダキ上流域）

3)　ジレル方言（：ジャナクプール県ドルカ郡のジリ (Jiri) とシクリ (Sikri) 盆地を中心とする地域）

4)　シェルパ方言（：サガルマタ (Sagarmatha) 県のソルクンブ (Solu Khumbu) 地方がその故郷とされているが，現在は，ドゥドコシ (Dudh Kosi) とその支流の流域沿いに同県の北部一帯やヘルム (Helmu) 川やトゥリスリ (Trisuli) 河上流域一帯）

5)　ロミ／シンサパ方言（：コシ (Kosi) 県サンクゥシャバ (Sankhuwa Shabha) 郡のアルン川上流域のチェプワ (Chepua; Tangmoche) 等5，6カ村）

尚，カガテやシェルパを始め，ネパールのチベット人でインドのダージリン周辺に移り住んでいる者も多い。

4.　南部方言（：インドのシッキム州からチベット自治区シガツェ地区亜東県を経てブータン中部に至る地域）

1)　西部方言

1.　トモ／亜東方言（：チベット自治区シガツェ地区亜東（卓木）県）

1.　上トモ方言 (Upper Tromowa Dialect)

2.　下トモ方言 (Lower Tromowa Dialect)

下位分類は，[Walsh　1905] に従った。瞿の諸論文に引用されている亜東方言とはいずれも異なるようである。

2.　シッキム (Sikkimese)／デンジョン (ñBras-ldzongs; Dänjong) 方言（：シッキム州）

2) 東部方言（＝ブータン方言）（：主にブータン西半分の地域 [Aris 1980]）

1. ガロン (sNga-slong) 方言（：西ブータンのハ (had), パロ (sPa-gro), ティンプ (Thim-phu), プナカ (sPu-na-kha) とワンデュ・ポタン (dBang-ñdus Pho-brang) の諸地方）

尚，ガロン方言には，数多くの方言があるようであるが，詳細は全く不明である。

2. ゾンカ方言 (rDzong-kha; Dzongkha)（17世紀以来ガロン諸方言を母体とし，ブータンの公用語／共通語として発達して来た言語）補4)

以上に概観したチベット語方言の主要区分もまだ最終的というにはほど遠く，下位分類まで考えた方言分類が可能になるのはいつのことか見当が付かないといっても過言ではない。分類の基準である音韻的，文法的あるいは語彙的諸特徴（ここでは分類指標と呼ぶことにする）も，中国国外の方言を含めたチベット語方言全体の分類にはまだ十分であるとはいえない。ここでは，分類指標を一々例を挙げて詳細に説明することはできないが，主に中国国内の分類指標を説明し，次に幾つかの重要な指標と関連した諸問題を検討し，最後にその指標を中心に中国国外の諸方言分類を考えてみることにする。

3. 方言分類の指標

まず，文語形の転写形は諸方言形の共通形式を表わすとして，ここに用いる記号を説明しておく。

C＝子音，V＝母音，V:＝長母音，V_1V_2＝母音結合（真性複元音），v_1v_2＝（上り型あるいは下り型）二重母音（仮性複元音）を表す。文語形の音節型は，(C_1) (C_2) (C_0) (C_3) $V(C_4)$ (C_5) のように表せるが，V 以外は任意的 (optional) 要素である。ただし，初頭子音が零の時は，語頭音節は音声的に [?] に始まったと考える。C_1 と C_2 は前接要素であるが，ここでは両者を区別する必要がないので，C_1C_2-/C_2- を共に *C*- で表す。C_0 は，音韻的には核子音であり，大きく C_{01}＝阻害音 (obstruents) と C_{02}＝響鳴音 (sonorants) に分けて考える。綴字上の lh-(＝C_2C_0-) と hr-(＝C_0C_3-) はいずれも単一音素 (C_0) で，無声流音 /hl-/, /hr-/ と解釈する。C_{01} と C_{02} はそれぞれ更に無声 (voiceless) 音＝C_{01}vl/C_{02}vl と有声 (voiced) 音＝C_{01}vd/C_{02}vd に分かれる。-C_3- は介音 (medials) であるが，C_0l- は，音韻変化に際しては -l- が核子音となっている。-C_4 も -C_{41}＝阻害音と -C_{42}＝響鳴音に分けて表し，-C_5 には第二次改定で削除された *-d も加える。尚，末尾子音の閉鎖音は，有声音で表されてい

るが，音声的にはむしろ無声音であったと考える方が言語類型的には納得がいく。いずれにせよこの位置で閉鎖音に無声対有声の対立はないので慣用に従っておく。地名の表記等の場合を除き，文語形には，現代方言形と区別するために星印 (*) を頭に付けて示す。長母音や母音結合の発達と関係のある二音節語の派生接尾辞（例：-pa～-ba, -po～-bo）と格助詞（例：-ñi, -la）は *{-CV} で表す。

P＝両唇閉鎖音，TŠ＝歯茎硬口蓋破擦音，Ṭ＝反舌破擦音／閉鎖音，K＝軟口蓋閉鎖音である。

C_1＝b; C_{21}＝b/d/g/s/r/l, C_{22}＝m/ñ(＝*N): C_{011}＝(閉鎖音) p/ph/b/t/th/d/k/kh/g, C_{012}＝(破擦音) ts/tsh/dz/tʂ/tʂh/dʐ, C_{013}＝(摩擦音) s/z/ʂ/ʐ/h/ñ; C_{021}＝(鼻音) m/n/ñ/ng(＝ŋ), C_{022}＝(接近音) r/l/j/w; C3＝r/l/j/w; V＝i/e/a/o/u; C_{41}＝b/d/g/s, C_{42}＝m/n/ng/r/l; C_5＝s/d。(大文字の場合のみ，ʂ＝Š, ʐ＝Ž とする。)

3.1.　分類指標に関する幾つかの問題

ある一つの言語的特徴――それは，音韻的，文法的，あるいは語彙的特徴のいずれでもよく，通時的あるいは共時的特徴のいずれでもよい――を取り上げ，言語地図上でその特徴の現れる地域を囲む線を等語線 (isogloss: isoglottic line) というが，方言と方言はこのような等語線の束で区切られていると考えられる。これは個々の方言間にも方言の主要区分についてもいえることである。しかし同じ方言区分に入る方言が全て連続的な等語線で囲まれているとは限らない。例えば，甘粛省甘南チベット族自治州のカム方言であるチョネ方言やトゥクチュ方言の地域は，アムド方言地域の中で孤立した「言語島 (linguistic island)」となっている。一方，アムド方言には，一般に無声摩擦音に気音性 (aspiration) の対立 (s 対 sh, c 対 ch, x 対 xh) がみられるが，これは大部分のカム方言の特徴でもある。逆に，（対立的）声調の有無は同時に中央方言とカム方言の特徴である。このように，等語線は常に一つの方言地域を囲むとは限らない。また，カム方言や一部の中央方言の前鼻音化子音は，前接鼻音（文語の *m-/*ñ- に対応）に由来する。これに対応する鼻音を第一要素とする初頭子音結合を含め，他の初頭子音結合も多かれ少なかれ保存しているのがアムド方言の特徴とされているが，甘粛省甘南チベット族自治州のアムド・シェルパ方言 [長野　1980] には前鼻音化子音しかない。このように，一つ一つの等語線は必ずしも平行せず，互いに交錯したりするので，方言境界を決定するには，相当数の指標を選ぶ必要がある。

一方，方言の主要区分を定めるための指標の選択の際には，例えば，音韻体系全体と関連せずにある一つの音韻特徴を取り上げて分類指標としたりするのは問題である。

カガテ方言（一般にキロン下位方言群）は，*(*C*)Pr->Pr- と *(*C*)Pj->Pj-(但，前舌非低母音 i/e の前では P- と Pj- の対立はない）のような子音結合を保存している点で中央方言にあって特異である。一方，西部古方言のバルティ，プリク方言にも同じような変化が認められる。しかし，このような特徴は，少なくとも主要区分の指標とはなりえない。前節に触れたが，カガテ方言と同じ下位方言群に属すると考えられるキロン方言にも同じように両唇閉鎖音 +r/j- が保存されており，Bielmeier は，基本的には，この特徴に基づいて，キロン方言を「西部過渡的」方言に分類した[32)]。

しかし，チベット祖語には勿論，Shafer や西田のように中間段階の祖語を認めた場合は，それらの祖語に対しても *(*C*)Pr- と *(*C*)Pj- が措定され，従って，このような子音結合の「留保」は，どの主要区分の方言にも残る可能性があるのである。例えば，部分的であれ，アムド方言のタウ方言には (**C*Pr->)CPr- が「留保」される一方で，南部方言には (*(*C*)Pj->)Pj-（但，方言によっては，-j- が二重母音の第一要素と解釈されたり，硬口蓋摩擦音に変化している）が「留保」されている。

チベット語方言の音韻的特徴を分類指標に選ぶ際に注意しなくてはならない今一つの問題に方言間の借用 (dialectal borrowings) の問題と文語形の読書音と口語の差異の問題がある。後者は同時に調査の際の注意事項といえる。読書音は，方言により差異があっても，一般に文語の転写形により近いとされる発音である。([周季文　1982], [西田　1978] 参照。) Suen [1981] によれば，四川省のアムド・ツォゲ方言には，*(*C*) Kr- の反映形に歯茎硬口蓋破擦音と反舌音の二種類があるが，Suen は，この二種類の反映形の存在について，(1) *Kr- は，アムチョ (Amtçhog: 阿木去采) 方言（甘粛省甘南チベット族自治州）等と共に *Kj- と融合 (Merger) して後に（歯茎）硬口蓋破擦音に発達した。現代アムド・ツォゲ方言の語彙中に散在する反舌音の反映形は，文語 [読書音] から浸透したものとして説明できようとする一方で，(2) *Kr- がまさに変化しようとする頃にこのコトバ共同体で二つの競合する変化が進行していた。つまり，かつて *Kr- を持っていたどの語についても反舌音を用いる者がおり，その一方で硬口蓋化を好むものもいたが，次第に後者の規則が地歩を占めていったとする別の説明も可能であるとしている。他方，華 [1983] は，アムド方言全体で **C*Kr- の反映形に (la) (C+) 硬口蓋破擦音（例：剛察方言）及び (lb) (C+) 歯茎硬口蓋破

32) [Uray　1954] の立てた指標は，ここでの表現方法でいいかえると次のように表せる：(1) Pj-, (2) Kr-, (3) dr-, (4) Pr-, (5) mj（+前舌母音）[この -j- は第二次綴字改定で廃されたので文語形には残っていないが，古文献には残っている], (6) zl-, (7) *C*- 等の現代方言における反映形 (reflexes)。本文にも述べたように，これらの指標自体は十分考慮に値するものであるが，次のアムド方言の例からも分かるように，特に(1)から(4)までのそれぞれを別個の指標と考えるのではなく，音韻体系全体の中で他の子音とも関連のある推移 (shift) と考えて指標を立てるべきである。[西　1979] の指標 (IV) と (V) はこのような観点で立てたものである。

擦音（例：夏河方言，化隆方言）と並んで(2)（C＋）反舌破擦音（例：夏河方言，化隆方言）が併存する同じ現象をについて，反舌音の例は，大多数が宗教，文化関係の語かアムド地区ではあまり使用しない語であるとして，9世紀の第二次綴字改定以降の中央方言からの借用語の可能性があると述べている。Suen の(1)の説明と華の借用語説のいずれも否定できないと思う。実は，こういった問題は，単にアムド方言のみならず，他の方言にも広くみられる問題である。先に触れた，キロン方言の語彙中にも *(*C*)Pj->TŠ-, *(*C*)Pr->Ṭ- のような中央方言と平行した変化を示す語が多少ある。Bielmeier は，その一部に借用語の可能性を示唆し，残りについては音韻規則を立てて分裂現象として説明しようとした。しかし，なんら一般性のある音韻規則を立てることができなかった。Bielmeier がこれらの語彙全体にアムド方言と同じような

33）この資料は，1980年末にカトマンズでハゾン出身者からテープに録音した約160項目の語彙である。これは，インフォーマントが不慣れなせいで録音が非常に悪いが，ブータンの方言資料は他にないのであえて利用した。ヌプリ方言の場合と異なり，中央方言との差異が大きいためこれだけの資料からこの方言の音韻体系全体の類推は不可能であるが，重要な点だけまとめて示しておく。

この方言では，原則として *(*C*)C_{011}/C_{012}vd->Cvd- だが，半有声化している例もある。例外的に，*br-/*bj- に由来する初頭音は，いずれも口蓋化の著しい無声閉鎖音である。例：「岩」*brag>[pj̠a:]（低調），「鳥」*bja>[pj̠a]～[pça]（低調），「砂」*bye-ma>[pjim]～[pçim]（低調）（[j̠] は摩擦的調音を表す）。また，核子音が有声摩擦音の場合は，例は少ないが，*C_{013}vd->Cvl-（例：「銅」*zangs>[sã:]（低調）；「ヨーグルト」*ʒo>[ço]（低調））で，*CC$_{013}$vd->Cvd-（例：「豹」*gzig>[zi:]（低調）；「四」*bʒi>[j̠i]（低調）；「弓」*gʒu>[j̠u]（低調））のようである。この方言には，*$C_{22}C_{011}$vd- に来源する前鼻音化有声閉鎖音がある。例：「虫」*fibu>[mbu]（低調），「矢」*mda>[nda]（低調），「ゾー（dzo）」*mdzo>[ndzo]（低調）。*ɕ-/*ʒ- いずれも硬口蓋摩擦音に変化しているが，ç-～ɕ- のような揺れがある。一方，*歯茎硬口蓋音は変化していない。特異な変化として，*sn->h-（例：*sna-ba>hapa（高-高調））がみられる。[*Dzongkha* 1977] には，*sñ- に来源する例として「心臓」*dong-sñing>dhõ:hẽ: があるが，ハゾン方言のインフォーマントは [do:ngi:]（低-高調）のように発音している。後で本文中に触れるが，南部方言では，一般に *-r->-j- の変化が起こり，その結果として *(*C*)Pj- と *(*C*)Pr- 及び *(*C*)Kj- と *(*C*)Kr- がそれぞれ融合し，Pj- と Kj- に変化したことになっている。ハゾン方言では，*Pj-/*Pr->[pj̠-]～[pç-]/[pçh-]（例：「夜」*phyi-ro>[pçhiru]（高-高調））/[bj-]（例：「蛇」*sbrul>[bjy:]（低調））に，*Kj-/*Kr->[c-]～[tɕ-]（例：「頭」*skra>[ca]～[tɕa]（高調））/[cçh-]～[tɕh-]（例：「犬」*khyi>[cçhi]（高調），「二人称代名詞」*khyod>[tɕho:]（高調））/[j-]～[dʑ-]（例：「背」*rgyab>[jap]～[dʑap]（低調））のように変化している。尚，「猿」*spra>[pça]（高調）でも [-j-] が無声化している。「米」は，*fibras>[re]（高調）となっている。音節末尾子音には，語末では [-p, -m, -ng] の例しかない。語中では，[-n, -r] の例もある。*-n は，一般に母音を鼻母音化して脱落しているようであるが，[-n] の例もある。これは，意識的に丁寧な発音の例ではないかと思う。例：「種」*sa-bon>[søn]（高調）。母音は，[i, y, e, ø, a, o, u] があり，*-n/*-l/*-s の前で口蓋化（前舌化）している。尚，この方言の録音では母音の長・短があまりはっきりしないが，音節短縮（下記）の場合に，*-VrCV>-V:C と *-VgCV >-VC（例：「黄色い」*ser-po>[si:p]（高調）対「黒い」*gnag-po>[nap]（高調））のような対立があるようである。声調についても，高・低の対立だけでなく，曲折（contour）の対立もあると思われるが，この資料でははっきりしたことは何もいえない。本文で後述する二音節語の短縮様式は [*Dzongkha* 1977] と同様であるが，同じ条件で短縮しない語もある。例：「星」*skar-ma>[karma]（高-高調）。この場合は恐らく借用語と考えることができるであろう。

可能性，特に借用の可能性を認めなかったのは，単に例外の語数が比較的多いというだけでなく，その中に基礎的といえる語が含まれていたからだと考えられる。一般に異なる言語間の借用の場合には，基礎的な語彙は借用され難いとされる。しかし，方言間の借用の場合には，このような制約はあまり厳しくないとも考えられる。南部方言でも，一般に *(*C*)Kr->Kj-（亜東方言では -j- は二重母音の第一要素に，ゾンカ方言では全体として硬口蓋閉鎖音に変化している）が認められ，ガロン方言に属するハゾン (Had-rdzong) 方言[33] でも一般にこの変化規則に従うが，この方言の *khrag「血」に対する語形は，予想される [cha:]（高降調）ではなく，[ṭha:]（高降調）である。インフォーマントによれば，前者のように発音する者もいるという。「血」のような語は，既に述べたようにチベット語全体からみても極めて基礎的な語である。こういった事実に加えて，キロン方言は，地域的にみても中央方言の強い影響が考えられ，上述の例も借用語の例であると考えることができよう。また，このような例が比較的多く，しかも語彙の基礎的な部分にまで浸透しつつあることは，いずれはこの方言からこの「留保」的特徴が消え去る運命にあることを示唆しているとも考えられる[補5]。

先に述べた Uray の挙げている七つの分類指標は，いずれも初頭子音結合の音韻変化に関するものであるが，その中の五つまでが核子音＋介音を扱っている。彼の選んだ指標自体は，十分考慮に値するものであるし，彼の結論の一部は極めて正鵠を得ているといえる。しかし，上に触れたような点での配慮が欠けていると思われる資料が，特に彼の北東諸方言 (North Eastern Dialects) の場合に，混入しているようである。

3. 2.　中国国内のチベット語方言の分類指標

中国国内の方言区分ではかなりの数の指標が挙げられている。[瞿　1963] や [瞿・金　1981] によれば，チベット語方言間の文法の差異は比較的小さく，文法指標が方言区分の重要な基準とみなせないという。チベット語方言全体に亙って同じことがいえるか否かまだ分らないが，一般に音韻指標が最も有効な指標と思われる。以下に [金鵬（編）　1983] の分類指標を中心に，それに [瞿・金　1981] の文法指標の一部 (16〜20) を加えて，中国国内のチベット方言分類指標を表にして示しておこう。（下表の中の注記の一部には，上記の著書と論文以外のものも参照している。）

瞿・金 [1981] は，音韻指標を数量的差異と質的差異に分けて挙げている。質的差異とは，一部上に示した指標と重複するが，各方言の子音，母音，声調の来源や音韻体系中に占める位置と機能の差異を指すという。例えば，歯茎硬口蓋破擦音は，一般

表1　中国国内のチベット語方言の分類指標

1. 初頭子音結合と声調 $*C_{22}C_0(C_3)$->	中央方言：鼻音＋無声閉鎖音／破擦音（前鼻音化子音） ラサ言では，前鼻音化子音のない者もいる。ツァン方言には，前鼻音化を失った方言が多い。ツァンダ方言では，有声前鼻音化子音である。 カム方言：鼻音＋有声閉鎖音／破擦音（前鼻音化子音） アムド方言：鼻音＋有声閉鎖音／破擦音（子音結合）
$*C_1C_{21}C_0(C_3)$->	中央方言：単子音 カム方言：単子音 アムド方言：子音結合
声調	中央方言：あり カム方言：あり アムド方言：なし
2. 有声閉鎖音／破擦音／摩擦音	中央方言：なし カム方言：あり アムド方言：あり
但，$*C_{01}$vd(C_3)->	中央方言：無声子音 カム方言：無声子音 アムド方言：無声子音
3. 無声有気摩擦音 $*C_{013}$vl-> （但，C_{013}-＝歯擦音）	中央方言：なし カム方言：一般にあり アムド方言：一般にあり
4. 無声鼻音 $*sC_{021}(C_3)$->	中央方言：なし 一部の中央方言にみられる無声鼻音は来源が異なる。 カム方言：一般にあり アムド方言：一部方言にあり
5. 硬口蓋閉鎖音	中央方言：あり カム方言：一部にあり *CTŠ->硬口蓋閉鎖音（例：チャムド方言） アムド方言：一部にあり（来源は様々，下記参照）
$*(C_1)(C_2)$Kj->	中央方言：硬口蓋閉鎖音 カム方言：歯茎硬口蓋音破擦音 但，*skj->無声歯茎硬口蓋摩擦音，*sgj->有声歯茎硬口蓋摩擦音 アムド方言：(1)（前置子音＋）硬口蓋閉鎖音／破擦音(例：タウ方言，アリク方言)，(2)（前置子音＋）硬口蓋破擦音（例：同仁方言），(3)（前置子音＋）歯茎硬口蓋破擦音（例：マチュ（rMa-tçhu：瑪曲）方言，楽都方言）
6. 長母音	中央方言：あり（<*-VC_4/*-V＋{CV}） カム方言：あり（<*-$VC_4(C_5)$/*-Vs/*-V＋{CV}） アムド方言：なし

7. 鼻音化母音	中央方言：あり (<*-Vn/nǵ) 但，*-Vng に来源する例は多くない。*-ng が失われない例の方が多い。 カム方言：あり (<*-Vm/n/ng) アムド方言：なし
8. 中舌母音 /ə/ ①*-i/*-u; ②*-iC$_4$/*-uC$_4$; ③*-a(C$_4$)/*-o(C$_4$)> ①* -i/*-u; ③*-uC$_4$ (但，-ng, -l, -s を除く)>	中央方言：ある方言もある（例：ラサ方言）が，機能負担量が小さく，ない方言が多い。 カム方言：一部の方言（例：デルゲ方言，パタン方言）を除きあるが機能負担量が小さい。 アムド方言：すべての方言に有り，頻度も高い。
9. 前舌円唇母音 (y, ϕ) ①*-uC$_4$(C$_5$)> ②*-oC$_4$(C$_5$)> (C$_4$=d, n, l, s (歯音)) ①，②（但，C$_4$=g, b, ng)	中央方言：全方言にあり。多くの語に現れる。 ①>-y(?)/-y; ②>-ϕ(?)/-ϕ カム方言：殆どの方言（チョネ方言にはなし）にあり。但，中央方言ほど多くの語に現れない。 ①，②>-y(?)/-y, -ϕ?/-ϕ で〔+高(母音)〕>〔+高〕，〔−高〕>〔−高〕とはならない。ティトエ方言では，*ib(s)>-y? もある。また，パタン方言でも①，②>-y(C), -ϕ(C) である。 アムド方言：ない方言が多く，それ程多く語に現れない。 楽都方言では，*-i/*-u/*-ub/*-ud/*-us>-y で，化隆方言では，*-u/*-us>-y; *-os>-ϕ で，タウ方言では，*-os>-ϕ である。
10. 二重母音 (v$_1$v$_2$)/ 母音結合 (V$_1$V$_2$)	中央方言：あり カム方言：あり 雲南地方の方言（例：中甸方言）に比較的多い。 アムド方言：なし
11. 音節末尾子音	中央方言：比較的多い。大部分の方言に -p, -k, ?, -m, -ng, -r がある。 一部の方言（例：アリ地区の諸方言）には，-l もある。 カム方言：一般に，大変少なく，-? しかない方言もある。 アムド方言：比較的多い。-p, -t, -k, -l, -m, -n, -ng, -r があるが，-t〜-l が自由交替の方言（例：夏河方言）もある。

12. 各方言間の同源語共有率（数）　　(849頁参照)

13. 自動詞対他動詞	中央方言：異なる声調で表示する。 カム方言：同上 アムド方言：子音と母音の屈折変化で表示する。

14. 形容詞の比較表現	中央方言：形容詞語幹＋接尾辞で表示する。 カム方言：原級と比較級は形容詞語幹＋接尾辞で，最上級は副詞で表す。 アムド方言：全級を副詞で表す。
15. 肯定「疑問の」標識	中央方言：「疑問」の文末助詞で表す。 カム方言：同上；(動詞の前に)「疑問」副詞を加えて表す。 アムド方言：同上；同上
16. 動作主，所有，起点，比較の意味範疇に対応する格助詞の数	中央方言：4助詞 カム方言：3助詞 アムド方言：1助詞
17. 動詞のテンスの種類	中央方言：6種類 カム方言：4種類 アムド方言：4種類 中央方言とカム方言では，テンス表示の接尾辞と助動詞に多くの短縮化がみられる。三方言のテンス表示の接尾辞は互いに異なる。
18. 動詞の屈折変化	アムド方言＞中央方言＞カム方言の順に良く保存している。 カム方言では，チャクテン方言のように少数の命令形にしか保存してない方言やパタン方言のように全く失ってしまった方言もある。
19. 存在動詞	中央方言：2個 動詞（実詞）あるいは助動詞（虚詞）として使用する際に人称，可制御・不可制御，直接体験・非直接体験，肯定・否定といった文法的意味の区別がある。 カム方言：2個 同上。 アムド方言：1個
20. 形容詞述語構造	中央方言：形容詞＋存在動詞 カム方言：(1)形容詞＋存在動詞；(2)形容詞＋判断動詞／終(語気)助詞 アムド方言：形容詞＋判断動詞／終（語気）助詞

に中央方言では二つの，カム方言では三つの，そしてアムド方言では四つの異なる来源があるとかアムド方言では高母音は開音節にしか現れえないといった構造的制約の差異のことである。数量的差異には，音節頭部（声母＝initial），音節尾部（韻母＝rhyme）と声調のそれぞれに対する方言別の平均値といったものを挙げている。

1.　音節頭部

中央方言：30個前後（ラサ／シガツェ28個～ツェタン（rTsed-thang：沢当）35個）

カム方言：50個前後（ニャクチュカ(Ñag-tçhu-kha：雅江)43個～デルゲ49個）

アムド方言：8,90個（夏河48個～アリク134個）

2.　音節尾部

中央方言：50個前後（ラサ47個～カル75個）

カム方言：（中央方言地域に近いケルツェ，ナクチュ等の方言を除く）20余個（ニャクチュカ17個～ケグムド31個）

アムド方言：30余個（循化19個～アリク33個）

3.　声調

中央方言：4個～6個（ラサ／ツェタン／カル4個～シガツェ6個）

カム方言：2個～4個（ニャクチュカ／ケグムド2個～ケルツェ／ナクチュ／デルゲ4個）

アムド方言：0（零）個

これに更に各方言に子音の種類，子音結合の取りうる前接子音の種類，母音の種類，末尾子音の種類等の差異を指標として挙げている。

勿論，こういった指標による方言の特徴付けは，カム方言に属する方言ならどの方言も上に挙げたカム方言の総てあるいは殆ど総ての特徴を持っているというのではないが，それに近い方言がある筈であり，そういった方言がその主要区分の典型的かつまた中心的方言と言うことになろう。具体的資料に乏しいので各方言区分についてどの方言がそのような典型的方言なのか不明だが，例えば，中央方言では，明らかにラサ方言がそれに当たる方言である。

他方，中心から遠ざかれば遠ざかる程本来の特徴は少なくなり，隣接する方言がより「威信的」であればあるほどその影響でその方言と多くの特徴を共有するようになることが予想される。ガリ地区のケルツェ（改則）方言はそのような方言である。ケルツェ方言の音韻体系は，例えば，四川省のパタン方言の音韻体系よりもガリ地区の他の諸方言も含めた中央方言の音韻体系にむしろ近いといえる。瞿・譚 [1983] は，この方言がカム方言であることを論証するために声調の調値の差異や三人称の判断動詞や存在動詞の差異といった上に挙げた指標以外の幾つかの指標を加えている。

3.3.　声　調　指　標

声調は，最近のチベット語方言分類では常に取り上げられる重要な分類指標の一つである。現在確実に声調言語であると分かっている方言は中央方言，カム方言と南部方言であるが，この外にも，スピティ方言は声調言語であり，Roerich [1933] や LSI の記述を信ずるならば，一般に西部「改新的」方言はやはり声調言語ということになる。

Benedict [1972a 等][34]は，チベット・ビルマ祖語のみならずシナ・チベット祖語も既に *A（平声）と *B（上声）の二声調を持つ声調言語であったとする。しかし，チベット・ビルマ系の諸言語に関する限り現在のところその声調がこの二声調から派生したと説明するのは困難である。現状では，祖語が声調言語であったか否かについてもまだ意見の一致をみていない。

一方，9／10世紀以前のチベット語に声調がなかったとする点では異論はない。これは，そもそもチベット語の文字体系にビルマ語の場合のように声調あるいは「声立ての型 (phonation type)」を表記する記号がなかったというだけでなく，文語形の分節素の音韻素性，音節構造や語構造を，対応する現代方言のそれと比較することで，殆どの場合に現代方言の声調の来源が説明できるからである。勿論，この場合には，「祖語声調言語」説を唱える者はチベット語では祖語の声調が一旦失われた後に一部の方言が再び声調言語になったとするのである。

しかし，ある方言に単に「対立的」声調があるか否かだけではまず分類指標として殆ど役に立たない。第一に，西部「改新的」方言は，スピティ方言の声調体系からみる限り，声調発生論 (tonogenesis) 的に他の声調方言のそれとは異なる説明が必要である。第二に，甘粛省のアムド・シェルパ方言 [Nagano 1980] には，初頭子音が鼻音である語に限って，声調による対立があるという。また，Sprigg [1966] は，バルティ方言（スカルドゥ及びカパル方言）の多音節語（二音節と三音節語）に声調による対立を認めている。もっとも，この場合の声調の領域は，音節でなく語であり，語アクセント (accent) と呼べるものである。(尚，カパル方言については，Bielmeier [1985] は，この語アクセントを高低差 (pitch) というよりも強弱差 (stress) としているが，ここでは，Sprigg に従っておくことにする。) いずれにせよ，単に声調の有無だけを問題にすれば，この二方言は，いずれも声調対立のある言語となり，アムド方言にも西部方言にも声調言語（方言）があるといえることになるので，声調は音韻指標として意味のないものになる。

34) Benedict のシナ・チベット祖語やその下位言語群であるチベット・カレン祖語とチベット・ビルマ祖語における二声調説については，[Benedict 1972a, 1972b, 1973] 等を参照。Benedict 説は，基本的には漢語祖語，カレン祖語，ビルマ語，ヌン語等の諸言語間の声調対応の解釈に基づいている。その後，[Benedict 1973] では，R. Pittman & J. Glover 1970 [Proto-Tamang-Gurung-Thakali. In Hale and Pike (eds.), pp. 9–22] の再構に基づくタマン祖語の二声調がやはりシナ・チベット祖語の声調に対応するとした。筆者は，もう10年程前のことであるが，後に Mazaudon（文献については，[Nishi 1979] 参照）も従っているこの Pittman-Glover の声調再構を受け入れているわけではないが，たとえそれに従ったとしても，彼の指摘するような対立は立たない（例外の方が多い）旨，筆者は，Benedict 氏に書き送った記憶がある。Mazaudon も，[Mazaudon 1985] でシナ・チベット祖語の *A と *B に対応するカレン祖語の声調とタマン祖語の二声調を比較することで Benedict 説を検証したが，結果は否定的であった。

そこで，まず，瞿 [1982a] 等に従って，中国国内の中央方言の声調体系を検討してみよう。(音節の長短については，一部 [瞿　1982d] も参照してある。)

現代中央方言の声調体系は，一般に(1)ピッチ (pitch) の高低と(2)音節の長短とにそれぞれ相関する二つのパラメーター (parameters) の交叉する体系として説明される。(1)の高低差により声調は起点の高い高調 (5/4) と起点の低い低調 (3/2/1) に分かれる。(2)の長短差により短音節に現れる短調と長音節に現れる長調に分かれる。短音節は，音節尾部が短(鼻)母音，短(鼻)母音＋末尾子音(阻害音) あるいは (上り／下り) 二重母音 (仮性複元音) から成り，長音節は，音節尾部が長(鼻)母音，長母音＋末尾子音(響鳴音) あるいは母音結合 (真性複元音) から成るものである。

カム方言の声調体系も一般にこの高・低調と短・長調から成っているが，四川省カンツェ・チベット族自治州のムヤ (木雅) 方言やニャクチュカ (方言) には，高調対低調の対立しかない。

この声調体系がどのようにして発生したかは文語形との対応から大略次のように説明できる。

A.　高調対低調：

1a.　$*(C)C_{01}vl(C_3)$->高調

b.　$*CC_{02}vd(C_3)$-/$*C_{02}vl(C_3)$->高調

2a.　$*(C)C_{01}vd(C_3)$->低調

b.　$*C_{02}vd(C_3)$->低調

尚，カム方言では，一部の方言で $*CCo_1vd(C_3)$->高調の変化が認められる。(下記参照。)

B.　短調対長調：

1a.　$*\text{-}VC_{41}(C_5)$>短調

b.　$*\text{-}VC_{42}C_5$>短調

c.　$*\text{-}C_3V(C_{41})$/$*\text{-}VC_{41}(C_5)$>短調

1c. は，一部の方言のみにみられる変化である。例えば，亜東 (トモ) 方言では，*-jV(C_{41})>*-iV(?) (例："鳥" *bja>phia^{13} [短調])；*-rV(C_{41})>*-iV(?) (例："崖" *brag>phia?^{13} [短調]) のように変化している。一方，中央方言に属するシガツェ地区のキャンツェ (rGjal-rtse: 江孜) 方言では，*-Vb(s)>-Vu (例："倒れる" *rdibs>tiu^{35} [短調]，"炉" *thab>thau^{53} [短調]) の変化がみられる。尚，*-C_{41} の *-s は，中央方言では，一般に他の阻害音と平行的に短音節を生じたが，カム方言やガリ地区の諸方言ではむしろ響鳴音 (*-C_{42}) と平行的に長音節を生じている。また，

*-$C_{42}C_5$ における *-C_5 の影響も一般に中央方言の一部の方言に限られるようである。カム方言では，*-C_5 の有無は音節の長短の派生と相関関係は認められないようである。

2a. *-$VC_{42}(C_5)$ > 長調

b. *-V + {CV} > 長調

*{CV} は，文語の縮小辞 *-ɦu，名詞や動詞の派生接尾辞の *-pa～*-ba，*-po～*-bo，*-mo，*-ma 等及び格助詞の *ɦi ,*la 等である。また，[譚　1982] によれば，例外的にガリ地区のプラン，ツァンダ，ツォチェンの諸方言で第二音節が *-V＋鼻音である二音節語の短縮（一音節化）により鼻音に終わる長音節が生じている。（二音節語の短縮現象については，[西田　1983] も参照。）

以上をまとめて，[瞿　1982a] に従い，中央方言とカム方言から幾つかの例を取り上げて表にして示すと次のようになる[35]。

下の表でラサ方言からシガツェ方言までの四方言は中央方言，残りの六方言はカム方言である。短音節（短調）・長音節（長調）の境界線は，*-Vs が *-VC_{42}（響鳴音）と同様に一般に長音節となり，*-C_5 が声調の発達になんらかの影響を与えなかった方言に従っている。音節頭部の核子音が阻害音の場合には，方言毎に声調の分配関係が一致しない点が目立つが，[瞿　1982a] 等は，その原因を次のように説明する。（*-C_3- は省略して示す。）

表2　中国国内のチベット語方言声調対照表 [瞿　1982a]（パタン方言 [格桑　1985]，ケルツェ方言 [瞿・譚　1983]）

	*(C)C_{01}vl(C_3)-			*(C)C_{01}vd(C_3)-				*(C)C_{02}(C_3)-			
								短音節		長音節	
	短音節		長音節	短音節		長音節		*C_{02}vl-/C-	*C_{02}vd-	*C_{02}vl-/C-	*C_{02}vd-
ラサ	53		55	12		14		53	12	55	14
ティポ	53	51	55	35	13			53	35	55	13
ナンカルツェ	53		55	35	131	15		53	35	55	15
シガツェ	53	51	55	12	131	15		53/51	12/131	55	15
ムヤ	53			13				53	13	53	13
デルゲ	53		55	53	31	55	13	53	31	55	13
チョネ	51	44	22	31	44	22		51	31	44	22
パタン	53		55	53	231	55	13	53	231	55	13
ケルツェ	53		51	31		22		53	31	51	22

ラサ方言では，*-VC_4C_5>-V?（短調）となるが，*-VC_4C_5 には*-Vnd *が含まれる。(ZHANG Liansheng [1986] 参照。)

ティポ方言では，*-C_4 (=*d/g/s)>*-?>-Ø で，*C_0vl- なら51（短調）に，*C_0vd- なら13（長調）になる。

ナンカルツェ方言では，*-ms/ngs>-m/ng で，*C_0vl- なら131（短調）になる。

シガツェ方言では，(1)ティポ方言と同様に，*-C_4(=*d/g/s)>*-?>-Ø あるいは(2) *-nd/ms/ngs>*-?>-Ø で，*C_0vl- なら51（短調）に，*C_0vd- なら131（長調）になる。

デルゲ方言では，*CC_{01}- で短音節なら53（短調）に，長音節なら55（長調）になる。

チョネ方言では，*C_0vl/vdVC_4-（閉鎖音を除く）で，長音節なら22（長調）に，*CC_0vl/vdVC_4-（閉鎖音を除く）で長音節なら44（長調）になる。

パタン方言では，*CC_0vd- の語の声調が高調（53/55）と低調（231/13）に分裂するが，原因は不明である。

中央方言とカム方言の声調発達様式は，初頭核子音が*響鳴音の場合はほぼ図式通りといえるが，*阻害音の場合は，方言により上述のようなずれがある。これは，各方言の音韻変化が平行していなかったり，時間的なずれがあったりすることから当然予期されることである[36]。

瞿は，現代チベット語方言の声調体系の発達を説明するのに上述のような高・低と短・長の二種類のパラメーターあるいは調類を立てたのであるが，この分類法に異論がないわけではない。

初頭核子音の阻害音と響鳴音を区別しなかったという誤りはあっても，チベット語

35) 次の対照表に挙げてある調値は，各調素を代表する異調 (allotone) である具体的調値（実際に聞き取った調値あるいは音声実験器材により記録された調値）のいずれかをそのまま表した値とは限らない。中には実際の調値を表しているものもあるが，中国の学者は，対立する調素を表す調値との対照を明確にするために実際の調値に一種の「標準化」を加えて示す。瞿 [1985b] によれば，例えば，[22] の調値は，これが [11] と [33] と対立しない調素体系では対照を明確にするために奇数調で標記するといった原則で^{11}あるいは^{33}として標記するという。しかし，当然^{11}あるいは^{33}が実際の調値をそのまま表している場合もある。問題は，ある「調値」が「標準化」された標記か実際の値か必ずしもはっきりと断っていない場合があることがあり，混乱が生じる点である。また，このような「標準化」を行えば，5分法で表記する意味があまりなくなり，「高平」，「低昇」といった一種の素性表記と変わらないかそれよりも不正確なものとなりかねない。このような「標準化」は，いつ頃から始まったのか知らないが，文革以前のロロ・ビルマ系言語の資料にも既にみられるものである。瞿の論文は，この慣行を批判し，実際の調値の方言研究における重要性を指摘したものである。

尚，A. M. Hari [1980] は，ラサ方言の声調体系の極めて特異な観察と分析を示しており，例えば，短音節に四つの声調対立を認めている。しかし，その後彼女の観察と分析を支持する学者はまだ出ていない。

の声調を高調（型）・低調（型）に分け，それを初頭音の音声素性（無声・有声）や前接子音の有無と結び付けた説明は既に Jäschke [1881] にみられるものである[37]。その後，チベット語の声調体系は，主にラサ方言や中央方言を中心に多くの学者により研究されるが，いずれの音韻分析も高・低の対立については基本的に一致しているといえる。

上掲の対照表では，瞿 [1982a] の短調と長調の欄を短音節と長音節に改めてあるが，瞿は，声調の曲折 (contour) が音節(母音) の短・長に条件付けられていると分析したのであろう。しかし，このような音韻分析が一般に認められているわけではない。現代チベット語方言の声調発達を考える場合には，むしろ声調の曲折に留意すべきであろう。実際に，他の多くの言語学者は，チベット語方言の声調分析で長音節は二モーラ (mora) と分析したり，逆に音節の短長を余剰的な (redundant) ものと分析したり，語全体を声調の領域とした「語アクセント」のように分析したりしており，今でも解釈の一致がみられない。しかし，中央方言とカム方言の声調発達において共通した基本的な特徴が初頭子音の音韻素性や初頭子音結合とピッチの高・低との相関関係にある点で異論はないといえる[38]。従って，この点を中心に他の声調方言や中国国外のチベット語方言の声調体系と分類を検討してみることにする。

36）一部のカム方言で初頭核子音が有声阻害音の場合に，核子音が＊響鳴音の場合と平行的に，前接子音がピッチを引き上げる効果を生じている点が注意を引く。デルゲ方言やパタン方言の例から一部のカム方言では前接子音の消失過程で＊響鳴音の前接子音と平行的な変化を辿った方言もあったと考えられる。西田 [1979] は，チョネ方言における長調の44調と22調への分裂について短音節形式の方が前接子音を早期に消失したせいであろうとしている。格桑 [1985] は，パタン方言では，規則的声調発達様式と食い違う例を幾つか挙げている。

例：

(1)「箱」　$gã^{55}$<*sgam「米」　$n_{ɐ}dz_{ɕ}ɛ^{55}$<*fibras「殻類」$n_{ɐ}dz_{ɕ}o^{53}$<*fibru

(2)「跨ぐ」$gã^{13}$<*bgam「恨む」$n_{ɐ}dz_{ɕ}ɛ^{13}$<*figras「歩く」$n_{ɐ}dz_{ɕ}o^{231}$<figro

（「跨ぐ」bgam は，辞書にないが，「歩」gom-pa と関係のあるカム方言に独特の動詞形なのであろうか。）

対照表では，(1)の場合も考慮した形で示してあるが，(2)が規則的で(1)は例外であり，特別な説明を必要とする例として取り扱うべきかも知れない。瞿の説明では，このような例外的ケースは省略してあるものと思われる。格桑は，数は少ないが，このような例が他のカム方言にもあると述べている。

37）現代チベット語の声調体系に関する1970年代までの諸説については，[西田　1970]，[胡 1980] 及び [Hari　1980] 等に詳細な比較が載せられている。

38）チベット語方言の声調発達の歴史的過程について最初に体系的説明をみたのは，西田 [1970] である。[西田　1970] の表題は，『西番館訳語の研究』となっているが，副題に「チベット言語学序説」としてあるように，後半でその時点までのチベット語関係の諸研究や資料を集大成し，チベット文語成立や諸方言の歴史的発展過程などについて巾広い考察を行っている。中央方言とカム方言における声調の発達についても，三つの発展段階に分け，ほぼ前述（871頁参照）のような因果関係（無声・有声の対立の留保・消失，初頭子音結合の単純化の有無と下降（高）・上昇（低）調の発達）で説明している。発展段階については，当時の方言資料が大変限られていたこともあり，現時点では批判されるべき点もあると思われるが，基本的には今でも通用するものである。その後，[西田　1979] でこの初頭子音（結合）の二指標とそれと因果関係のある声調指標が中国国内の三方言区分の有効な指標であることを示唆している。尚，西も [西　1979] でほぼ同じ意図から有機的関連のある指標としてこの三指標を方言分類に用いている。

4.　中央方言とカム方言以外の声調方言の分類

4.1.　非中央方言型の声調方言

[NAGANO　1980] のアムド・シェルパ方言の場合は，基本的に *(*C*)C_{021}- に由来する鼻音に始まる語でのみ高・低の声調対立が認められるというが，中央方言とカム方言に一貫してみられる *CC_{021}->高調，*C_{021}->低調といった来源関係は認められない。例えば，「耳」*rna>na（高調），*sna>na（低調）;「母」*ma>ma（高調），「傷」*rma>ma（低調）のように，*C_{021}->高調や逆に *CC_{021}->低調の例が例外といえない程に認められる。また，この方言では，幾つかの例外はあるが，*(*C*)C_{01}vd- は，前接子音の有無とかかわりなく有声性をとどめており，無声対有声の対立が声調の対立に置き換えられていない。しかし，その一方で，長野は，「初頭音に[鼻音以外の] 他の子音を持つ音節は，調素 (toneme) を担わないが，音声的に定まったピッチの型を持っている」と述べ，『語彙』の部分で各例毎にピッチの高低を表示してある。興味深いのは，全体的にみて確かに *(*C*)$_{01}$vl->高ピッチに対して，*(*C*)C_{01}vd->低ピッチのといった例が多いが，逆になっている場合も決して少なくない。この点が同じように基本的に初頭閉鎖音と破擦音で無声対有声の対立を留保しているネパールのロ／ムスタン方言（中央方言）と異なっている。アムド・シェルパ方言の場合には，今後たとえ完全に声調言語に発展するとしても，ロ方言の場合と異なり，中央方言やカム方言とは異なった高低の配分関係を示す体系を持つであろうと予想される。いずれにせよ，アムド・シェルパ方言は，音韻面では確かにカム方言と共通する部分もあるが，声調指標を含む幾つかの点（例：末尾子音の数と種類）でやはりアムド方言であるといえよう。

[SPRIGG　1966] のバルティ方言（西部古方言）の声調（語アクセント）の場合も，Bielmeier の主張するように声調の対立というより強弱アクセントである可能性がある上に，この声調の発達様式は，中央方言やカム方言のそれと平行しておらず，全く異なる説明が必要である。

ここで西部改新的方言に分類したラフール方言とスピティ方言の声調であるが，前者については，Roerich の声調記述が果たしてどの程度信頼できるか疑問がある。この方言は，阻害音が以前の無声対有声の対立をほぼそのまま保持している点を除けば，単純化された初頭子音，母音や末尾子音の数や種類等の点では極めて中央方言的であり，少なくとも初頭音が響鳴音である語に関しては，示差的機能を持つ声調があって

も決しておかしくない方言である。Roerich は，声調対立の例として核子音 (*C_0) が側面音である語しか挙げていないが，彼の記述が正しければ，その主張に反して，この方言の声調体系は決して中央方言的であるとはいえない。一方，[JÄSCHKE 1867, 1881] に拠っているとする LSI のこの方言に関する記述では，「ラフール方言は，西部チベット語と中央チベット語の間の一種のリンク (link) である。それは中央チベット語の声調を持たない。他方，多くの細かい点でスピティのチベット語と一致する」と述べられており，この声調については，「この方言では，声調 (tone) は殆ど用いられない。末尾子音の脱落を示す *abrupt* 調（多分は「入声」を指すものと思われる）は，ラフール方言がツァンとユーのチベット語と共有するものである。しかしながら，それは，通常のチベット語の声調体系と何の関係もない」とされている[38]。この記述も果たしてどの程度の信頼性があるか疑問である。実際に S. R. Sharma [1979] のスピティ方言の声調体系をみてみると，Roerich のラフール方言のそれとは全く異なっている。この問題は，結局のところこの方言の声調の信頼できる記述が発表されるまで解決できないのであるが，LSI と Roerich の記述をある程度参考に

39) Roerich [1933] は，「チベット語口語諸方言は，明確な調素の体系をもっている。チベットで話されている異なる方言と下位方言は，その体系の主要な点で一致するようであり，目にとまる唯一の相違は，その体系の基本的な四調素の間での高ピッチと低ピッチの配分関係にある。古代中国語におけるように，初頭無声音を持つ総ての音節は一般に高ピッチで発音され，初頭有声音を持つ音節は低ピッチで発音される」と述べている。従って，ラフール方言の声調体系も中央方言の声調体系と基本的には同じであるということになる。[ROERICH 1933] では，高調・低調の対立の例は響鳴音の例しか挙げていない。これは，この方言が一般に *$(C)C_{01}$- に由来する初頭音で，幾つかの例外や交替の例を除いて，無声対有声の対立を保ち，初頭無声音の音節は高調に，初頭有声音の音節は低調になるということかも知れない。もしそうなら，阻害音に関する限り基本的には中央方言的傾向が認められることになる。初頭音が響鳴音の例の場合には，(1) 高昇調 (High rising tone)，(2) 高平調 (High level tone)，(3) 低平調 (Low level tone) と (4) 降促 (?) 調 (falling abrupt tone) の四声調があるとする。例：(1)「手」lag-pá>la′-(pa)，(2)「機会」glags>la¯，(3)「だ(判断動詞)」lags>la_，(4)「峠」la>la̗。一方，文語形の末尾子音 (-C_4C_5) と声調の関係については，(1) -g>-k(g̲)〜-Ø（高昇調），(2) -d>-t(d̲)〜-Ø（降促調）となり，(3) -C_{42} (s を含める)/-C_4s/-Ø>-C（平調）となると述べている。(*abrupt* をかりに「促」と訳しておく。) また，チベット語の口語方言を通して適用される規則として，前接辞の先行する語は前接辞を持たない語よりも高いピッチで発音されるとも述べている。こういった記述から考えて，(1) の高昇調の例は前接辞を伴わないのに高調とされるのは，恐らく対応する文語形の末尾音 -g に起因すると考えるのであろう。また，(4) の降促調は低（降促）調を意味するものと考えられる。いずれにせよ，本文の説明からも分かるように，このような声調体系は中央方言のいずれの声調体系とも一致しない。西田 [1970] は，中央方言の声調分類に関する Roerich の所説を要約し，「全体として，Roerich のこの分類は，漢語の平上去声との表面的な平行性を考慮しすぎているように思われる」と結んでいるが，ラフール方言の声調に関する記述も果たして厳密な音声学的観察に基づくものか否か疑わしい。また，本文の説明から明らかなように中央方言とカム方言では，前接子音（辞）が声調の高低に関係するのは，カム方言の一部を除き，一般に核子音 (*C_0) が響鳴音の場合に限られている。しかし，Roerich は，これを阻害音も含めたもっと一般的な規則として捉えていたのではないかと思われる。尚，註 (24) に引用したスピティ方言の声調に関する LSI の記述は，ここに引用したラフール方言の声調に関する記述と矛盾している。

し，更に，この方言の地理的位置関係を考慮して，かりにスピティ方言と同じ下位方言群に入れたのである。

S. R. Sharma の記述しているスピティの方言の場合，子音については，*C_{01}vd->無声無気音で，*CC_{01}vd->有声音となっており，前鼻音化子音も無声化鼻音もなく，その外，*初頭子音結合の単純化，*子音＋介音の変化様式，末尾子音の種類と数，更に，母音についても，前舌円唇母音がないが，音韻面だけからみると，分節要素に関する限り，ラフール方言同様に中央方言に分類されても決しておかしくないといえる。しかし，声調体系は全く別である。Sharma は，この方言の声調記述で声調の領域を音節でなく，語であるとし，三つの対立的声調を認めて，それぞれトーン (Tone) 1/˪/を降調，トーン2/˗/を平調，トーン3/˥/を昇調と呼んでいる。ただし，音節数その他の条件が異なれば，実際の調値も異なるようである。多少正確さを欠くことになるかも知れないが，比較の便宜を考えて，Sharma が高・中・低の三段階で図示してある基本的な声調曲線を数値を用いて五段階表示に直してみるとトーン1＝413，トーン2＝32，トーン3＝354位に表示できよう。起点を取って考えるなら，トーン1は，高調で，トーン2とトーン3は，いずれも低調ということになる。この方言では，母音の短・長や音節の短・長と声調の間に相関的な関係はない。Sharma の論文中に挙げられた語例は決して多くないので，これだけから判断するのは問題であるが，降調(＝高調)の例は非常に少ない。しかも，対応する文語形がある例では，殆どの場合初頭子音が前接子音を伴わない有声子音であり，無声有気あるいは有声の閉鎖音，破擦音と摩擦音を初頭音とする語でこの声調を持つ例はない。例：「踊り」*gar>kàr，「もし」*galte>kàlte，「今」*da>tà，「凍結」*dar>tàr，「牛」*ba>pà，「チベット人」*bod-pa>pòtpa。平調と昇調の分布をみても，今のところ中央方言の声調にみられるような文語形の初頭子音（結合）とのなんらの相関関係も発見できない。初頭核子音が響鳴音の最小対の例を挙げると，là(<*la)「峠」; lā(<*la)「於格助詞」; lá(<*hla)「神」のように中央方言やカム方言の声調と高・低が逆になり，しかも「峠」と「於格助詞」（恐らく単独に発音された際の声調であろう）の場合は分裂条件は全く説明できない。Sharma の声調記述からみる限り，この方言は中央方言に入れることはできない。この方言が声調言語となったのは，音韻体系の他の面と同様に恐らくより「改新的」な中央方言の影響によると考えられるが，一体どのような形で影響を受け，どのようなプロセスで対立的声調を持つに至ったかはそれ程簡単に解ける問題ではないであろう[40]。

4.2.　中央方言型と準中央方言型の声調方言

4.2.1.　ネパールの諸方言

ネパールのチベット語方言の分類については，既に［西　1977, 1979］や［NISHI 1983］で触れたが，一部の方言については，当時中国国内のチベット語の分類指標について分からない点が多く，はっきりと結論を出せないで終わった。しかし，いずれも主要区分では中央方言に入れることができるのではないかと考えていた。問題は，カガテ方言やシェルパ方言の他の中央方言にみられない諸特徴をどう説明するか，また，これらの方言を中央方言内の下位方言群に入れるべきかそれとも別の下位方言群を立てるべきかといった点にあった。これらの問題に対する最終的な回答は，つまるところ中国国内の諸方言研究の進展と資料の公刊に懸かっているともいえよう。

ネパールのチベット語方言の中で問題なく中央方言に属するといえる方言は，ここでガンダキ方言と呼んでいる中西部の諸方言と東部のジレル方言である。ロ方言を除けば，このいずれの方言でも(1) *C_{01}vd-＞無声音（低調）であり，(2) *CC_{01}vd-＞有声音（低調）となっている。ただ，(1)の場合にガンダキ方言に入れたヌプリ方言とジレル方言では，無声有気音となっているのに対し，残りのガンダキ諸方言では，無声無気音となっている。一方，ガンダキ方言の中でロ方言のみは，*C_{013}vd-（ɦ は除く）＞無声無気音（低調）であり，*C_{011}/*C_{012}vd-＞有声音（低調）である。核子音が*響鳴音である場合の高調と低調の配分関係も中央方言やカム方言と平行的である。いずれの方言にも前鼻音化子音や無声化鼻音はなく，末尾子音の数と種類も中央方言と比較できるものである。（ロ方言以外では，-l も保持している。）母音体系については，ジレル方言が5母音体系を留め，前舌円唇母音を持たない点が特異であるが，ガンダキ方言のそれは，いずれも中央方言的といえる。その他の音韻変化も，多少のずれがあっても，ほぼ中央方言的変化がみられる。響鳴音を除き，高調と低調の配分関係が無声音と有声音のそれと平行している点が問題だが，長野も Strahm and Maibaum も声調対立と有声性の対立の両者を認めている。音韻（音素）レベルでは声調対立を示差的素性として選ぶべきであろう。尚，ラダク方言や部分的には一部のアムド方言等

40）他の言語あるいは方言の影響で声調が発生したといった説明は，極めてあいまいであるが，ほかに説明のしようもないので一応このように記しておく。これまでのところ，他言語（方言）の影響でどのような過程を経て声調が発生するのか十分な説明与えることのできた例を知らない。Benedict のアウストロ・タイ語説（例えば，［BENEDICT 1985］参照）では，カダイ語族やミャオ・ヤオ語族の声調が漢語の声調の影響で生じたものとするが，その場合に問題になるのは，漢語と他の語族の声調体系があまりにも規則的に対応し過ぎている点であろうが，中央方言とスピティ方言の声調の場合は，逆に，前者の影響でどうして異なる声調体系が生じたのかを説明しなくてはならない。ただ，いずれの場合も声調発生の内在的原因が存在していたと考えることはできよう。

にもみられるが，ガンダキ方言の共通の特徴として，*skr-//*spr->hr-の規則的変化(例外は借用語と考えられる)が認められる。いずれにせよ，これらの諸方言は，確実に中央方言に分類できる[41)]。

カガテ方言を含むキロン方言群は，第二章(856頁参照)に述べたように古い特徴を留めている。カガテ方言は，高・低の声調の配分関係も，基本的には中央方言のそれと対応するものであるが，無声有気阻害音と無声側面音 /hl-/（恐らく一般に流音についていえるのであろうが，/rh-/ の資料が不十分である）に始まる語に高調と低調の対立がみられる点が他のどの中央方言とも異なっている[42)]。この声調分裂の原因ははっきりしないが，西 [1977] は，無声有気音の例で初頭音が *NC_0- に来源する語例では殆どの場合に低調になっていることからこの *N- がピッチを下げる効果を与えたのであろうとした。問題は，チベット文語の音韻体系では，*N-＋流音がない点である。しかし，文語の音韻体系が全くチベット祖語のそれと同じであったとはいえないので，この解釈が正しい可能性は今でもあると考えている。この方言では，*C_{01}vd->無声無気音（低調）で，*CC_{01}vd- の場合は，*C- が非鼻音であれば，無声無気音(低調)，鼻音(*N)であれば，有声音(低調)のように分裂している点も特異である。この方言にも前鼻音化子音と無声化鼻音はない。末尾子音は，/-p, -k, -m, -n,

41) ジレル方言の声調領域は，(音韻)語であり，声調体系は，ピッチの高・低と降型・非降型(pitch pattern)の対立の交叉体系として，四つの声調に分析されている。一方，ピッチの高・低は同時に母音の緊(tense)・緩(lax)(voice quality/voice register)あるいは清声(clear voice)・息声(breathy voice)[＝つぶやき声(murmured voice)]の対立に対応しているという。この「声立て」による対立は，ネパールのチベット語方言ではピッチの高・低の対立と相関している。ここでは，たとえ前者が主要な対立的素性であるとされていても，他方言との比較を考えて，後者のみを取り上げている。しかし，ピッチの高低や曲折が声調の主要な音韻素性であるとみなす声調発生論的観点からいえば，恐らく「声立て」による対立の方が前段階であり，それが主要な対立であるとされる方言は，「萌芽的」声調言語とでも呼ぶべき言語である。一般に，SIL の言語学者によるネパールのチベット語方言の声調は，K. L. Pike に従い，音韻レベルの単位である「音韻語」(phonological word) あるいは形態素を声調領域として記述されている。一方，註(35)で述べたような問題はあるが，中国の学者は，基本的には5分法の数字表記で音節毎にピッチとその曲折を記述し，短音節（語）の場合と多音節語の場合の差異は変調現象として処理している。この論文のように声調の具体的な調値は問題とせずに，高・低といった調類のみを取り上げ比較する場合はよいが，瞿の主張するような方言間のピッチとその曲折の更に詳細な比較が必要となれば，恐らく5分法あるいはその他の客観的比較が可能な記述方法による表記が望ましいことになろう。

42) この対立の語例は，[西　1977] を参照。尚，[Bielmeier　1982]の註(10)には，A. M. Hari の *Kagate Lexicon* が既に印刷中となっているが，今に至っても出版されたという情報は入っていない。

Hoehlig and Hari [1976] は，カガテ方言の声調領域を形態素として，その体系を「母音の緊・緩」の声域 (voice register) の対立と「基本的に降昇型 (moving)」と「基本的に平板型 (level)」のピッチの曲折 (contour) の対立の交叉体系として，その組み合わせから四つの対立する声調に分析している。Hoehlig and Hari は，はっきりと述べていないが，声域の緊・緩の対立は「ピッチの高・低」に対応している。しかし，Hoehlig and Hari は前者のみを対立的素性と考えている。

-ng, -l, -r/ に加えて，/-y, -w/ があるが，/-y, -w/ は二重母音の第二要素と解釈すれば，/-l/ を除いて，中央方言に標準的な種類と数の末尾子音といえる。母音は，5母音体系で，短・長の対立がある。長母音は，末尾子音 (*-g/*-d) の脱落か，二音節語の短縮によって生じたものである。この方言には，前舌円唇母音がないが，これは，この方言でも，中央方言に一般的な前舌化の変化

[*u, *o, *a]>[y, ø, ɛ]/_{*d, *s, *n, *l}（ラサ方言）

と平行した

(1)　[*u, *o, *a]>[*y, ø, *e]/_{*d, *s, *n}（*1は除外）

の変化が起こったが，更に，前舌円唇母音が

(2)　[*y, *ø]>[i, e]

の変化で非円唇化されたためであると解釈できる。要するに，一般的な中央方言の型にはまらない点はあっても現在では基本的に中央方言に分類できる方言であるといえよう。

ロミ方言は，カガテ方言よりもはっきりした中央方言的特徴を備えているといえる方言である。*C_{01}vd->無声有気音（低調），*CC_{01}vd->無声無気音（ただし，音声的には有声音である）（低調）となっており，*響鳴音に始まる音節に対応する音節の高調と低調の配分関係も中央方言に平行するものである。この方言にも前鼻音化子音と無声化鼻音がない。末尾子音として，Vesalainen-Vesalainen [1976] は，/-p, -t, -k, -m, -n, -ng, -r, -w/ を挙げているが，/-w/ はカガテ方言同様に二重母音の第二要素と解釈でき，この位置での /-t/ の実現形は [-?] である。母音は，8母音体系であり，カガテ方言の変化規則(1)と同じ変化で /y, ø/ が生じている。特異な点は，低母音に /a, ɑ/ の二母音がある点だが，前寄りの /a/ は主に二音節短縮 (*-aba>-a) により生じたものである。尚，ネパール語を始め，ネパールのチベット・ビルマ系の言語の母音体系は，低母音に前寄りの /a/ と中舌あるいは後寄りの /ɑ/ を持つものが多い。一種の地域的特性と考えることができよう。一方，幾つかの中央方言と異なる変化として，(1) *(*C*)Kj->TŠ-(*TŠ- と *(*C*)Pj- に来源する TŠ- と融合）や(2) *(*C*)ñ->n-の変化が挙げられる。幾つかの中央方言にみられない特徴があるものの，全体的にみて，この方言が中央方言に分類されることは確実であろう。

ネパールのシェルパ方言にも，*CC_{01}vd->有声音（低調）に対する，*C_{01}vd->無声無気音（低調）の部分的無声化と核子音が*響鳴音である初頭子音結合が単純化した代償として生じた高・低の声調対立が認められる。この方言にも前鼻音化子音と無声鼻音はない。ガンダキ方言と同様に，*skr-/*spr->rh-（高調）や *sgr-/*sbr->r-

(低調) の変化が認められる点や*流音を含む初頭子音結合の変化様式に特異な点があるが，初頭子音(結合)の変化様式はほぼ中央方言に比較できるものである[43]。末尾子音は，/-p, -t, -k, -m, -n, -ng, -r, -l/ であり，これは，/-t/ (動詞のみ)と辺縁部の多くの中央方言によく残っている /-l/ を除けば，中央方言に標準的な数と種類といえる。母音は，カガテ方言と同様に前舌円唇母音を持たない6母音体系で，低母音に前寄りの /a/ と後寄りの /ɑ/ がある。/a/ の来源も，ロミ方言と同じ短縮化 (*-aba>-a) か音節末の子音 (結合) (*-gs, *-d, *-s, *-ngs 等) の脱落によるものである。また，*非前舌母音は，*-d と *-n の前でカガテ方言と同じ変化で前舌非円唇母音 /i, e/ となっている。幾つか問題のある点があっても，全体的にみて，この方言を中央方言に入れておくことができよう。[西　1979] では，他の方言にみられないシェルパ方言の特徴として，(1)流音，特に，一部の l- と hl- の来源 (例：*lt->*hl- (高調)；*ld->l- (低調)；*zl->l- (高調)[44]) と(2) (*無声有気阻害音>) 無声有気阻害音を初頭音とする語の声調が高調と低調に分かれているという二つの点を指摘した。後者については，更に P. S. Ray [1965] のカム方言 (ホル・ザウク方言及びパタン方言) の資料にみられる無声有気阻害音に始まる語が降調と昇調の二声調に分かれている点に注目し，両者の間に対応関係がある可能性を指摘した[45]。この点については，Ray の声調分析が果たして信頼できるものか否か今後中国側の資料が公刊されるのを待って，再検討する必要があると考えている。いずれにせよ，シェルパ方言の無声有気音

43) Vesalainen and Vesalainen [1976] は，ロミ方言の語を声質 (voice quality) に基づいて緊・緩の二種類に分け，この緊・緩の対立は高・低の対立に通常対応しているが，インフォーマントにとって前者の対立の方が支配的であると主張している。しかし，彼等の述べているインフォーマントの反応の解釈が果たして正しいといえるかどうか疑問に思われる。勿論，その時の質問の仕方も問題であるが，言語学者でなければ，ピッチの差を必ずしも高・低で捉えていなかったりあるいはそのように表現できない場合が考えられるからである。ラサ方言の開音節語の場合も，高調では [-h]，低調では [-ɦ] が聞こえるが，これは彼等のいうロミ方言の緊・緩に対応する母音の調音と比較できる現象であるといえよう。ロミ方言の声調体系は，この緊・緩の対立が昇・非昇のピッチの曲折の対立と交叉する体系であるとしている。

44) H. Schoettelndreyer [1971] では，シェルパ方言の声調が形態素を声調領域とし，ピッチの高・低 (pitch level) の対立と基本的に昇・降 (/平) と解釈できるピッチの曲折 (pitch contour) の対立の交叉体系として，やはり四つの声調に分析している。ピッチの昇・降の対立に一定の強勢配置 (stress placement) の型がそれぞれ対応しているとする。一方，K. Gordon [1970] では，この強勢配置の対立とピッチの高・低の対立の交叉体系としてシェルパ語の声調体系を分析していたが，H. Schoettelndreyer は，ピッチの曲折の対立が主要な対立的素性であるとした。ここでは，他の面も含め，Gordon と B./H. Schoettelndreyer との音韻分析が食い違う場合には総て後者の分析に従っている。

45) 例：「へそ」*lte-ba>hlye (高降調)，「空腹」*ltogs-pa>hlwa (高降調)；「鍵」*lde-mig>limi (低平調)，「なめる」*ldag(-pa)>lA(k) (低昇調)(動詞の基本形の母音及び末尾子音は，[B. SCHOETTELNDREYER　1975b] 参照)；「召使」*zla-bo>lɑwa(高降調)，「月」*?-zla-ba>ula (高降調)。尚，Bielmeier [1982] によれば，キロン方言でも，「鍵」*lde-mig>limi であるが，その南東部のレンテ地方では dimi と発音されるという。[西　1977, 1979] が書かれた当時は *ld->l- のような変化のみられる方言は，シェルパ方言しか報告されていなかった。今後調査が進めば，辺境地域のチベット語方言でシェルパ方言と同じような流音の変化を経た方言が発見される可能性がある。

にみられる声調分裂は，他の中央方言にみられない現象である。尚，SIL の言語学者の声調記述は，K. L. Pike の記述方法に従っており，R. K. Sprigg の声調分析の影響も強く，5分法で音節単位で声調を表記した中国側の資料と異なり，声調の型のみを問題にする場合はともかく，方言間の声調の詳細な比較は困難である。瞿 [1985b] は，シェルパ方言の声調の調値体系と調値の一部が今もカム方言と同じか似ているというが，これまでのネパールのシェルパ方言資料では，直接比較することができないという問題がある。

4.2.2.　南部方言

南部方言も瞿 [1981a] の亜東（トモ）方言やブータンのゾンカ方言 [*Dzongkha* 1977; MAZAUDON 1982] やハゾン方言（註(33)参照）では，少なくとも高調と低調の音韻的対立が認められる。シッキム方言については，LSI や Walsh [1905] では声調に関して何の記述もない。初頭子音に無声化が認められれば，他の南部方言からの類推で高・低の声調対立のある蓋然性がかなり高いといえる。LSI に挙げられている一部の語例には，*$(C)C_{011}$vd-＞無声（有気）音がみられるが，無声化してない例も多く挙げられており，はっきりしない。一方，[WALSH 1905] のシッキム方言の語彙には無声化はみられない。しかし，初頭子音結合は中央方言同様に単純化しており，少なくとも初頭音が響鳴音である語については，無声・有声の対立もあり[46]，高調と低調の対立があってもおかしくない方言といえる。

瞿 [1981a] は，亜東（トモ）方言には，53（短調），51（長調），55（長）の高調と13（短），131（短），15（長）の低調の6声調があるとしている。瞿は，[瞿 1981a, 1983] に合わせて七つの亜東方言の語例を挙げているのが，その中の五つは*初頭核子音が有声閉鎖音の例であり，ラサ方言と同様に $_*CC_{011}$vd-＞無声無気音，*C_{011}vd-＞無声有気音となっており，恐らくこの変化規則は，*核子音が有声の破擦音や摩擦音の場合にも適用されるものと推定できる。ところが，同じ語が [WALSH 1905] のトモ（亜東）方言では，いずれも初頭音が有声音となっている。

	瞿	Walsh	文語形
「する」	phia^{13}	bja	*bjed（現在形）＜*bja-ed[47]

46) Walsh のトモ方言とシッキム方言における鼻音の無声化については，本文で後述する。鼻音と平行的に *sl-＞hl-（例「着く」*sleb-pa＞(トモ／シッキム) hlep(b)-po), *sr-＞hr-（例：「馬勒」*srab＞(トモ／シッキム)hrap) の変化ががみられる。これ以外にも，*gy-＞hy-（例：「召使」*g=yog-po(-y- が核子音)＞(トモ／シッキム) hyok(g)-ku/pu) のような変化も起こっている。尚，Walsh は，無声化響鳴音を mh, nh, ngh, lh, rh, yh のように表記しているが，ここでは一貫した表記にするために hm, hn... のように書き改めてある。

47) -ed については，[SHAFER 1951] と [西田 1957] 参照。

「鳥，鶏」	phia^{13}	bja-	*bja
「砂」	phie^{11}mo^{53}	bjem/bje-mo	*bje-ma
	(13-13→11-53の変調)		
「崖」	phia?^{13}	bjak(g)	*brag
「蛇」	piu^{15}	bu/du（上トモ方言）	*sbrul
		bi-u　（下トモ方言）	

瞿 [1981a] で，「ツァン地区の亜東等の土地の低調字 [上例では *b-] には全てはっきりした有声音の色彩がある」と述べている。これは，上例のような無声両唇閉鎖音 /p/ と /ph/ の場合には，低調音節に現れる異音 (allophone) が半有声音の [b̥] とかつぶやき (murmured) 音の [b̤] (あるいは母音も含めた音節全体がつぶやき声で調音される) といった意味であろう。こういった例からみて，次に述べるブータンの諸方言も含めて，一般に南部方言における *C_{01}vd- (有声阻害音) の無声(有気)化は比較的最近に起こった変化であり，まだこの変化が起こっていない方言や流動的である方言が存在する可能性も考えられる。上述の亜東（トモ）方言の場合の Walsh と瞿の記述する方言の差異は，方言が異なるせいかも知れないが，この80年程の間に起こった変化を表している可能性も否定できないであろう。

[*Dzongkha* 1977] にみられるゾンカ方言の発音の解説は，特定の方言の音韻体系についての説明というよりも，ブータンの共通語としての「ゾンカ語」をチベット文字で表記するために考案された正書法の文字の読み方の説明である。この正書法では，有声阻害音の系列が完全に有声性による対立を留どめている方言から部分的あるいは全体的に無声化し，有声・無声の対立が高・低のピッチの対立に置き換えられた方言も表記できるように考案されている。一方，響鳴音の場合は，既に高・低の声調対立が生じていることが明らかである。つまり，[*Dzongkha* 1977] の説明からブータンのチベット語方言は，総て音韻的声調（高対低）があると推定できるだけでなく，有声阻害音に始まる音節に関しては，Walsh と瞿の記述する二つの型の方言や中間型（例えば，*C_{01}vd->無声音であり，*CC_{01}vd->有声音であるような）方言の存在が推定できるのである。筆者の録音したハゾン方言は中間型の方言の一種であろう。

このように南部方言が声調言語であることは明らかであるが，中央方言やカム方言に対してこの方言区分を立てる論拠は何かを考えてみる必要がある。これまでに Uray [1954] や Shafer [1966] により指摘されている最もはっきりした音韻指標は，*Pr-/*Kr- の *-r->-j- の変化である。(*Tr->Ṭ- に変化する。) 既述のようにアムド

方言でも，*Kr- に関して *-r->-j- の変化が認められるから厳密にいえば，*Pr- の *-r->-j- の変化がこの方言に独特の変化であるといえよう[48]。

Walsh は，「チベット語」（＝中央方言）とトモ方言（彼の記録しているシッキム方言にも準用される）の文法，発音（音韻）と語彙の面に認められる相異点を何点かずつ指摘している。その中で興味深いのは，*{-CV} が *-ma/*-mo[49] である二音節の名詞と形容詞にみられる *語幹＋{CV} の短縮様式である。中央方言とカム方言の場合には，*{-CV} に該当する接尾辞は *-ma/*-mo 以外の多くの接尾辞を含むだけでなく，一般に*語幹が開音節の場合に限られる。また，*{-CV} が *-ma/*-mo の場合には，その短縮様式もアリ方言のように *m による先行母音の鼻母音化とその脱落による二重母音化の形を取る。トモ方言とシッキム方言の場合には，語幹が閉音節でも良く，*-VC_4＋ma/mo>-Vm のように短縮される。

例：	文語形	トモ／シッキム方言形
「娘」	*bu-mo	bum（トモ／シッキム）
「娯楽」	*rtsed-mo	tsem（下トモ）
		tsim（シッキム）
「肋骨」	*rtsib-ma	tsim（下トモ／シッキム）
「ほうき」	*phjag-ma	phjam（同上）
「蜜蜂」	*sbrang-ma	bjam（上トモ／シッキム）
		-bjom（下トモ）
「酸い」	*skjur-mo	kjum（上トモ／シッキム）
「女王」	*rgjal-mo	gjem（トモ／シッキム）

しかし，この短縮はまだ一般的な規則ではなく，短縮しない例の方がむしろ多いし，短縮形と非短縮形が併存する例も数多くみられる。この事実には幾つかの解釈が考えられるが，恐らく当時（1905年）進行しつつあった「改新的」傾向と考えることができよう。

西田［1983］は，［*Dzongkha* 1977］のゾンカ方言にみられる二音節語短縮を取

48）この *Pj-/*Pr->Pj- の -j- は，Walsh のトモ方言及びシッキム方言では，-j- であり，瞿の亜東方言では，二重母音の介音的性質の要素と解釈されている（上例参照）。ゾンカ方言（既述のように「方言」とよべるか否か今一つはっきりしない）では，Mazaudon [1982] によれば有声硬口蓋閉鎖音 [J] に変化している。ハゾン方言については，註(33)参照。

49）この方言では，*{-CV} の (1) *-a>-o と (2) *-o>-u の変化がみられる。但，(2) については，(1) の -o が更に -u に変化していると考えられる例もある。東部方言にも同じような変化が認められる。その外に語幹の母音についても調音点の上昇 (raising) と考えられる例が認められるが，規則化できるほど体系的なこの方言の記述がない。尚，この *{-po}/*{-mo} の *-o>-u の変化はカガテ方言及びその以東のチベット語方言に一般に観察される変化でもある。

り上げ，次の三つの型に分類し，変化規則を立てている。（規則の表わし方は少し変えてある。）

1. a. *-VC$_{41}$+pa/po>-Vp (*C$_{41}$ から *s を除外; *{-pa}: *pa～*ba, *{-po}: *po～*bo)
   b. *-VC$_{42}$/s+pa/po>-V: p
2. a. *-VC$_{41}$+ma/mo>-Vm (*C$_{41}$ から *s を除外)
   b. *-VC$_{42}$/s+ma/mo>-V: m
3. a. *-V+ba>-Vu
   b. *-Vr/l+ba>-V: u

この三つの短縮型の中で第三型は，シッキム方言やトモ方言にもみられるが，特に南部方言に特徴的な短縮型とはいえないのでここでは考慮しない。第二型は，上述のようにシッキム方言とトモ方言にもみられる短縮型であるが，そこでは母音の短・長の対立が認められていない。これは，実際にその対立がないので表記されていないのかあるいは聞き取りや表記が粗雑だったためかどちらともいえないが，恐らく後者であろうと思われる。問題は，第一型であるが，[Walsh 1905] には，この型の例が二例（「(茶) 椀」*phor-pa>(下トモ) phop;「黄色い」*ser-po>(シッキム) sep～se-pu) だけ挙げてある。Walsh の語彙表は載せられた語数が非常に限られたものであるから，実際には，この短縮型の例が少なくとも下トモ方言とシッキム方言にはまだあったかも知れない。この短縮形は現在のブータン方言では一般的な型のように思われる。ハゾン方言にも第一型の短縮形がみられる。

例：「黒い」　*gnag-po>[nap] (高調)
　　「手」　*lag-pa>[lap] (低調)
　　「白い」　*dkar-po>[ka:p] (高調)
　　「新しい」　*gsar-ba>[sa:p] (高調)

一方，[Walsh 1905] によれば，トモ方言(とシッキム方言)の第一型の二音節語では，語幹の末尾子音が軟口蓋閉鎖音の時に *-Vg+pa/po>*-Vg+po/pu>-Vkko/u>-Vko/u のような順行同化 (progressive assimilation) 現象や子音の脱落がみられるという。語彙表をみるとこの変化はトモ方言にもシッキム方言にも共通して起こっている変化である。例:「手」*lag-pa>lak-ko～la-ko;「一人で」*gtɕig-po>tɕi-ku。語幹の *末尾子音が軟口蓋閉鎖音以外の場合，両唇音は同化と関係ないので除くとして，歯閉鎖音の場合を語彙表で調べたが，恐らく *-d の脱落が先に起こっためかこのような同化現象はみられない。このことは閉鎖音以外の末尾子音についても同様であ

る。従って，この同化現象は，語幹の*末尾子音が軟口蓋閉鎖音である時のみほぼ規則的に認められるものであろう。一方，語彙表では，その結果生じる重子音の単音化は決して一般的な規則とはいえない。いずれにせよ，ゾンカ方言の第一型の短縮は，Walsh の資料による限り，トモ方言とシッキム方言では例外的にしか認められないものであり，更に，重要な点は，トモ方言とシッキム方言型の同化がゾンカ方言の第一の短縮型とが互いに相いれない変化様式で，前者から再び後者の短縮形には変わりえないことである。この同化現象（と語中の重子音の脱落）や二音節語の短縮は，比較的最近に起こった変化ではないかと思われるが，この変化様式の差異はおそらく西部方言（トモ方言とシッキム方言）と東部方言（ブータン方言）を区別する論拠の一つたり得るであろう。

南部方言にみられるその他の特徴を二つばかり最後に指摘しておこう。その一つは，[Walsh 1905] と [*Dzongkha* 1977] にみられる無声化鼻音あるいは無声化鼻音>h- の変化である。ゾンカ方言の方は，一般に *sC_{021}->無声化鼻音～h- となっている。例：「青い」*sngon-po>hom;「枕」*sngas(?)>hã:;「心臓」*dong-sñing>dhõ: hẽ:;「鼻」*sna-ba>hnapa～hapa。一方，トモ方言とシッキム方言でも数多くの例が挙げてあるが，一般に無声化鼻音に留どまっている例が多い。その上，前接子音が *s- 以外の *m-/*r- である例もある。例：「嫁」*mna-mo>(トモ) hna-ma, (シッキム) hna-mo;「霧」*rmugs-pa>(上トモ) hmung-ko, (下トモ) hung-po, (シッキム) hung-po。これは，実際には，文語形と異なり，*s- を持った古形に来源する可能性を勿論否定できないが，*m-/*r- であった可能性も否定できない。もし後者だとすれば，カム方言の *鼻音の無声化現象よりも更に一般的な変化であることになる。

南部方言の第二の特徴は，*db(j)- の核子音 *b- を留保している点である。例：(1) (ゾンカ方言)「中心」*dbus>bu:～y: (高調);「夏」*dbjar>bja:, (2) (西部方言)「中心」*dbus>(トモ) bu(-mo), (シッキム) bu(-mo);「夏」*dbjar>(トモ) bja, (シッキム) bja。尚，ゾンカ方言では，敬語の場合に，「頭」*dbu>u: (高調) や「髪」*dbu-skra>u:ta (高調) (cf.「髪」*skra>ca) のような変化がみられるが，敬語形は総て中央方言，特に，ラサ方言からの借用語と考えられる。同じように *db- の *b- を接近音や摩擦音化せずに残している方言は，西部古方言のバルティ方言とプリク方言及び中国雲南省のカム方言である中甸方言しか今のところ報告されていない。

以上南部方言についてみて来たところから明らかになったことは，従来この方言を

中央方言の下位方言とする傾向があったが，幾つかの点ではむしろカム方言的であり，現在では独立した方言区分として取り扱うべきであるということと歴史的にみても中国国内の諸方言と分岐した年代は普通考えられていたよりも昔に遡るのではないかということである。また，恐らくこの100年程の間に中央方言の影響を強く受け，大きく変容しつつあるようにみえる。いずれにせよ，これまで考えられたよりも，この方言（特に，ガロン諸方言）の研究はチベット語史の研究に貢献するところがあるのではないかと思われる。

5. 結　　語

以上大変大雑把であるが，チベット語方言の主要区分と下位区分の一部，現在知られているチベット語方言の分布と主要分類，更に，幾つかの分類基準（指標）等を包括的に紹介し，論じてみた。第一節で述べたようにチベット語方言資料の空白地帯と呼べる地域が中国との辺境地域やブータンにあり，これらの地域の方言については，憶測も混えて論ぜざるを得なかった。また，西部古方言については，ここでは殆ど触れずに済ましてしまったが，[R.A. Miller 1956a], [Shafer 1966] や [西田 1970] 等に既にある程度まとまった研究があるのでそれを参照して貰いたい。最後に，第二章に挙げたチベット語方言の主要区分だけをここでまとめて示すと次のようになる。

1. 西部古方言：例，バルティ方言，プリク方言，ラダク方言
2. 西部改新的方言：例，ラフール方言，スピティ方言，ニャム方言，ジャド方言，ガルワル方言
3. 中央方言：例，ガリ方言（カル方言等），ユー方言（ラサ方言等），ツァン方言（シガツェ方言等），キロン方言（中央古方言），ガンダキ方言（ロ方言等），シェルパ方言，ロミ方言
4. 南部方言：例，西部方言（シッキム方言，亜東方言），ブータン方言（ゾンカ方言，ガロン諸方言）
5. カム方言：例，西蔵自治区の諸方言（ケルツェ方言，黒河方言等），四川省の諸方言（チャムド方言；チャクテン方言；チョネ方言；トゥクチュ方言），青海省の諸方言（ケグムド方言等），雲南省の諸方言（中甸方言等）
6. アムド方言：例，遊牧地区の諸方言（アリク方言等），農業地区の諸方言（化隆方言等），半農半牧地区の諸方言（夏河方言等），四川省の諸方言（タウ方言，

タッコ方言)。

この方言区分では，中国国外の方言分類に関して筆者の個人的見解に基づく部分が多いし，この主要区分自体今後の研究の進展と共に変更される可能性もある。また，この方言区分相互の関係については，基本的にはチベット語の歴史的（通時的）研究の問題であり，ここで更に論じるつもりはない。

第三章で初頭子音結合の単純化や核子音の音韻素性等と関連した高・低の対立的声調の発生をかなりのスペースを割いて論じたのは，現代チベット語方言の主要区分間の関係を考える際にこの指標を抜きに論じることができないという立場をはっきりさせたかったからである。勿論，西田や中国のチベット言語学者はいずれも同じ立場に立つものであったし，今では既にその先を行っているといえる。しかし，中国国外の方言研究では，資料的制約もあり，この指標についてさえ十分に検討されていたとはいえない。中国国内の方言研究は，今後声調指標についても 瞿 [1985b] の提案するようなもっと密度の高い研究を目指すようになるであろう。中国国外方言の同じように精密な研究が可能になるためには，できるだけ多くの方言のより細かい調査研究が求められることになろう。欧米の諸言語や日本語の方言研究等の水準からみれば，チベット語方言の研究はまだ予備的段階にすぎない。しかし，それだからこそ今後多くの研究者の現れることが期待される分野なのである。

---

27) キロン方言と西部方言を結び付ける諸特徴として，次節で触れる初頭子音結合（Pr-/Pj-）の「留保」以外に(1)現在時を表すには，ラサ方言型の動詞句構造と並んで，[動詞語幹＋gen（助動詞)] もあること，(2)未来形を表す動詞句構造の一つである [動詞語幹＋čè nụ]（屢々「強制」モード）に現れる -čè，(3)文語形の smra（現在），smras（過去），smros（命令）「言う，話す」に対応する mā, mē:, mõ: があること，(4)一人称複数代名詞に排除形（exclusive）ɲi，と包括形(inclusive)ǫ～ǫrang の両形があること等を挙げている。Bielmeier は，このいずれもが Uray の西部古方言か西部過渡的方言にみられる特徴であるとしている。Bielmeier は，(1)の現在形が [Jäschke 1929] に西部チベット語の現在形の例として挙げられている mthong mkhan jin を思い出させるという。この mkhan について，Francke は，[Jäschke 1929] の *Addenda* で「分詞形の非常にはっきりした一形成法は語尾 mkhan を伴うものであるが，それは Jäschke のいうように，西部だけにみられるものではなく，『ミラレーパ』(Milaraspa) や他の文献にもみられるものである」と述べているが，Jäschke の例のような動詞句構造の現在形については何も触れていない。このような現在形は現在のどの西部方言にも報告されていないようである。分詞形としての [動詞語幹＋khan] についても，Bailey [1920] のプリク方言と LSI のスピティ方言で例が挙げられているだけである。いずれにせよ，少なくとも筆者のいう西部古方言では，*mkhan>gen の変化は起っていない。一方，Roerich [1933] によれば，ラフール方言の下位方言であるコクサル方言には，[動詞語幹＋助動詞（jod/rug)] と並んで，単数主語の場合 [動詞語幹＋gen/γ än] 型の現在形もあり，これは恐らく古文語形の *[動詞語幹＋in]>*[動詞語幹＋ʰin]>[動詞語幹＋γän/gen] のように発達したのであろうとしている。この説明は納得がいかない。東ネパールのロミ方言 [Vesalainen and Vesalainen 1980] でも非過去形（現在時と未来時）の動詞句構造はキロン方言やコクサル方言とよく似た [動詞語幹＋ken]/[動詞語幹＋ken pet] 型であるが，西田 [1983] は，前者がラサ方言の [動詞語幹＋ki jin] に相当し，ロミ方言の {-ken}は，-ki＋jin>-ken のような二音節短縮により生じたものであろうとしている。これには平行する例もあり十分説得力があるが，更に助動詞の pet が付けられる

点が問題となろう。キロン方言の場合も同様に Bielmeier の挙げている例では，更に助動詞 jin が付く例もあるので西田の説明を適用できるか否か問題である。註(26)のヌプリ（ラルケ）方言の語彙を採録した際にネパール語で質問したが，動詞形は全部ネパール語の動詞の不定形 (-nu) [口語では，命令形にも用いる] で尋ねた。これに対してチベット語の動詞形は，予期した文語形の不定形に対応するものではなく [-gẽ:]～[-γ ẽ:] に終わる形であった。ヌプリ方言のこの語尾の意味機能ははっきりしないまでも，キロン方言だけでなく，ネパールの他のチベット語方言にも同じような語尾が存在する可能性がある。また，西田の指摘しているような二音節短縮によるものである可能性も大きいが，全部の場合にいえるかどうか問題である。しかし，キロン方言の {-gen} が，Bielmeier の推測するように，文語形の *mkhan と比定できないことや西部方言と結び付げる根拠となり得ないことは明らかである。(2)の -čè について Bielmeier は，「…それはチベット文語には存在しない。しかし，それは [Uray の] 西部古方言：バルティ方言，不定詞マーカーの -čas としてプリク方言，そして同じ機能で -čas, -čes, -če の形式でラダク方言に現れる。」と述べ，「この語源的にはっきりしないマーカーは西部チベット語諸方言に特有なのか，チベット文語以前に遡れるのかはまだ決定できない」と述べている。西部古方言のこの接尾辞は，西部改新的方言であるラフール方言 (-čē [Roerich 1933]), スピティ方言 (-che [LSI]), ニャム方言 (-ja [LSI]), ジャド方言 (-cha～-ja～-sha～-zha [LSI]), ガルワル方言 (-ja [LSI]) 等の総ての方言で不定詞マーカーあるいは動名詞 (verbal noun) 語尾として挙げられている。ネパール以東のチベット語方言にこの接尾辞は認められず，中国国内のチベット語方言にも報告されていない。しかし，所謂ヒマラヤ系諸言語であるネパールのカイケ (Kaike) 語 (-chhe), チェパン語 (-sa) やスンワル (Sunwar) 語 (-ca) にも類似した機能と形式をもった接尾辞が認められる。従って，この形式に関しては，狭義のチベット語よりも広い観点から検討してみる必要があるし，Bielmeier の述べているように「留保的」要素である可能性がある。(3)「留保」の例である。(4)についても，確かに西部方言にも排除形と包括形の区別は有るが，語形式は全く異なっている。しかもこの区別は，Bielmeier も指摘するように，ヒマラヤ系諸言語であるインドの北西部辺境地域のカナウル語，ティナン (Tinan) 語，マンチャト (Manchati＝Paṭṭani) 語やネパールのカイケ語やカリン (Khaling) 語等にも認められるものである。特に，この区別は，キロン方言群に境を接するタマン諸語にもあり，少なくともその排除形の音韻形式はキロン方言の排除形と比較できるものである点は今後検討の余地があろう。従って，一人称複数代名詞についても単純に西部方言との関連を示唆するものとは結論できないし，現在のところ「留保的」要素である可能性も否定できない。

補1) (cf. p. 845)　1970年代までのチベット語方言の分類については，[西田　1970] 参照。

補2) (cf. p. 849)　但，西部古方言地域では，一般にチベット仏教の一中心地であると考えられているラダク地方のラダク方言の話者でも，仏教徒はわずかにその半数程（約52%）であり (B.F. Grimes (ed.) [1984])，残りのラダク方言及び他のチベット語方言の話者はいずれも回教徒である。チベット語を話すこれら回教徒のチベットの宗教や文化に対する態度は仏教徒と同じであると思われない。しかし，言語に関する限り，現在でもやはり中央チベット方言やラサ方言に対する他律的関係は成立するのではないかと考えている。いずれにせよ，こういった点について社会言語学的観点から調査してみるのも面白いのではないかと思う。

補3) (cf. p. 858)　Bailey [1915] の記述によれば，プリク方言の話されている地域は，南北はカルマン (Kharmang) からカルギルとスル (Suru) を経て，ペンセ峠までの約百二十五哩，東西はドラス (Dras) からカルギルを経て，マウルバ・チャンバ (Maulba Chamba) までの約六十五哩に亘る地域とされており，ジャンム・カシミールの停戦ラインを越えて，パキスタン側でも多少話されているものと思われるが，最近の調査報告がないので確かめることができない。しかし Bailey の記述によってもプリク方言地域はほぼ全体が停戦ラインのインド側にあるといえる。

補4) (cf. p. 861)　ブータン国内におけるゾンカ方言の標準語化がどの程度進展しているか不明であるが，現状ではともかく，将来この方言がブータンの標準語として確立されれば，歴史的には，ゾンカ方言を含むブータンの諸方言は勿論チベット語方言といえるが，共時的には，ブータン語（ゾンカ方言）とその下位方言としなくてはならないであろう。

補5) (cf. p. 865)　この場合，中央方言に一般的な改新的変化 (*(C)Pr->Ṭ-/ṬṢ- と (C)Pj->

TŠ-) のキロン方言における語彙的拡散 (lexical diffusion) の例ではないかと考えるかも知れない。しかし，中央方言における上記の変化は *(C)Pr- が直接反舌閉鎖音あるいは反舌破擦音に変化したとものとは考えられない。中間段階として，*Pr の間に挿入的 (epenthetic)T が生じ，その結果生じた *Tr- が Ṭ-/ṬṢ- に変化したかあるいは，そういった変化が考えられるか否かはともかく，*-r の直接の硬音化 (fortition) によって Ṭ-/ṬṢ- が生じ，それに前後して *P の軟音化 (lenition) を経た脱落が起こったとすべきであろう。(勿論，*P の同化とも考えられるが，次の *(C)Pj->TŠ- の変化の場合を考えると，この可能性は小さいように思う。) これとは必ずしも平行的に変化したとはいえないが，中央方言の *(C)Pj->TŠ の変化の場合も決して直接破擦音化したのではなく，本文で後述する南部方言にみられるように (註33及び [*Dzongkha* 1977] と [MAZAUDON 1982] のゾンカ方言参照)，やはり子音挿入か硬音化と *P の軟音化による脱落といった中間段階を認めるべきであろう。後者の場合は，幸いに南部方言が様々な中間段階の変化を例証してくれているが，前者の場合は，中間段階を例証する方言がない。従って，推測に過ぎないが，この場合にもこういった中間段階を仮定するのが自然であろう。従って，キロン方言のこれらの例は，進行中の音韻変化を示すものとは考えられないのである。尚，もしキロン方言で文語形の *(C)Pr- と *(C)Pj- に対応する初頭子音結合を持つ全部の語彙がそれぞれ Ṭ- と TŠ- に置き換えられたとすれば結果的には，中央方言と同じ音韻変化を遂げたことになる。従って，この方言の場合は，借用による置き換えの過程でたまたま記述されたので音韻変化の拡散の例ではないと分かるが，もしそうでなく，置き換えが終わった後の段階で記述されていれば，他の中央方言と同じ音韻変化がこの方言でも起こったとされることになろう。それ故，将来この方言の Pr- と Pj- を初頭子音とする語の全部か大多数が予想通りにそれぞれ対応する Ṭ- と TŠ- を初頭子音とする語で置き換えられるようなことがあれば，いわば「偽装的」音韻変化とでも呼ぶべき極めて興味深い例を提供することになろう。

文　　献

ここでは，主として1960年代以降の現代チベット語研究に関する著書，論文と資料を挙げてある。それ以前のものや直接チベット語に関するものでなくても，本文と註の中で触れたものや関連のあるものの一部も挙げてある。尚，網羅的な文献目録ではないので，[HALE 1982] や [冬青 1984] 等も参照していただきたい。

ARIS, Michael

1980 *Bhutan: the early history of a Himalayan kingdom.* Vikas Publishing House Pvt Ltd.

BAILEY, Thomas Graham

1915 *Linguistic Studies from the Himalayas, being studies in the grammar of twenty-six Himalayan dialects.* Royal Asiatic Society Monograph 18, The Royal Asiatic Society. (reprinted 1975 by Asian Publication Service.)

BAUMAN, James John

1975 *Pronouns and Pronominal Morphology in Tibeto-Burman.* Ph. D. dissertation, University of California, Berkeley.

BENEDICT, Paul K.

1972a *Sino-Tibetan: a Conspectus.* Princeton-Cambridge Studies in Chinese Linguistics II, Cambridge University Press.

1972b The Sino-Tibetan Tonal System. In J. Thomas & L. Bernot (eds), *Langues et techniques, nature et société,* in honor of André G. Haudricourt, Klincksieck, Vol. I, pp. 25–33.

1973 Tibeto-Burman Tones with a Note on Teleo-Reconstruction. *Acta Orientalia* (København) 35: 127–138.

1985 『突破口：東南アジアの言語から日本語へ——日の神の民の起源』西義郎訳 (CAAAL 単刊シリーズ 10)『アジア・アフリカ語の計数研究』第25号。

BIELMEIER, Roland

1981–82 Preliminary Report on the Research Project "Tibeto-Burmese Oral Narrative Tradition". *Journal of the Nepal Research Centre* 5/6: 193–198.

1982 Problems of Tibetan Dialectology and Language History with Special Reference to the *sKyid-gron* Dialect. *Zentralasiatische Studien des Seminars für Sprach- und Kulturwissenschaft Zentralasiens der Universität Bonn* 16: 405–425.

1985a *Das Märchen vom Prinzen Čobzaṅ*: eine tibetische Erzählung aus Baltistan; Text, Übersetzung, Grammatik und westtibetisch vergleichendes Glossar. VGH-Wissenschaftsverlag.

1985b A Survey of the Development of Western and Southwestern Tibetan Dialects. In B.N. Aziz and M. Kapstein (eds.), *Soundings in Tibetan Civilization*, Manohar, pp. 3–19.

1986 Zur Stellung des Dialektes von Mustang in Nepal. In B. Kölver and S. Lienhard (eds.), *Formen kulturellen Wadels und andere Beiträge zur Erforschung des Himalāya: Colloquium des Schwerpunktes Nepal*. Heidelberg 1. -4. Februar 1984, Nepalica 2, pp. 433–450.

BISTA, Dor Bahadur

1967 *People of Nepal*. Ratna Pustak Bhandar.

CHANG, Betty Shefts

1971 The Tibetan Causative: Phonology. *Bulletin of the Institute of History and Philology* (Academia Sinica) 42(4): 623–765.

CHANG, Betty Shefts & Kun CHANG

1967 Spoken Tibetan Morphophonemics:p. *Language* 43: 512–525.

1980 Ergativity in Spoken Tibetan. *BIHP* 51.

1981 Perfective and Imperfective in Spoken Tibetan. *BIHP* 52(2).

CHANG, Kun & Betty SHEFTS

1964 *A Manual of Spoken Tibetan (Lhasa Dialect)*. University of Washington Press.

1965 A Morphophonemic Problem in the Spoken Tibetan of Lhasa. *Journal of the American Oriental Society* 85: 34–39.

CHANG, Kun & Betty Shefts CHANG

1968 Vowel Harmony in Spoken Lhasa Tibetan. *Project on Linguistic Analysis* (series 2) 7: 1–81.

1978–81 *Spoken Tibetan Texts*. 4 Vols. Special Publications, No. 74, Institute of History and Philology, Academia Sinica.

車　謙

1981 「従 gcig 談起——関于古蔵語声母中清塞音，塞擦音送気和不送問題」『民族語文』(2): 36–39。

1984 「古蔵語里有複元音嗎」『中央民族学院学報』(3): 102–105。

COBLIN, W. S.

1976 Notes on Tibetan Verb Morphology. *T'oung Pao* 62: 45–70.

DAS GUPTA, K.

1968 *An Introduction to Central Monpa*. North-East Frontier Agency.

DELANCEY, Scott Cameron

1980 *Deictic Categories in the Tibeto-Burman Verb*. Ph. D. dissertation, Indiana University.

1981 Evidentality and Volitionality in Tibetan. Paper presented to Evidentials Symposium, University of California, Berkeley. (To appear in W. Chafe and J. Nichols (eds.), *Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology*.)

1982 Lhasa Tibetan: A Case Study in Ergative Typology. *Journal of Linguistic Research* (Indiana University Linguistic Circle) 2(1): 21–30.

1984 Transitivity and Ergative Case in Lhasa Tibetan. Proceedings of the 10th Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society.

冬　青

1984 「中国少数民族語文論著目録 (1981–1983)」『民族語文』(5): 70–80; (続) 6: 69–80。

DURR, Jacques A.
1950 *Morphologie du verbe tibétain.* Winter.
Dzongkha
1977 *An Introduction to Dzongkha.* New Delhi.
FRANCKE, August Hermann
1901 *Sketch of Ladakhi Grammar.* Extra No. 2 to the Journal of the Asiatic Society of Bengal Vol. 70, Part I, The Asiatic Society. (reprinted 1979 as *Ladakhi and Tibetan Grammar* by Seema Publications.)
1903 Kleine Beiträge zur Phonetik und Grammatik des Tibetischen. *Zeitschrift für Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 57: 285–298.
1909 Tabellen der Pronomina und Verba in den drei Sprachen Lahoul's: Bunan, Manchad und Tinan. *ZDMG* 63: 65–97.
FÜRER-HAIMENDORF, Christoph von
1975 *Himalayan Traders.* John Murray.
格　勒
1985 「略論蔵語輔音韻尾的幾個問題」『民族語文』(1): 33–41。
格桑居冕 (sKal-bzang hGjur-Med)
1964 「蔵語方言概要」中央民族学院（教材)。
1982 「蔵語動詞的使動範疇」『民族語文』(5): 27–39。
1985 「蔵語巴塘話的語音分析」『民族語文』(2): 16–27。
GOLDSTEIN, Melvyn C.
1973 *Modern Literary Tibetan.* Occasional Papers of the Wolfenden Society on Tibeto-Burman Linguistics, Vol. V, Center for Asian Studies, University of Illinois.
GOLDSTEIN, Melvyn C. (ed.)
1975 *Tibetan-English Dictionary of Modern Tibetan.* Bibliotheca Himalayica, Series II, Vol. 9, Ratna Pustak Bhandar.
1984 *English-Tibetan Dictionary of Modern Tibetan.* University of California Press.
GOLDSTEIN, Melvyn C. & Nawang NORNANG
1970 *Modern Spoken Tibetan: Lhasa Dialect.* University of Washington Press. (reprinted 1978 as Bibliotheca Himalayica, Series II, Vol. 14, Ratna Pustak Bhandar.)
GORDON, Kent
1969 *Sherpa Phonemic Summary.* (Tibeto-Burman Phonemic Summaries-1) SIL (Kathmandu).
1970 Sherpa Tone and Higher Levels. In A. Hale and K. L. Pike (eds.), *Tone Systems of Tibeto-Burman Languages of Nepal*, University of Illinois, Part 1, pp. 186–206.
GORDON, Kent & Sandra GORDON
1970 Sherpa Texts. In A. Hale and K. L. Pike (eds.), *Tone Systems of Tibeto-Burman Languages of Nepal*, University of Illinois, Part 4, pp. 293–305.
GORDON, Kent & Burkhard SCHOETTELNDREYER
1970 Sherpa Segmental Synopsis. In A. Hale and K. L. Pike (eds.), *Tone Systems of Tibeto-Burman Languages of Nepal*, University of Illinois, Part 1, pp. 345–367.
GRIERSON, George Abraham (ed.)
1909 *Linguistic Survey of India*, Vol. III (Tibeto-Burman Family), Part I. Superintendent of Government Printing. (reprinted 1967 by Motilal Banarsidass.) [第三巻（全三部）は，Sten Konow により編纂されたものである。]
GRIMES, Barbara F. (ed.)
1984 *Languages of the World: Ethnologue.* Wycliffe Bible Translators.
GRIMES, Joseph E. (ed.)
1978 *Papers on Discourse.* SIL Publications in Linguistics and related Fields No. 51, University of Oklahoma.
HALE, Austin
1982 *Research on Tibeto-Burman Languages.* Trends in Linguistics, State-of-the-Art Report 14. Mouton Publishers.

HALE, Austin (ed.)
1973 *Clause, Sentence and Discourse Patterns in Selected Languages of Nepal.* 4 parts. University of Oklahoma.

HALE, Austin & Kenneth L. PIKE (eds.)
1970 *Tone Systems of Tibeto-Burman Languages of Nepal.* 4 parts. Occasional Papers of the Wolfenden Society on Tibeto-Burman Linguistics Vol. III, Department of Linguistics, University of Illinois.

HARI, Anna Maria
1977 *An Investigation of the Tones of Lhasa Tibetan.* Ph. D. dissertation, University of Edinburgh. (Also published 1979 as Language Data Monograph, Asian-Pacific Series, No. 13 by SIL.)

HERRMANN. S.
1984 *Tibetische Erzählgut aus Diṅ-ri*; Texte, Übersetzungen, grammatischer Abriss und Glossar. VGH-Wissenschaftsverlag.

HERMANNS, Matthias
1952 Tibetische Dialekte von A mdo. *Anthropos* 47: 193–202.

胡　坦
1980 「蔵語（拉薩話）声調研究」『民族語文』(1): 22–36。
1984a 「拉薩蔵語中幾種動詞句的分析」『民族語文』(1): 1–16。
1984b 「蔵語的語素変異和語音変遷」『民族語文』(3): 4–12。
1985 「論蔵語比較句」『民族語文』(5): 1–11。

胡坦・瞿靄堂・林聯合
1982 「蔵語（拉薩話）声調研究」『語言研究』1: 18–38。

HODGSON, Brian H.
1853 Sifan and Horsok Vocabularies,... *Journal of the Asiatic Society of Bengal* 22: 117–151. (reprinted 1874 in *Essays on the Languages, Literature, and Religion of Nepal and Tibet* by Trübner; also 1971 as Bibliotheca Himalayica, series II, Vol. 7 by Manjusuri Publishing House.)
1856 Aborigines of the Nilgiris with remarks on their affinities. *JASB* 25: 26–76. (reprinted 1880 in *Miscellaneous Essays relating to Indian Subjects*, Vol. 2 by Trübner.)

HOEHLIG, Monika
1978 Speaker Orientation in Syuba (Kagate). In J. Grimes, *Papers on Discourse*, SIL Publications in Linguistics and related Fields No. 51 University of Oklahoma, pp. 19–24.

HOEHLIG, Monika & Maria HARI
1976 *Kagate Phonemic Summary.* SIL (Kathmandu).

星実千代
1973 「ラサ方言の語頭の破裂音・破擦音について」『日本西蔵学会会報』19: 10–8。

HOSHI, Michiyo
1978 *Zanskar Vocabulary: a Tibetan dialect spoken in Kashmir.* Monumenta Serindica, No. 5. [単刊]
1979–85 *Texts of Tibetan Folktales.* 5 vols. Studia Tibetica, Nos. 5–10, edited by the Seminar on Tibet, The Toyo Bunko.

華　侃
1983 「安多蔵語声母的幾種特殊変化」『民族語文』(3): 43–46。
1985 「安多蔵語（夏河話）中的同音詞」『民族語文』(4): 24–29。

黄布凡
1981 「古蔵語動詞的形態」『民族語文』(3): 1–13。
1983 「十二，十三世紀蔵語（衛蔵）声母探討」『民族語文』(3): 33–42。

HUNTER, William W.
1868 *A Comparative Dictionary of the Languages of India and High Asia.* Trübner. (reprinted 1976 by Oriental Publishers & Distributors.)

JACKSON, T.-S. Suen[=Sun]
1981 Aspects of the Historical Phonology of Amdo Ndzorge Tibetan. 第十四回国際漢蔵学会発表論文。
JACKSON T.-S. Sun
1986 *Aspects of the Phonology of Amdo Tibetatn: Ndzorge Sæme xʁra Dialect.* Monumenta Serindica No. 16. [単刊]
JÄSCHKE, Heinrich August
1867 Über die Phonetik der Tibetischen Sprache. *Monatsberichte* der Königlich Perussischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, pp. 148–182.
1881 *A Tibetan-English Dictionary.* London: Routledge & Kegan Paul. (reprinted 1934, etc.)
1929³ *Tibetan Grammar*(, with an addenda by A. H. Francke assisted by W. Simon). Berlin/Leipzig: Walter de Gruyter.
金　鵬
1958 『蔵語拉薩日喀則昌都話的比較研究』(語言学専刊) 科学出版社。
1979 「論蔵語拉薩口語動詞的特点与語法結構的関係」『民族語文』(3): 173–181。
1983a 「蔵語動詞表三時的屈折形態簡化的両種途経」『語言研究』(1): 169–178。
1983b 「蔵語拉薩話動詞的式及其表達方法」『民族語文』(1): 9–18。
金　鵬等
1957–58 「嘉戎語梭磨話的語音和形態」『語言研究』2: 123–151, 3: 71–108。
金鵬 (編)
1983 『蔵語簡誌』(中国少数民族語言簡誌叢書) 民族出版社。
KITAMURA, Hajime
1977 *Asian & African Grammatical Manual, No. 12z: Tibetan* [*Lhasa Dialect*]. Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.
KITAMURA, Hajime (ed.)
1977 *Glo Skad*(: a Material of a Tibetan Dialect in the Nepal Himalayas). Monumenta Serindica, No. 3. [単刊]
北村甫・渡辺照宏
1955 「チベット語」市河三喜, 服部四郎共編『世界言語概説』(下巻) 研究社, pp. 951–999。
KJELLIN, Olle
1975a How to explain the 'Tones' in Tibetan. *Computational Analysis of Asian & African Languages* 2: 37–52.
1976 *Observations on Consonant Types and 'Tone' in Tibetan.* Ph. D. dissertation, University of Tokyo.
KOSHAL, Sanyukta
1976 *Ladakhi Phonetic Reader.* Central Institute of Indian Languages.
1979 *Ladakhi Grammar.* Motilal Banarsidass.
KRETSCHMAR, M.
1986 *Tibetisches Erzählgut westtibetischer Viehzüchter*; Texte, Übersetzungen, grammatischer Abriss und Glossar. VGH-Wissenschaftsverlag.
LI Fang-kuei
1933 Certain Phonetic Influences of the Tibetan Prefixes upon the Root Initials. *BIHP* 4(2): 135–157.
羅秉芬・安世興
1981 「從談歴史上蔵文正字法的修訂」『民族語文』(2): 27–35。
MAIBAUM, Anita
1978 Participants in Jirel Narrative. In J. Grimes (ed.), *Papers on Discourse,* SIL Publications in Linguistics and related Fields No. 51, Uniiversity of Oklahoma, pp. 203–207.
MAIBAUM, Anita & Esther STRAHM
1973a Jirel Texts. In A. Hale (ed.), *Clause, Sentence and Discourse Patterns in Selected Languages of Nepal,* Part III, University of Oklahoma, pp. 177–300.

1973b Jirel Word List. In A. Hale (ed.), *Clause, Sentence and Discourse Paterns in Selected Languages of Nepal*, Part IV, University of Oklahoma, pp. 46–314.

MAZAUDON, Martine

1973 *Phonologie du Tamang (Népal)*. Centre National de la Recherche Scientifique, Société d'Études Linguistiques et Anthropologiques de France.

1976a *Tibeto-Burman Tonogenetics*. Linguistics of the Tibeto-Burman Area 3(2). [単刊]

1976b La formation des propositions relatives en tibétain. *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris* 73: 401–414.

1982 *Dzongkha Numerals*. Paper presented to the 15th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics.

1985 Proto-Tibeto-Burman as a Two-Tone Language? Some Evidence from Proto-Tamang and Proto-Karen. In G. Thurgood, *et al.* (eds.), *Linguistics of the Sino-Tibetan Area: the State of the Art*, Department of Linguistics, Research School of Pacific Studies, the Australian National University, pp. 201–229.

1986 Syllabicity and Suprasegmentals: The Voracious Dzongkha Monosyllable (Bhutan). 第十九回国際漢蔵学会発表論文。

MILLER, P. M.

1951 The Phonemes of Tibetan (U-Tsang Dialect) with practical romanized orthography for Tibetan-speaking readers. *Journal of the Asiatic Society* (Letters) 17(3): 191–216.

MILLER, Roy Andrew

1954 Morphologically determined Allomorphs in Spoken Tibetan. *Lg* 30: 458–460.

1955a The Independent Status of the Lhasa Dialect within Central Tibetan. *Orbis* 4(1): 49–55.

1955b Studies in Spoken Tibetan I: Phonemics. *JAOS* 75(1): 46–51.

1956a Segmental Diachronic Phonology of a Ladakh (Tibetan) Dialect. *ZDMG* 106: 345–362.

1956b *The Tibetan System of Writing*. ACLS Program in Oriental Languages, Series B, Aid 6.

1970 A Grammatical Sketch of Classical Tibetan. *JAOS* 90: 74–96. (Also reprined in Miller 1976, pp. 103–125.)

1976 *Studies in the Grammatical Tradition in Tibet*. Amsterdam Studies in the Theory and History of Linguistic Science III, Studies in the History of Linguistics Vol. 6, John Benjamins B. V.

民族語文編輯部（編）

1982 『民族語文研究文集』青海民族出版社。

NAGANO, Yasuhiko

1979 An Analysis of Tibetan Colour Terminology. *Monumenta Serindica* (Tibeto-Burman Studies 1) 6: 3–83.

1980 *Amdo Sherpa Dialect*. Monumenta Serindica, No. 7. [単刊]

1982a A Preliminary Report of the Three Tibetan Dialects in the Northern Gandaki Valley (: Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal). *Monumenta Serindica* 10: 81–157.

1982b A Historical Study of gLo Tibetan. 『国立民族学博物館研究報告』7(3): 472–513.

1984 *A Historical Study of the rGyarong Verb System*. Seishido.

1985 Preliminary Notes to gLo-skad. In G. Thurgood, *et al.* (eds.), *Linguistics of the Sino-Tibetan Area: the State of the Art*, Department of Linguistics, Research School of Pacific Studies, the Australian National University, pp. 451–462.

長野泰彦

1985 「チベット語の能格助詞と動詞の意味」『日本西蔵学会会報』31: 1–6。

NISHI, Yoshio

1979 A Bibliography of Tibeto-Burman Languages of Nepal (I): Tamang, Gurung, Thakali, Manang, Ghale, Kaike. *Monumenta Serindica* (Tibeto-Burman Studies 1) 6: 85–104.

1983 Classification of Some Tibetan Dialects of Nepal. 『愛媛大学法文学部論集（文学科編）』16: 51–70。

西　義郎

1977 「カガテ語（中央チベット方言）における緊高：緩低」『アジア・アフリカ計数研究』9: 25–37。

1979 「ネパールのチベット語方言について——Kagate 語，Sherpa 語，Jirel 語，Lhomi 語」*Yak* 3: 1–26。

西田龍雄

1957 「チベット語動詞構造の研究」『言語研究』33: 21–50。

1963 「十六世紀における西康省チベット語天全方言について——漢語・チベット語単語集いわゆる丙種本『西番館訳語』の研究」『京都大学文学部研究紀要』，pp. 85–174。

1970 『西番館語訳語の研究——チベット言語学序説』（華夷訳語叢書　I）松香堂。

1978 「チベット・ビルマ語と日本語」『岩波講座「日本語」』第12巻（日本語の歴史と系統）岩波書店，pp. 227–300。

1979 「チベット・ビルマ語と言語学」『言語研究』76: 1–28。

1982 「チベット語語彙体系の考察」昭和56年度特定研究『チベット文化の総合的研究』報告書，pp. 2–13。

1983 「チベット語の歴史と方言研究の問題」昭和57年度特定研究『チベット文化の総合的研究』報告書，pp. 3–20。

Olson, Robert F.

1974 Central Khams Tibetan: a Phonemic Survey. *Kailash* 2(3): 217–227.

Oppitz, Michael

1974 Myths and Facts: Reconsidering some Data concerning the Clan History of the Sherpas. *Kailash* 2(1/2): 120–131.

瞿霭堂

1962 「卓尼蔵語的声調与声韻母的関係」『中国語文』(7): 334–339。

1963 「蔵語概況」『中国語文』(6): 511–528。

1965 「蔵語的複輔音」『中国語文』(6): 446–458。

1979 「談談声調清濁対声調的影響」『民族語文』(2): 120–124。

1980 「阿里蔵語動詞体的構成」『民族語文』(4): 7–17。

1981a 「蔵語的声調及其発展」『語言研究』(1): 177–194。

1981b 「蔵語的変調」『民族語文』(4): 20–26。

1982a 「蔵語安多方言韻母演変情況提要」『民族語文研究文集』青海民族出版社，pp. 56–61。

1982b 「蔵語中的異根現象」『中央民族学院学報』(2): 56–61。

1983 「蔵語韻母的演変」『中国語言学報』(1): 250–268。

1984 「嘉戎語概況」『民族語文』(2): 67–80。

1985a 「蔵語動詞屈折形態的結構及演変」『民族語文』(1): 1–15。

1985b 「漢蔵語言調値研究的価値和方法」『民族語文』(6): 1–14。

瞿霭堂・金効静

1981 「蔵語方言的研究方法」『西南民族学院学報』(3): 76–83。

瞿霭堂・譚克讓

1983 『阿里蔵語』中国社会科学出版社。

Rangan, K.

1975 *Balti Phonetic Reader*. Central Institute of Indian Languages.

1979 *Purki Grammar*. Central Institute of Indian Languages.

Ray, Punya Sloka

1964 Outline of Lhasa Tibetan Structures. *Indian Linguistics* 25: 247–261.

1965 Kham Phonology. *JAOS* 85: 336–342.

Read, A. F. C.

1934 *Balti Grammar*. James G. Forlong Fund Vol. XV, The Royal Asiatic Society.

Richter, Eberhardt

1964a Zum Problem der Schaffung einer einheitlichen Umschrift (Transliteration und Transcription). *ZDMG* 114: 171–179.

1964b *Grundlagen der Phonetik des Lhasa-Dialektes*. Akademie-Verlag.

ROERICH, Georges de

1931 Modern Tibetan Phonetics, with special reference to the dialects of Central Tibet. *JASB* (n.s.) 27: 285–312. [1933年に発行]

1933 *Tibetical I. Dialects of Tibet, The Tibetan Dialect Of Lahul.* Ursvati Himalayan Research Institute of Roerich Museum.

1958 *Le parler de l'Amdo: Étude d'un dialecte archaïque du Tibet.* Serie Orientale Roma 18, Instituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.

RÓNA-TAS, A.

1966 *Tibeto-Mongolica: the Tibetan Loanwords of Monguor and the Development of the Archaic Tibetan Dialects.* Mouton & Co.

1967 Über die Entwicklung und Struktur des Tibetischen Tonemsystems. *Wissenschaftliche Zeitschrift der Karl-Marx-Universität. Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe* 16(1/2): 225–226.

SCHOETTELNDREYER, Burkhard

1971 *Person Markers in Sherpa.* SIL (Kathmandu).

1975a Clause Patterns in Sherpa. *Nepal Studies in Linguistics* 2: 1–57.

1975b Vowels and Tone in the Sherpa Verb. *Nepal Studies in Linguistics* 2: 59–70.

1978 Narrative Discourse in Sherpa. In J. E. Grimes (ed.), *Papers on Discourse,* SIL Publications in Linguistics and related Fields No. 51, University of Oklahoma, pp. 248–266.

SCHOETTELNDREYER, Burkhard & Heiderose SCHOETTELNDREYER

1973a Sherpa Texts. In A. Hale (ed.), *Clause, Sentence and Discourse Patterns in Selected Languages of Nepal,* Part III, University of Oklahoma, pp. 53–176.

1973b Sherpa Word List. In A. Hale (ed.), *Clause, Sentence and Discourse Patterns in Selected Languages of Nepal,* Part IV, University of Oklahoma, pp. 46–313. [動詞の部分を除外。]

1974 *A Vocabulary of the Sherpa Language.* SIL (Kathmandu). [動詞も含む。]

SCHOETTELNDREYER, Burkhard & Austin HALE

1970 A Note on Sherpa Vowels. In A. Hale and K. L. Pike (eds.), *Tone Systems of Tibeto-Burman Languages of Nepal,* Part 1, Department of Linguistics, University of Illinois, pp. 368–380.

SCHOETTELNDREYER, Heiderose

1971 *A Guide to Sherpa Tone.* (Guide to Tone in Napal V) SIL (Kathmandu).

SEDLÁČEK, Kamil

1959 The Tonal System of Tibetan (Lhasa Dialect). *TP* 47(3): 181–250.

SHAFER, Robert

1951 Studies in the Morphology of Bodic Verbs. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 13: 702–724; 1017–1031.

1955 Classification of the Sino-Tibetan Languages. Word. 11:94–111.

1957 *Bibliography of Sino-Tibetan Languages.* Otto Harrassowitz.

1963 *Bibliography of Sino-Tibetan Languages.* Vol. 2. Otto Harrassowitz.

SHARMA, D. D.

1982 *Studies in Tibeto-Himalayan Linguistics: A Descriptive Analysis of Pattani (a Dialect of Paṭṭani).* Panjab University Indological Series-28, Vishveshvaranand Vishva Bandhu Institute of Sanskrit and Indological Studies, Panjab University.

SHARMA, Suhnu R.

1979 Phonological Structure of Spiti. *LTBA* 4(2): 83–110.

SNELLGROVE, David

1961 *Himalayan Pilgrimage.* Bruno Cassirer.

SPRIGG, R. K.

1954 Verbal Phrases in Lhasa Tibetan (I–III). *BSOAS* 16: 134–156 (I); 320–350 (II); 566–591 (III).

1955 The Tonal System of Tibetan (Lhasa Dialect) and the Nominal Phrase. *BSOAS* 17: 133–156.
1961 Vowel Harmony in Lhasa Tibetan: Prosodic Analysis applied to Interrelated Vocalic Features of Successive Syllables. *BSOAS* 24: 116–138.
1966 *Introduction to Sino-Tibetan.* Part 1. Otto Harrassowitz.
1966 Lepcha and Balti Tibetan: Tonal or Non-Tonal Languages. *Asia Major* (n.s.) 12(2): 185–201.
1967 Balti-Tibetan Verb Finals, and a Prododic Analysis. *AM* (n.s.) 13(1/2): 187–201.
1968 The Role of R in the Development of the Modern Spoken Tibetan Dialects. *Acta Orientalia* (Hungaricae) 21(3): 301–311.
1970 *Vyanjanabhakti*, and Irregularities in the Tibetan Verb. *Bulletin of Tibetology* 7(2): 5–19.
1972a A Polysystemic Approach, in Proto-Tibetan Reconstruction, to Tone and Syllable-Initial Consonant Clusters. *BSOAS* 35: 546–582.
1972b Assimilation, and the Definite Nominal Particle in Balti Tibetan. *Bulletin of Tibetology* 9(2): 5–19.
1974 The Main Features of the Tibetan Dialect. *Bulletin of Tibetology* 11(1): 11–15.
1976 Tibetan: Its Relation with Other Languages. *Tibetan Review* 11(4): 14–16.
1979 The Golok Dialect and Written Tibetan (WT) Past-Tense Verb Forms. *BSOAS* 42: 53–60.
1980 Vowel Harmony in Noun-and-Particle Words in the Tibetan of Baltistan. *BSOAS* 43: 511–519.

STRAHM, Esther
1975 Clause Pattens in Jirel. *Nepal Studies in Linguistics* 2: 71–146.
1978 Cohesion Markers in Jirel Narrative. In J. E. Grimes (ed.), *Papers on Discourse*, SIL Publications in Linguistics and related Fields No. 51, University of Oklahoma, pp. 342–348.

STRAHM, Esther & Anita MAIBAUM
1971 *Jirel Phonemic Summary.* (Tibeto-Burman Phonemic Summaries-XI) SIL (Kathmandu).

SUEN, Jackson T.-S.
1981 *Aspects of the Historical Phonology of Amdo Ndzorge Tibetan.* Paper presented to the 14th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics.

孫宏開
1983 「六江流域的民族語言及其係属分類」『民族学報』(3): 99–273。

孫宏開・陸紹尊・張済川・欧陽覚亜
1980 『門巴，珞巴，僜人的語言』中国科学出版社。

武内紹人
1979 「チベット語 Thingri 方言について」『日本西蔵学会会報』25: 6–10。

譚克讓
1980 「阿里蔵語的複元音」『民族語文』(3): 32–40 。
1982a 「阿里蔵語構詞中的音節減縮現象」『民族語文』(1): 220–227。
1982b 「蔵語拉薩話声分類和標法芻議」『民族語文』(3): 33–37。
1985 「蔵語擦音韻尾的演変」『民族語文』(4): 15–23。

THOMAS, F. W.
1948 *Nam, an Ancient Language of the Sino-Tibetan Borderland.* Publication of the Philological Society, No. 14, Oxford University Press.

THURGOOD, Graham
1985 Pronouns, Verb Agreement System and the Subgrouping of Tibeto-Burman. In G. Thurgood, *et al.* (eds.), *Linguistics of the Sino-Tibetan Area: the State of the Art*, Department of Linguistics, the Research School of Pacific Studies, Australian National University, pp. 376–400.

THURGOOD, Graham, James A. MATISOFF & David BRADLEY (eds.)
1985 *Linguistics of the Sino-Tibetan Area: the State of the Art.* Papers Presented to Paul K. Benedict for his 71st Birthday, Pacific Linguistics, Series C, No. 87, Department of Linguistics, Research School of Pacific Studies, The Australian National University.

URAY, Geza
1949 *Kelet-Tibet nyelvjárásainak osztályozása.* Dissertationes Sodalium Instituti Asiae Interioris 4, Budapest.
1953 Some Problems of the Ancient Tibetan Verbal Morphology. *Acta Linguistica* (Hungaricae) 3: 37–62.
1954 Review of M. Hermanns, "Tibetische Dialekte von A mdo". *AO* (Hungaricae) 4: 308–314.
1955 On the Tibetan Letters *ba* and *wa*: Contribution to the Origin and History of the Tibetan Alphabet. *AO* (Hungaricae) 5: 101–122.

VESALAINEN, Olavi & Marja VESALAINEN
1976 *Lhomi Phonemic Summary.* SIL and INAS (Kathmandu).
1980 *Clause Patterns in Lhomi.* Pacific Linguistics, Series B, No. 53.

王青山
1982 「青海環海区蔵語的動詞重畳式」『民族語文研究文集』pp. 114–129。

王堯
1956 「蔵語的声調」『中国語文』(6): 28–32。
1981 「蔵語 mig 字古読考——兼論蔵語声調的発生与発展」『民族語文』(4): 15–19。

WALSH, E. H. C. (ed.)
1905 *A Vocabulary of the Tromowa Dialect of Tibetan*, spoken in the Chumbi Valley, together with a corresponding vocabulary of Sikkimese and of Central (Standard) Tibetan. The Bengal Secretariat Book Depot.

WEIDERT. K. Alfons
1986 Tonogenesis in the Tibetan Dialects of Bhutan. 第十九回国際漢蔵学会発表論文。

WEN, Yu
1946 Phonetic Changes of Superadded and Prefixed Letters in Eastern Tibetan Dialects. *Studia Serica* 5: 1–22.
1948 Studies in Tibetan Phonetics, Sde-dge Dialect. *Studia Serica* 7: 63–78.

謝広華
1982 「蔵語動詞語法範疇」『民族語文』(4): 35–47。
1985 「拉薩蔵語的句法結構」『民族語文』(6): 27–32。

湯川恭敏
1966 「チベット語の duu の意味」『言語研究』49: 77–84。
1971 「チベット語音韻論におけるいくつかの問題」『言語学の基本問題』大修館, pp. 141–160。

張済川
1981 「蔵語拉薩話声調分化的条件」『民族語文』(3): 14–18。
1982 「古蔵語塞音韻尾音初探」『民族語文』(6): 17–30。

ZHANG Liansheng
1986 The Puzzle of da-drag in Tibetan. *LTBA* 9(1): 47–64.

張恰蓀主（編）
1985 『蔵漢大辞典 (Bod-rgja tshig-mdzod tɕhen-po)』(三巻) 民族出版社。

趙元任（記音），于道泉（編注）
1930 『第六代達頼喇嘛，倉洋嘉錯情歌』国立中央研究院歴史語言研究所単刊甲種之五，北平。

周季文
1982 「蔵語拉薩話的白文異読」第十五回国際漢蔵言語学会議提出語文。

ZIMMERMANN, Heinz
1979 *Wortart und Sprachstruktur in Tibetischen.* Freiburger Beiträge zur Indologie, Band 10, Otto Harrassowitz.

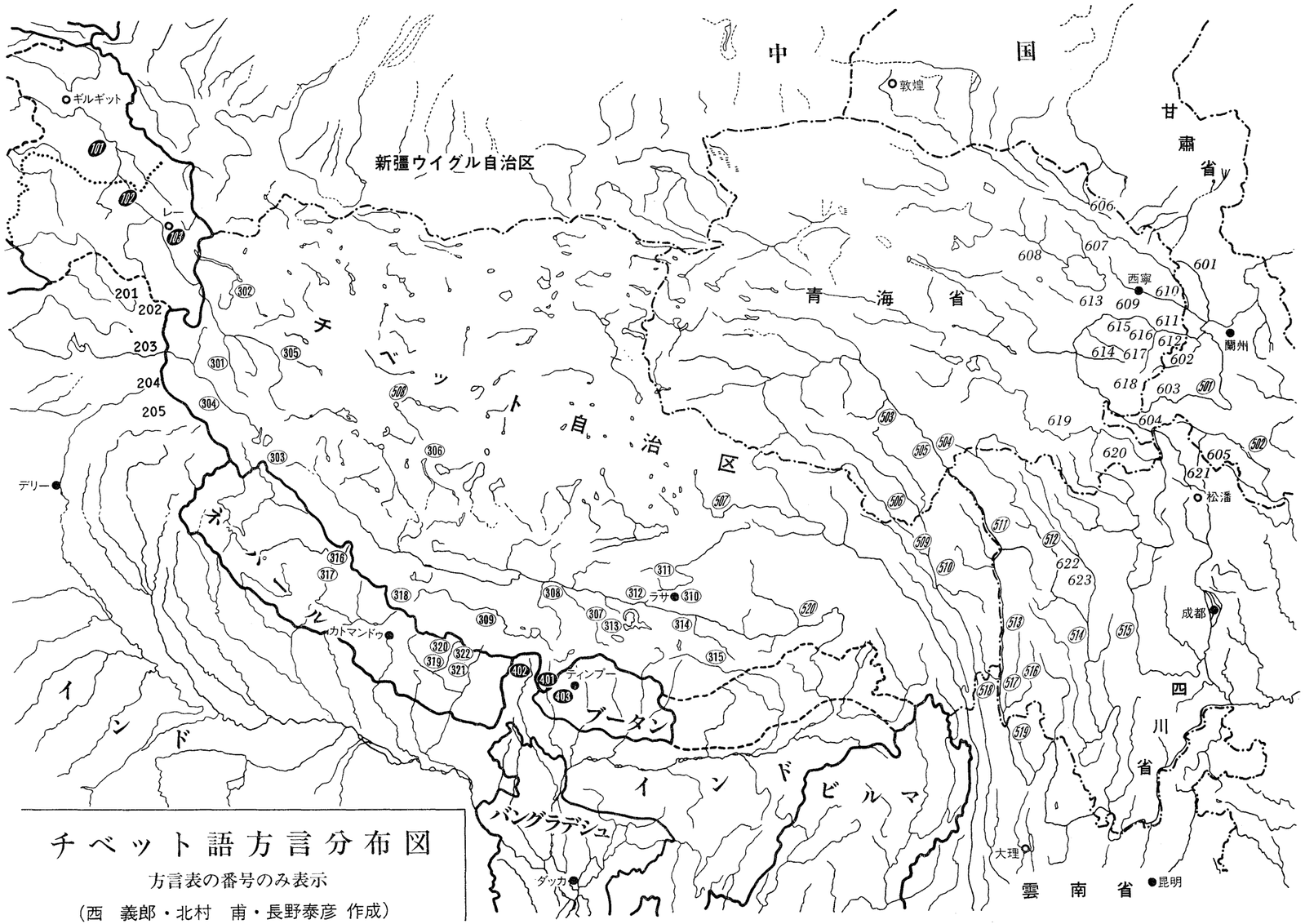
チベット語方言名表

＊本文中に触れた方言の分布を示した。
＊この表の番号と分布図のそれとは一致している。例えば，101は「西部古方言」の「バルティ」。
＊（　）内には，できる限り，チベット語正書法と中国語表記とを示した。地域によってこれが難しい場合は慣用的表記を挙げてある。

1. 西部古方言 (Western Archaic Dialects)
   01. バルティ (sBal ti: Balti) 方言（パキスタン北部）
   02. プリク (Bu rig: Purik/Purki) 方言（インド西北部）
   03. ラダク (La dwags: Lədəks/Ladakhi) 方言（同上）
2. 西部改新的方言 (Western Innovative Dialects)
   01. ラフール (Lahul) 方言（インド西北部）
   02. スピティ (Spiti) 方言（同上）
   ?03. ニャム (mNyam) 方言（同上）
   ?04. ジャド (Jaḍ) 方言（同上）
   ?05. ガルワル (Garhwal) 方言（同上）
3. 中央方言［＝ユー・ツァン (dBus gTsang: 衛蔵) 方言］(Central Dialects)
   01. カル (sGar: 噶爾) 方言（チベット自治区ガリ〔阿里〕地区）
   02. ルト (Ru thog: 日土) 方言（同上）
   03. プラン (sPu hreng: 普蘭) 方言（同上）
   04. ツァンダ (rTsa mda': 札達) 方言（同上）
   05. ケゲ (dGe rgyas: 革吉) 方言（同上）
   06. ツォチェン (mTsho chen: 措勤) 方言（同上）
   07. ギャンツェ (rGyal rtse: 江孜) 方言（チベット自治区シガツェ〔日喀則〕地区）
   08. シガツェ (gZhis ka rtse: 日喀則) 方言（同上）
   09. ティンリ (Ding ri: 定日) 方言（同上）
   10. ラサ (hLa sa: 拉薩) 方言（チベット自治区ラサ城関区）
   11. ペンポ ('Phan po: 澎波) 方言（チベット自治区ラサ地区）
   12. チュシュル (Chu shur: 曲水) 方言（同上）
   13. ナンカルツェ (sNa dkar rtse: 浪卡子) 方言（チベット自治区山南地区）
   14. ツェタン (rTse thang: 沢当) 方言（同上）
   15. ルンツェ (hLun rtse: 隆子) 方言（同上）
   16. ロ (gLo; Mustang) 方言（西ネパール）
   17. バラガオン (Baragaun) 方言（同上）
   18. キロン (sKyid grong: 吉隆) 方言（チベット自治区山南地区）
   19. カガテ (Kagate)/シューバ (Syuuba) 方言（東ネパール）
   20. ジレル (Jirel) 方言（同上）
   21. シェルパ (Shar-pa:Sherpa: 夏爾巴) 方言（東ネパール；中国チベット自治区山南地区）
   22. ロミ (hLo mi)/シンサパ (Shingsapa) 方言（東ネパール）
4. 南部方言 (Southern Dialects)
   01. トモ (Gro mo: 卓木)/亜東方言（チベット自治区シガツェ地区）
   02. シッキム (Sikkhimese)/デンジョン ('Bras ljongs) 方言（東北インド：旧シッキム）
   03. ブータン (Bhutan) 方言（ブータン）
5. カム (Khams: 康) 方言 (Khams Dialects)
   01. チョネ (Co ne: 卓尼) 方言
   02. トゥクチュ ('Brug chu: 舟曲) 方言
   03. ティトェ ('Bri stod: 治多) 方言（青海省ユーシュー〔玉樹〕チベット族自治州）

04. ティドゥ (Khri 'du: 称多) 方言 (同上)
05. ジェクンド=ケグム〔ド〕(sKye rgu [mdo]: 結古〔多〕) 方言 (同上)
06. ナンチェン (Nang chen: 嚢謙) 方言 (同上)
07. ナクチュ (Nag chu: 那曲) 方言[=黒河方言] (チベット自治区ナチュ地区)
08. ケルツェ (rGer rtse: 改則) 方言 (チベット自治区ガリ地区)
09. チャムド (Chab mdo: 昌都) 方言 (チベット自治区チャムド地区)
10. タギャプ (Brag g-yab: 察雅) 方言 (同上)
11. デルゲ (sDe dge: 徳格) 方言 (四川省カンツェ〔甘孜〕チベット族自治州)
12. カンツェ (dKar mdzes: 甘孜) 方言 (同上)
13. パタン ('Ba' thang: 巴塘) 方言 (同上)
14. ニャクチュカ (Nyag chu kha: 雅江) 方言 (同上)
15. ムヤ (木雅) 方言 (同上)
16. チャクテン (Phyag phreng: 郷城) 方言 (同上)
17. デロン (sDe rong: 得栄) 方言 (同上)
18. デチェン (bDe chen: 徳欽) [=チュー ('Jul)] 方言 (雲南省デチェン・チベット族自治州)
19. 中甸 [=ゲェータン (rGyal thang)] 方言 (同上)
20. ニンティ (Nying-khri: 林芝) 方言 (同上)

6. アムド (A-mdo: 安多) 方言 (Amdo Dialects)
01. 天祝方言 (甘粛省武威地区天祝チベット族自治県)
02. ラブラン (bLa brang: 拉卜楞) 方言 (甘粛省甘南チベット族自治州)
03. ルチュ (Klu chu: 碌曲) 方言 (同上)
04. マチュ (rMa chu: 瑪曲) 方言 (同上)
05. アムド・シェルパ (A mdo shar pa:Amdo Sherpa) 方言 (同上)
06. アリク (A rig: 阿力克) 方言 (青海省海北チベット族自治州)
07. カンツァ (rKang tsha: 剛察) 方言 (同上)
08. 天峻方言 (青海省海西モンゴル族チベット族ハザク族自治州)
09. 湟中方言 (青海省海東地区)
10. 楽都方言 (同上)
11. 化隆方言 (青海省海東地区化隆回族自治県)
12. 循化方言 (青海省海東地区循化サラル族自治県)
13. 共和方言 (青海省海南チベット族自治州)
14. 貴南方言 (同上)
15. 同徳方言 (同上)
16. チェンツォ (gCen tsho: 尖扎) 方言 (青海省黄南チベット族自治州)
17. 同仁方言 (同上)
18. ツェコック (rTse khog: 沢庫) 方言 (同上)
19. カデ (bsKal ldan: 甘徳) 方言 (青海省ゴロック [果洛] チベット族自治州)
20. チクティー (gCig sgril: 久治) 方言 (同上)
21. ツォゲ (mDzo dge: 若爾盖) 方言 (四川省ガバ [=アバ 阿垻] チベット族自治州)
22. タッコ (Brag 'go: 炉霍) 方言 (四川省カンツェ・チベット族自治州)
23. タウ (rTa 'u: 道孚) 方言 (同上)



チベット語方言分布図

方言表の番号のみ表示

(西 義郎・北村 甫・長野泰彦 作成)